生駒経済論叢　第6巻第2号　2008年10月

# マーシャルの進化論的経済学[1]における人間の性格の検討

## ――幸福と貧困との対置的性質の観点から――

礒　川　　曠

目　次

0. 幸福と貧困との対置的性質
Z1：本稿の目的とその叙述の順番
Z2：幸福あるいは貧困の源泉の二重の規定
0-1 経済活動の変化を支配する物的要因と非物的要因
A1：広義の経済学
A2：定常状態に関するマーシャルの動態的解釈：人間の性格の変化
0-2 生物学的類似での人間の性格の段階的変化
A3：分化と統合による段階的変化：低級から高級な段階へ
A4：人間の性格の高級化：人間にとって望ましいこと
0-3 幸福あるいは貧困の非物的源泉としての人間の性格
A5：幸福あるいは貧困の物的源泉と非物的源泉
A6：次の検討課題
1. 「生活水準」と「安楽水準」との対置的性質
B1：マーシャルの経済進歩の観念の原点
1-1 「生活水準」と「安楽水準」の定義
1-2 人間性格の悪化の事例1：馬や奴隷の養育・訓練
1-3 人間性格の悪化の事例2：悪弊をもたらした救貧行政
B2：「安楽水準」の改善が貧困を招く場合
B3：19世紀イギリスの救貧行政の弊害の事例
B4：「生活水準」と「安楽水準」の概念の対置的性質
2. 生産効率必需品
2-1 アダム・スミスによる生活必需品の2分法
C1：アダム・スミスの生活必需品の3分法
C2：アダム・スミスの「社会的必需品」：生活必需品の2分法
2-2 マーシャルの「快適水準」概念と生活必需品の3分法
C3：『産業経済学』の「快適水準」：無分別な結婚の自制
C4：親による子どもへの教育投資：スミスの事例の批判
C5：親による子どもへの教育投資：マーシャルの4つの事例
C6：人間の肉体的活力：『産業経済学』の生産効率の条件
C7：人間の精神的知的能力：『産業経済学』の生産効率の条件
C8：人間の道徳的性格：『産業経済学』の生産効率の条件
2-3 マーシャルの生産効率必需品（necessaries for efficiency）
C9：生産効率必需品とアダム・スミスの「社会的必需品」との対比
C10：生産効率必需品の3段階の用途：住居の事例
C11：生産効率必需品の3段階の用途：最低な社会階層の事例
C12：生産効率必需品の概念の創造の意義
3. 人間の道徳的性格の高級化の遅さ
3-1 卓越それ自体への欲望を動機とする人間の性格の高級化

D1：道徳的性格の高級化を求める生産効率必需品の第3段階の用途
D2：人間の高級な活動とは
D3：活動の動機としての，卓越の欲望と自己顕示の欲望の対比
D4：卓越の欲望の登場と道徳的性格の高級化の必要性
D5：生産効率必需品の創造の意義の再確認：人間の性格の最高級化
D6：名も知れぬ漁師の事例：彼の活動の3段階の高級化
3-2　幸福あるいは貧困の非物的源泉としての道徳的性格
D7：自尊心の高級化の重要性の確認
D8：幸福あるいは貧困の物的源泉の所得の大変化と小変化の結果の相異
D9：非物的源泉の享受の仕方の相違で結果される幸福と貧困
D10：貧困の最悪の事例：「労働者階級の将来」という論文の事例
3-3　経済進歩の抱える困難：道徳的性格と芸術的性格の統合化
D11：人間の活動能力の新しい3段階：芸術的性格の新しい分化
D12：芸術的性格と卓越それ自体を求める欲望との関係
D13：芸術的性格の段階的高級化の議論の要約
D14：生物進化の新見解と幸福と貧困の対置的性質の関係
D15：幸福あるいは貧困の源泉の段階的変化と生物のそれとの類似
D16：遺伝子と遺伝子の発現を制御する遺伝子との2次元的視点
D17：中間段階としての道徳的性格の高級化の困難さ
エピローグ：経済的騎士道の提唱

**要旨**　本稿の目的は，マーシャル（Alfred Marshall, 1842－1924）の進化論的経済学において，人間の性格（character）を幸福あるいは貧困の非物的源泉と見なすこと，この性格の高級化の困難さで経済進歩が困難であることを示した。この議論は以下のようである。経済進歩は，人間の幸福な状態の持続とすれば，人間の性格の高級化を求める。この最高級化の段階は，性格の段階的変化において，芸術的性格と卓越の活動との結合を求める。この段階で道徳的性格は高級化の段階の中間段階に位置するが，この中間段階よりも前の段階では，人々が貧困に導かれやすい傾向をもち，この後の段階では幸福に導かれやすい傾向をもつのである。われわれは，人々のこの生活状態の特徴を，幸福と貧困の対置的性質とよんだ。

**キーワード**　アルフレッド・マーシャル（1842－1924），進化論的経済学，経済進歩，幸福と貧困との対置的性質，人間の性格
**原稿受理日**　2008年9月26日

**Abstract**　This paper looks at the following two points in evolutionary economics as proposed by Alfred Marshall (1842–1924): firstly, that human character, not material things, is the source of happiness or poverty; and secondly, that the speed of the step-by-step change in human character drives economic progress.　The discussion in this paper is developed as follows: on one side, economic progress is the lasting element creating happiness for people, it requires a step-by-step upgrading of human character.　On the other side, economic decline is the lasting element driving people into poverty, and this brings about the step-by-step degrading of human

character. Finally, we have found that, on an analogy with biological step-by-step upgrading, moral character is at the intermediate step and this type of upgrading is slow. Control over human character development is very difficult. This slowness and difficulty create serious barriers to economic progress.

**Key words** Alfred Marshall (1842－1924), evolutionary economics, economic progress, opposite nature of happiness and poverty, human character

# 0.　幸福と貧困との対置的性質

## Z1：本稿の目的とその叙述の順番

本稿の目的は，マーシャル（Alfred Marshall, 1842－1924）の経済学において，第1に，人間の性格（character）を幸福あるいは貧困の非物的源泉と見なすこと，第2に，この性格の高級化速度の遅さのために経済進歩が現実には困難であるとマーシャルが考えていたことを示すことである。マーシャルの時代でもなお，多数の労働者が貧困であったが，この原因こそは，人間の道徳的性格の高級化の速度が遅いことにくらべてその低級化（あるいは悪化）の速度が相対的に速いことである。本稿の A5 で示すように，幸福あるいは貧困を直接に支配するのはマーシャルでは「生活水準」と「安楽水準」であり，この性格は源泉として間接にしか支配しない。その上，この性格の高級化は，幸福状態の実現あるいは貧困状態の根絶においてきわめて重大な役割を果たすのである。この重要な役割を果たすことをわれわれはまず，本稿の 1-2，1-3，B2，B3，C5，C10，C11，D6，D8，D9，D10 におけるマーシャルの事例の検討で示した。そして，この重要な役割は，次のような人間性格の高級化の段階の更新によってより重要になることを示す予定である。われわれは，本稿の A5 と B4 で予告して，D11 で示すように，人間の性格全体がその段階的変化の過程でその高級化の段階を一段階引き上げることを，まず指摘する。この変化の結果，われわれは，道徳的性格がこの変化の前では最高級の第3段階にあったのに，この変化の後では第2段階である中間段階へと高級化の段階を変えることも，指摘する予定である。相対的には，道徳的性格は，低級化したように見えるが，人間の性格の高級化の段階が高級化したので，以前よりも高い高級化のレベルが求められる。このことは，本稿の D12 以降で，人間の活動能力が最高級の段階に向かって高級化する問題として議論される予定である。まさに，このように見た人間の性格の段階的高級化の中間段階の前の段階では，人々が貧困に導かれやすい傾向をもち，この後の段階では幸福に導かれやすい傾向をもつのである。それゆえ，人々の幸福状態と貧困状態は，一方が存在すれば他方が存在しえないのではなく，生物の自然淘汰の法則に従って環境の変化への適応に成功すれば経済学的には幸福に導かれ，逆であれば貧困に導かれる傾向をもつのである。われわれはこの現象を本稿では幸福と貧困の対置的性質をよぶ。この対置的性質に関しては，本稿の D14，D17 でまとめて検討しているが，この性質は本稿を通して貫くテーマである。

マーシャルは，生物が多種多様な環境に適応して多種多様に存続していることの類似で

人間の活動能力も多種多様である，と想定した。われわれは最近の遺伝に関する生物学の発展から，生物の遺伝子が多種多様であり，しかも，遺伝子の形質を生物の発生においていつどこで発現させるかを支配する遺伝子が存在していることを知った。（本稿の D14 と D15 を見よ。）生物学からの新しい類似で考えると，人間の活動能力は，たとえ，とても貧しい人でも富裕な人でも，潜在的に生まれながらにして同じように内在している。ただ，それは発現していない，つまり顕在化していないだけなのである。この類似で人間の活動能力の顕在化あるいはその行使を考えると，幸福あるいは貧困の源泉は二重に考えることができる。人間が活動するには活動手段が必要である。後に本稿の 2-3 で示すように，本稿ではこの手段は生産効率必需品とよばれる。そしてこの必需品は物的と非物的の 2 つに分類される。この必需品とその 3 段階の用途こそは，幸福あるいは貧困の源泉の具体的姿なのである。物的生産効率必需品は，物的富と見なしても良いであろう。非物的生産効率必需品は，実は，人間の活動能力そのものなのである。上で取り上げた道徳的性格はこの活動能力に影響する一つの要素である。そこで，遺伝子と，その発現を支配する遺伝子という生物学的関係は，幸福あるいは貧困の源泉における，物的と，非物的との関係に対応する，とわれわれは見なすのである。しかも，われわれは幸福あるいは貧困の非物的源泉の中で，道徳的性格がその段階的変化の中間段階に位置づけることによって，幸福と貧困との対置的性質に大きな影響を与えることを示す予定である。（本稿の D16 をみよ。）本稿は，このことを明らかにすることを通して，マーシャルが経済進歩の困難さを主張すると共に，彼の議論を貧困の絶滅に力点を置いたことを示すであろう。

### Z2：幸福あるいは貧困の源泉の二重の規定

われわれは上の Z1 の二つの段落で幸福あるいは貧困の源泉を 2 重に規定している。一つは人間の性格，もう一つは生産効率必需品である。この二つの概念の関係を，もう少しだけはっきりさせておこう。源泉を二重に規定する最大の理由はわれわれの考えでは，人間の性格が芸術的性格の新しい分化に伴って新しい形態に統合化して高級化することを示すためである。（この詳しい議論は本稿の D11 を参照されたい。）ここでは，この論点の理解を容易にするために，人間の性格と生産効率必需品の関係を簡単に説明しておきたい。本稿でわれわれが人間の性格で意味しようとすることは，次のことである。まず，人間の性格は，人間の活動能力と，それが活動環境において人間にとって望ましい形態かそれとも望ましくない形態で行使される仕方と，の二つを意味している。もちろん，この二つは分離しては意味が成り立たない。なぜなら，本稿の A3 で示すように，「習うよりも慣れ

ろ」が意味することは，人間の活動能力が実際に行使されることで変化し，しかもまったく行使されないことはこの活動能力を消滅させることに等しいからである。この変化と類似して，人間の活動能力は，望ましい形態で行使されると高級化するし，望ましくない形態で行使されると低級化する。このように，われわれは，人間の活動能力とその行使の仕方の二つは密接で不可分と見なすから，この二つの変化を全体として示すとき人間の性格の変化，と呼ぶことにする。人間の性格は，芸術的性格が分化する前では肉体的性格，精神的知的性格，道徳的性格である。この分化後では，肉体的精神的性格，道徳的性格，芸術的性格の3段階の形態に更新される(2)。これらのことについては，本稿の A5，D11，D13 を参照されたい。他方，われわれは，生産効率必需品も幸福あるいは貧困の源泉と見なす。というのは，人間の性格を固有に研究するのは，経済学ではなくどちらかといえば，心理学などであろう。それで，人間の性格そのものを直接的に経済的変数そのものと見なすことは，適切とは思われない（*Principles*, 16-7)。そこで，われわれは人間の性格を幸福あるいは貧困の源泉の非物的源泉と見なすのに対して，所得などの物的富をその物的源泉と見なすことにしたのである。そしてわれわれは，物的と非物的源泉を経済的意味で一つの用語で呼ぶときには，生産効率必需品と呼ぶのである。だから，われわれはこの必需品を，経済学的意味で源泉の具体的姿としての変数であると見なすのである。というのは，われわれは，幸福あるいは貧困の源泉といえば，マーシャルが広義の経済学を考えているからこそ，生産効率必需品をかれの経済学の範囲内でこの源泉と定義していると解釈するのである。しかも，この必需品には，本稿の C10 で示すように，3段階の用途が規定されている。それゆえ，この必需品も，人間の性格と同様に，二重に規定されている。つまり，この必需品そのものと，その3段階の用途である。この必需品の用途は，人間の活動環境で望ましい形態で享受されると人間の性格を高級化し，逆な形態であれば低級化する。このように，われわれは，幸福と貧困の源泉を実際的意味においては生産効率必需品とその3段階の用途と見なすが，本質的に高級化あるいは低級化するのは，つまり段階的に変化するのは，人間の活動能力とその行使の仕方であると見なす。本稿の以後の議論でわれわれは，上の区分を踏まえながら，人間の性格の段階的変化としては人間の活動能力とその行使の仕方との段階的変化に力点を置いて叙述するであろう。なお，生産効率必需品の概念については，本稿の 2-3 を参照されたい。

上の，人間の性格の変化の叙述のことを含めて本稿の論旨の叙述の仕方について簡潔にまとめておこう。われわれは，幸福あるいは貧困を支配する原因から見れば，最も現象の表面から遠い場所にある源泉の検討を本稿の一番最後〈3. 人間の道徳的性格の高級化の遅

さ〉においた。というのは，人間の活動の段階的変化から見れば，生物の進化に類似して，人間の活動能力はより簡単で低級な形態からより複雑で高級な形態に変化する。これから見れば，つまり，人間の活動が幸福あるいは貧困の源泉の源泉としての活動能力に対応して変化すると考えると，変化の初めの方では分化して3つの段階に分化する。これを出発点と考えると，次に，人間の行動がその具体的で複雑な現象レベルで把握されると，人間の活動能力が再び統合化されるときには「生活水準」や「安楽水準」に支配されるであろう形態における人間の活動が派生的に分化した段階と見なせる。このようにして最後には，人間の活動状態は，幸福な状態あるいは貧困な状態で生活するという段階に分化と共に統合化される段階に至るはずとみなせる。だから，この順番では，われわれは幸福あるいは貧困の源泉そのものの解明を本稿の初めにすべきである。しかし，われわれの叙述の仕方は逆である。本稿の解明の焦点が，この源泉としての人間の性格にあるので，この転倒をしたのである。したがって，本稿の A5 での人間の性格の議論は，この性格の定義をしただけにすぎない。本稿は全体としては，マーシャルの幸福と貧困の議論を解明することから見れば，演繹的分析の出発点を設定しようとするのである。そこで，われわれは貧困と幸福の対置的性質の解明の旅を，経済変化に関わる人間の活動を支配する物的要因と非物的要因の分類を検討することから始めよう。（この2つの要因は，それと対応する2つの源泉に本稿の A5 でその名前を変更される。）

### 0-1　経済活動の変化を支配する物的要因と非物的要因

#### A1：広義の経済学

マーシャルは，1890年に初版を公刊した『経済学原理』（以下『原理』と略す）の本文冒頭で，経済学が一方で富の研究であるが他方でより重要な側面では人間研究の一部であると述べると共に，その理由として端的に，人間の性格が日々の活動の遂行で変化すると述べている（*Principles*, 1）[3]。つまり，マーシャルは，経済活動の変化は，富の変化に由来する部分と人間の性格の変化に由来する部分が結合されて形成されていると見なしている。経済的変化は富の変化と人間の性格の変化と相関しているのである。もちろん，人間の性格は体力や知性などの活動能力等で形成され，この性格の高級化はこれらの活動能力の変化と相関している。そこで，われわれは，これ以後，経済活動の変化の中で物的富に由来する部分を物的要因と呼び，人間の性格を含めた，人間の活動能力に由来する部分を非物的要因とよぶことにする[4]。これら二つの要因の結合を詳しく説明することによって，人間の経済状態のもっとも重要な指標としてマーシャルが採用した，幸福の概念と貧

困の概念の対置的性質が人間性格の高級化，低級化あるいは悪化と緊密に結びついていることが十分に説明できると思われる。ここでこれら二つの概念が対置的というのは，マーシャルが進化論的経済観に立つことによって，幸福を人間にとって望ましいこと，実現すべきこと，それと対置して貧困を望ましくないこと，したがって根絶すべきことと考えていることである。しかも，われわれは，本稿の Z1 の第1パラグラフで説明したように，これら二つの概念の対置的性質を，対立概念のごとくに一方が存在するときには他方が存在しえないという二者択一的概念とは考えないで，経済変化の中で幸福と貧困が同時に存在するとマーシャルが考えていたことを意味させたいのである。生物学の進化論によれば（本稿の 0-2 で示すように），生物は当該の生存環境に適応することで存続に成功するが，この成功の背後では別な生物がこの生存環境に適応することに失敗して消滅することを意味する。この自然選択の法則をマーシャルは，経済制度と人間に適用してはいるものの，幸福を導く人間の努力を優勢にしつつ貧困を導く人間の活動を弱体にするような経済社会と人間のあり方を示そうとしたのである（*Principles*, 240-2）。しかし，このあり方の本稿での検討は，進化論的観点に立つマーシャルの経済学全体像から見れば一部分の説明を構成するにすぎない。

### A2：定常状態に関するマーシャルの動態的解釈：人間の性格の変化

われわれはここで前置き的に，マーシャルが，経済変化を生物の段階論的変化と類似な変化という意味で動態的だとみなすとき，人間の性格を決定的に重要な要素だと考えていることを示そう。これは，本稿の以下の議論全体の理解への有用な道案内になると思われる。これに関するマーシャルの議論は次のようである。この議論は定常状態という静学的工夫に関して，古い学説と彼の学説の相違を強調するために使われている。この議論は，彼の論文「経済学における生物学的類似と力学的類似」（*Marshall-1898*）で展開されている。その要旨は，経済変化が生物学的段階的変化と類似で変化していると考えるマーシャルから見れば，定常状態（stationary state）という静学的工夫は，人間の性格が不変量であると想定されていることでしかない。もう少し詳しく見てみよう。この工夫では，土地の不足はなくて土地収穫不変であるとすれば，人口と富という変数は増加しているが，それらは同一の率で増加している。しかし，生産方法と市場の条件は，「人間自身の性格が不変量であるところでは」ほとんど変化しない。この状態では生産と消費，交換と分配，これらの変数に関するもっとも重要な条件がまったく同一な質であり同一な一般的関係であるのに対して，これらの変数の量はすべて増加している（*Memorials*, 315）。

このような定常状態に関して，古い学説の代表としてJ・S・ミルの説を見れば，この状態が経済進歩の過程では避けることができないことである共に，人間にとって望ましくはないことはないのである（*Mill-1848*, vol. 3, 752–6）。ミルは，定常状態を消極的にではあるが，人間のあるべき姿の一つとして肯定しているのである。しかし，マーシャルは，人間の性格が変数であり，高級化もすれば低級化あるいは悪化もすると見なす。人間の性格を不変とするような定常状態の内容を彼は，人間にとって望ましいものとして消極的にでも肯定するわけにはいかなかったであろう。とはいうものの，マーシャルは分析道具としては定常状態に興味を持った。彼は『原理』では，人間の性格を不変とするかわりに，需要と供給が変化する時間の長さを分析的論理の長さで固定する方法をとった。つまり，『原理』第5編で展開している一時均衡，短期均衡，長期均衡の3つの区分である。いわゆる「他の事情にして等しければ」という条件説である。この手法について彼は『原理』の序文で次のように述べている（*Principles*, xiv-xv）。『原理』は，彼の経済学体系においては「基盤」（foundation）の役目を果たす。この著作に続く著作は，より複雑な経済現象を取り扱う。このために，より単純化できる個別の経済現象の詳細な分析が事前に準備されたのである。マーシャルは，経済の研究とその叙述において帰納と演繹という論理を駆使したのである。複雑な現象は帰納によって単純な要素に分解されてから，演繹的な分析的論理によって復元される（*Principles*, 29）。マーシャルは，『原理』という著作を初めから2巻で計画していたことが，知られている（*礒川－1990b*, 236–7）。現実には後2つの著作が彼の生存中に公刊された。だから，「基盤」となる著作では，かれは力学的類似の手法の方が生物学的類似の手法よりも使用割合が多くなるという。後者の手法の使用割合が少ないとはいえ，使用するのである。だから，彼は経済学者のメッカが経済動学よりもむしろ経済生物学にあるというのある。したがって，定常状態の工夫の関係に議論を戻せば，一時均衡と短期均衡では生産技術はほぼ変わらないと一般的には前提されてると解釈されるから，マーシャル的にいえば，人間の性格は不変量であるのに対して，長期均衡ではこの性格は変化するであろう[5]。

### 0–2　生物学的類似での人間の性格の段階的変化

#### A3：分化と統合による段階的変化：低級から高級な段階へ[6]

そこで，われわれは貧困と幸福との概念の対置的性質の検討に必要な限りで，マーシャルの進化論的考えの要点をまとめよう。われわれはすでに，経済変化は物的要因である富の変化と非物的要因である人間の活動能力の変化に由来することを指摘した。これを踏ま

えて，われわれは，本稿全体では本稿の 0-1 の〈定常状態に関するマーシャルの動態的解釈〉で指摘した，人間の活動能力を構成要素とする人間の性格を中心に議論をしたいのである。というのは，本稿の 1-1，1-2，1-3 の検討，そして最終的に D7 の議論が示すように，マーシャルは経済変化を支配する要因としては，物的要因の変化よりも非物的要因である人間の性格の変化をより重要視していると思うからである。そこでわれわれは，ここではこの重要視に留意して，人間の性格の段階的変化を説明することにする。生物の進化論的段階的変化の観点と類似する観点，より直接的にはスペンサーの進化論から学んだ観点に立って経済変化と人間の性格の変化を考えるとき，すべての変化は「自然選択の法則」(スペンサーでは最適者存続の法則)に影響されると考えられる。この段階的変化の議論をわれわれは以前に明らかにしたことがあるので（*礒川-1988,* 16-18，24)，ここではこれを踏まえて，この議論を人間の性格の段階的変化に適用しよう。。人間の性格はその活動環境の変化に適応して変化する。それはより単純なものからより複雑なものへ変化する。スペンサー的には，段階的変化，つまり進化そのものは変異の持続であり，人間の性格はより単純で下級なものからより複雑で高級なものへ変化する。なぜなら，人間の活動能力とその行使の仕方，つまりその性格は生物の変化のように，一方で環境の変化の求めにしたがって実行することで高級化し，他方でこの変化が求めにしたがって使わなければ低級化する。マーシャルも使っている格言であるが，「習うより慣れろ」(*Principles,* 250-1) である。これを，マーシャルは経済制度と人間に応用したのである。

しかも，われわれは，本稿で人間の性格に焦点をあてているので，この性格の変化が段階的であることを強調しておこう。人間の性格の変化の速度が遅いだけではない。生物の段階的変化に類似して，この性格の段階的変化は，その過程において活動環境の変化に適応して，性格の機能のより多い分化をもたらし，より多くに分化された機能は新しく分化した機能を包含して新しい統合を結果して，一つの段階を形成する。段階的変化の古い段階と新しい段階とは，小さな相異しかない連続的段階 (continuous gradation) の関係にある。連続的とはいえ，異質な段階を形成しているのである。この二つの段階で，より新しい段階が機能をより多く分化をして人間の性格が複雑化するとき，新しい段階はより高級化するし，逆にこの性格が機能を以前よりも少ない分化となって単純化するとき，この段階はより低級化するといわれる(*Principles,* vi-vii, 33, 632, 241-2)。しかし，人間はゆっくりしか変化しない。変化が開始されて，成功するにしても失敗するにしても，時間が必要である。ましてや最高級にまで成功するには，その中間で経過する段階が問題となる。かくて，経済制度だけでなく，人間も変数なのである。しかし，経済社会を構成する経済

制度は急速に改善しうるが，人間はゆっくりとしか成長しないのである。「自然は飛躍せず」である（*Principles,* 249）。

もちろん，段階の区分だけでなく，それが小さな相異しかない連続的段階であることは，マーシャルの人間の段階的変化の理解においてきわめて重要である。このことは，マーシャルが『原理』の初版への序文で連続性の原理として強調しているとおりである（*Principles,* vi）。しかし，われわれは本稿では，連続性の原理の観点は，次のこと以外では強調しない。すなわち，人間の性格の段階的変化が高級化するにしろ，低級化するにしろ，より低級からより高級へ，逆により高級からより低級へ順番に変化していくことである。というのは，本稿での議論の焦点が，人間の性格の変化が遅いこと，しかもその段階的変化の中間段階での変化が遅いことを明らかにしようとするからである。（このことは，本稿のセクション3で明らかにする予定である。）

### A4：人間の性格の高級化：人間にとって望ましいこと

しかし，マーシャルは，進化論的倫理の観点から快楽主義的な意味での功利主義を否定するようにこの主義を修正したが，この主義を全面的には否定しなかった（*礒川－1993,* 84-9）。このために，かれは『原理』では人間の活動の動機として，快楽と苦痛という用語の使用を排除しなかったが，欲望の満足と不満足（satisfacion or dissatisfaction of desire）という用語をも併用している（*Principles,* 17－19, Bk. III）。これによって，彼は欲望の満足という用語によって単なる損得勘定という道徳的に低級な欲求を意味する快楽よりも広い範囲の人間の活動の動機を意味させようとしたと思われる。このような観点から彼は，人間の活動を次のように見なした。つまり，人間が，その活動の動機を別にしても，活動することそのものに喜びを感じ，より高級な活動ができたときその成功感覚に幸福を感じ，逆に行動しないことは苦痛であり，より下級な活動がもたらす挫折感覚に貧困を感じる。これに対応して，マーシャルは，人間の活動能力の高級化あるいは低級化に関して，生物学的意味に加えて，人間にとって道徳的に望ましいことを高級と呼び，望ましくないことを低級と呼ぶという意味を付加した。だから，この道徳的意味で活動環境の変化に適応することでの成功は，人間にとって望ましいことであり，人間が幸福な状態にあると，われわれは見なすのである。これと対置的に，適応に失敗することは望ましくないことであり，人間が貧困な状態にあると，われわれは見なすのである。われわれが幸福と貧困との概念が対置的性質を持つというのはこの文脈である。もちろん，人間の性格に影響する要素はたくさん存するであろうが，われわれは，マーシャルが生物の進化論理解か

ら獲得したことの一つが人間の性格の変化，特に道徳的性格の変化が重要であると，繰り返しになるが，本稿では主張したいのである。いずれにしても，人間の性格が高級であることは，人間にとって望ましいこと，つまり善でなければならない。その中でも道徳的な性格が善でなければならない，このことをマーシャルが人間活動の高級化で主張していたと，われわれは主張したいのである。

そこで，確認すべきことは次のことである。マーシャルが生物の段階的進化から学んだことは，同じ原因が時と場所によって人間に幸福を結果したり貧困を結果したりすること，さらに踏み込んで，物的富である貨幣所得の増加だけでは，必ずしも人間に幸福をもたらさないのであり（*Principles,* 20），非物的側面である人間自身の性格の高級化がなければ，貧困を結果することである。ある意味で，ある原因の結果として，貧困と幸福は一方のいずれかが必ずもたらされるのではなく，条件次第で対置的にもたらされる結果なのであり，まさに「他の事情にして」の条件の変化が中間的段階で発生すれば，貧困に向かっている事態が幸福に向かう途に向かうかもしれないのである。というわけで，マーシャルが生きた時代では深刻な貧困の根絶こそが，マーシャルの緊急の課題であったが，貧困の根絶は物的条件の改善と共に，貧困を是認しない人間の思考と活動様式を持つように人間を道徳的に改善すること，つまり人間道徳的性格の高級化を必要とする。

### 0-3　幸福あるいは貧困の非物的源泉としての人間の性格

#### A5：幸福あるいは貧困の物的源泉と非物的源泉

さてわれわれは，本稿の A2 で前置き的に指摘した，人間の性格の検討に入ろう。マーシャルは，『原理』第1編第1章第1節で，貧困の原因を論じるとき，次のようにいっている。人間の性格（character）は一般的見て，かれの所得（物的富）の大きさによって大きく左右されるが，それ以上に所得を稼得する仕方により強く影響されると，マーシャルは強調する。この強調は，本稿の 0-1 で指摘した，人間の性格のマーシャル経済学における意味である。この例証としてマーシャルは，年所得150ポンドの家庭は社会的平均でみて充実した生活ができて，少なくとも物的生活手段は過剰ではないが不足もない状態と想定して検討を始める。年所得1,000ポンドあるいは5,000ポンドという家庭は，いずれの所得の場合でも非常に裕福な家族であって，このように高額な所得水準ではその生活の豊かさでは大きな差異は生じない。しかし年所得が30ポンドの家庭は，150ポンドを普通の人びとの家庭だとすれば，満足な生活に必要な物的富において欠如しており，生活必需品の確保に困窮しているはずである。しかし，ここでマーシャルは，最高級の幸福（the

highest happiness）の源泉として，所得などの物的要因に加えて宗教，家族愛，友情という非物的要因を指摘している。たとえば，マーシャルの時代で30ポンドの年所得で貧乏な人は，教会に行くといった宗教活動をしていないし，子どもを肉体的に精神的に虐待するなどして家庭を荒廃させるだけで家族のきずなをつなぐ家族愛を発揮することもないし，他人には交際を回避されて友情を培うこともできない（*Principles*, 2）。かれは，物的で肉体的生活において欠乏しているだけでなく，他人とのふれあいを支配する精神的生活においても欠乏しているのである。マーシャルはこのように貧困を物的要因だけでなく，精神的概念を含めた非物的要因としても規定する。もちろんこの規定は，貧困の対置的概念と想定される幸福にもそのまま適用される。かくて，われわれは，最高級の幸福の源泉というマーシャルの上の指摘にちなんで，これ以後は，本稿の A1 の定義を変更して，経済変化が由来する物的要因を幸福ないし貧困の物的源泉と呼び，その非物的要因を幸福ないし貧困の非物的源泉と呼ぶことにする。したがって，マーシャルはここで，物的源泉として所得を，非物的源泉として宗教的活動能力と道徳的性格を形成する道徳的活動能力を指定していることになる。もちろん，人間は肉体的にも知的にも活動するから，これらの活動能力をマーシャルが非物的源泉として考えられたと想定すべきであろう。そこで，われわれは，ここでは，4つの源泉を想定できる。つまり，活力ある肉体的活動能力，知識などの精神的知的活動能力，宗教的活動能力，そして道徳的活動能力である。マーシャルの非物的源泉の範囲はかなり広いと思われるのだが，かれの幸福の概念の意味内容でもっとも重要なことと思われることは，本稿の A4 で示したように，マーシャルでは人間がこれらの活動能力をそれ自体で使用すること，つまり活動すること自体で喜びを感じるということであると思われる。この意味では宗教活動は重要な意味をもつと思われるが，マーシャルは，宗教を動機とする人々の活動が幸福に強烈な影響を与えるが，この影響は人々の生涯にわたって直接的に強烈なままではないので人々の幸福状態の変化には間接的な影響しか与えないと（*Principles*, 1）と述べている。このことから，本稿ではわれわれは宗教活動能力を非物的源泉の考察から除外する。われわれの議論をより簡単化するためである[7]。

かくて，われわれが考察する源泉は3つとなる。議論の簡単化とはいえ，いくぶん強引に見える宗教的活動能力の除外の解釈は，実は本稿の 1-1 で検討する「生活水準」に影響する人間の3つの活動能力に符合させるために行った。そこでは，これら3つの活動能力は，「知性，活力，自尊心」となっている。さらにわれわれは，本稿の Z2 で指摘したように，人間の活動能力とその性格との密接不可分の関係から，これら3つの活動能力は，肉

体的性格，精神的知的性格，道徳的性格と見なすことができる。つまり，これらの活動能力の段階的変化の観点からは，これら3つの性格はその高級化の第1段階，第2段階，そして第3段階に対応すると，われわれは見なすのである[8]。ここでは，道徳的性格を最高級である第3段階と，われわれは見なすのである。それゆえ，われわれは，幸福ないし貧困の源泉を検討するに先立って，マーシャルの別な概念を先に検討しなければならない。なぜなら，マーシャルにおいて幸福ないし貧困をより直接的に支配するのは「生活水準」と「安楽水準」との2つだからである。これら後者の2つの要素は，物的富と人間の性格，つまり，幸福あるいは貧困の源泉によって支配される。だから，幸福ないし貧困の変化から見れば，物的富と人間の性格の変化は，「源泉」としての変化であって，「生活水準」の変化や「安楽水準」の変化にくらべれば間接的なのである。しかも，幸福ないし貧困の源泉は物的と非物的側面の両方において，マーシャルにおいてはマーシャル独自な生活必需品の概念である，生産効率必需品およびその3つの段階の用途として概念化されているのである。（この概念は本稿の2-3で検討される。）

**A6：次の検討課題**

われわれれはこのために，「生活水準」（standard of life）と「安楽水準」（standard of comfort）との概念，生産効率必需品（necessaries for efficiency）の概念を人間の性格の概念よりも先に検討すべきと思われる。貧困と幸福との概念の対置的性質，そして貧困から幸福への転換の可能性をマーシャルがどのように考えたかを検討することから始めよう。これらの検討の後で，われわれは，人間の性格の中でその道徳的性格の高級化が最高級の幸福の達成にとって肝要であるとマーシャルが考えていたことを示す予定である。しかもこのときには，人間の行動の動機が卓越（excellence）を求める欲望に変化し向上していることをも示すことができる。卓越を動機とする活動は人間の活動能力を最高級に導くのである。（このことは本稿の3-1で明らかにする。）

本稿の0-2の段落の最後で示した，道徳的性格の高級化の議論をここで使って本稿の議論の進行計画を示せば次のように表現できる。「生活水準」，さらにそれと密接な関係を持つ人間の肉体的および精神的活動能力は，本稿のZ2で示したように，人間の性格を形成する要素であるから，人間の性格の高級化と対応する仕方で変化するを考えることができる。人間の性格の高級化とはその向上であって，より複雑になった統合の段階を形成する。他方，その低級化とは，その悪化ないし低下であって，より簡単になった統合の段階を形成する。高級化しても低級化しても，これらは連続的ではあるが，異質な段階を形成

するように変化する。人間の活動能力，そしてその性格の高級化ないし低級化，それによってもたらされる人間活動の高級化ないし低級化は，本稿でもっとも重要な論理的道具である。

## 1. 「生活水準」と「安楽水準」との対置的性質

### B1：マーシャルの経済進歩の観念の原点

われわれは，本稿の実質的な議論を経済進歩についてのマーシャルの観念から始めよう。マーシャルは「労働者階級の将来」（*Marshall-1873*）という論文で，労働者のありうべき幸福な将来を，労働者がその職業によって「紳士」のような人間的性格で活動できるように成長することによって実現できる可能性を，次のように示した。マーシャルは，当時の未熟練労働者の悲惨な貧困状態の原因を，第1に増加した所得を即時的な快楽に浪費する性格であるために無知であっただけでなく，第2に道徳的に恥ずべきほどに無分別に結婚する性格であって，この結果で生じた急速な人口増加は，労働者の家計の生活手段を大きく圧迫して，生活を生存ぎりぎりに悪化させている，と強調している。このために，親の世代だけでなく次世代へも，貧困が持続するのである。これに対して，このような労働者の幸福への途は，上の2つの性格を，次のように変更することである。つまり，第1に増加した所得を肉体的精神的活動を向上させるように健全に使用する意識を持つ性格に変更して，しかも，第2に次世代を担う子どもたちを健全に養育し教育するための費用を準備できるまでは結婚しないという性格に変更することである。この第1に変更される人間の性格は，本稿のA5の定義を参照すると，肉体的性格と精神的知的性格と，第2に変更される性格は道徳的性格と，見なすことができる。そして，これら2つの変更は，これらの性格が高級化されることに対応すると見なすことができる。第1の変更が重要であることはもちろんであるが，経済進歩は次世代の人々まで健全な精神的肉体的活動が持続することを意味することから，現世代の両親が次世代を養育し教育する費用を準備することができるまで結婚しないことを義務として意識するように変化することを，マーシャルは経済進歩の条件として特に重視している。つまり，人間の道徳的性格の高級化をもたらす結婚を自制する義務感の強化と，それによって準備された費用によって，子どもたちは広い知識を持った健全な大人に成長するであろう。この成長によって，人口増加は，人間の質の向上を含んで，人々の生活を向上させる範囲内で持続することになろう。この持続において経済進歩が始まるであろう。そうすると，現世代だけでなく次世代に関しても，

人々の生産効率が向上する共に，人々は健全で知的に賢明な活動能力をもった活力ある生活を享受できることになる。このようにして，マーシャルは，経済進歩が「物的富だけでなく精神的富を成長させる」という。（われわれはここで精神的富を人間の活動能力，そしてその性格と解釈する。）もし経済進歩が開始されたら，「すべての社会階層」が一斉に上の3つの性格で高級化しており，物的にも知的精神的にも豊かな生活を享受することになろう。そして，マーシャルは，このように高級化した性格の特徴を次のように述べている。つまり，進歩のより後の世代になるほど，その性格は，自分にとって苦労の多いことでも義務であって回避しようとしないで，より大きな困難を耐え忍ぶ能力とその意志を持っているはずであると（*Memorials,* 114–5）。このことは，経済進歩がもし持続できると仮定すれば，次のように人間の性格が高級化するとマーシャルが1873年の時点で考えていたことを示唆する。すなわち，この持続には，道徳的性格が他の2つの性格よりも大きな程度で高級化する必要があると。

しかし，この時点でマーシャルがここで展開した経済進歩の観念がその可能性を示しただけであることを，すべての社会階層の性格が一斉に高級化するという上の指摘から，われわれは看取できる。そこで，われわれはこの経済進歩の観念を，マーシャルの経済進歩の考えの原点，と理解することが適切であると思われる。つまり，『原理』での経済進歩の考えは本質的にはこれと同じであり，『原理』での議論はそのメカニズムを「生活水準」や「安楽水準」の概念を使って詳細に明らかにしたのである。経済進歩のこの観念を本稿のこの部分で取り上げたのには，もう一つ理由がある。それは，マーシャルは『産業経済学』（1879年初版）の「快適水準」[19] の定義で，子どもを育てる準備ができるまで結婚しないことを，道徳的要素として定義しているからである。このことは，経済進歩の観念では1873年から1879年まではマーシャルの考えが大きく変化していないことを示すと共に，『原理』での議論では経済進歩の具体的プロセスの説明ではかなり変化していることを示唆しているのである。いずれにしても，はっきりしていることは，経済進歩は，人間にとって肉体的にも精神的にも，そして道徳的にも望ましいことであり，これと対置的に，経済退歩は貧困をもたらして望ましくないことである。この意味を込めて，われわれは本稿での議論では，経済進歩の局面とは，人々が幸福な状態にあり，それが持続することであると見なす。これに対して，経済退歩の局面は，人々が貧困な状態にあり，それが持続することであると見なす。

マーシャルは，経済進歩の出発点として貧困の絶滅を目ざして彼の経済学の体系を構築したといわれている。貧困の絶滅といっても，貧困者を豊かな生活環境に強制的に移動さ

せれば，貧困者が豊かになるのではなく，上の1873年の論文で指摘されているように，人間の性格が変更されなければならない（*Principles,* 3）。しかし，貧困の絶滅のための人間性格の変更の努力をただむやみに人間が行えば，まったく自動的に幸福の実現に到達できるのであろうか？　われわれはマーシャルの答えが否定であることを本稿の 0-1 と 0-2 ですでに示唆したが，このことを次のように，「安楽水準」（standard of comfort）と「生活水準」（standard of life）の二つの概念を使って指摘しよう。マーシャルの経済進歩の議論に関してほとんどのマーシャル研究者が第一に注目すべき概念が「生活水準」の概念であり，この向上なくしては貧困の根絶はないのである。そして，貧困の絶滅とは，「生活水準」の向上を必要とする限りで，貧困とは対置的状況である幸福へ向かう道でもあろう。逆に，幸福な状態であっても，「生活水準」を低下させる変化が続けば，貧困に向かう可能性もあろう。つまり，われわれが貧困と幸福を対置的概念と見なすのは，「生活水準」が向上すれば幸福に，この水準が低下すれば貧困に向かうのだからである。だが，マーシャルは，「安楽水準」の概念を持つ。「生活水準」の向上か低下が，幸福への途と貧困への途との切り替えスイッチであるとしても，この切り替えは，今日から貧困から幸福にスイッチを切り替えたら，明日からは幸福というわけにはいかないのである。貧困状態での生活の改善が「生活水準」を向上させないで「安楽水準」だけを改善することは，人々を幸福に向かわせる途ではなく貧困に向かわせる途なのである。これらのことをマーシャルの議論で確かめることにしよう。

### 1-1 「生活水準」と「安楽水準」[10] の定義

まず，「生活水準」（standard of life）とは，人間の欲求に対して適合した人間の活動水準を意味している。だから，この水準の向上は人々の活動能力を構成する「知性（intelligence），活力（energy），そして自尊心（self-respect）」の高級化を意味し，所得の「支出において注意力と判断力の強化を導き，体力を強くすることのない欲望しか満足させない飲食を回避させ，肉体的にも道徳的にも不健全な生活様式を回避させることに導くのである」（*Principles,* 689）。したがって，本稿の Z2 の議論と A5 で示した分類から見れば，「活力」が肉体的性格を形成する肉体的活動能力，「知性」が精神的知的性格を形成する精神的知的活動能力，そして「自尊心」が道徳的性格を形成する道徳的活動能力，に対応する。もしも国民全体の「生活水準」が向上すれば，国民分配分が大きく増加させられるだけでなく，国民のすべての階層の分け前も大きく増加する。つまり，各産業階層の生産効率も大きく上昇し，その所得だけでなく知性，活力，そして自尊心という人間の活

動能力も高級化するのである。だから，「生活水準」の向上が連続すれば，国民がより豊かになる状態が連鎖することになる。他方，「安楽水準」（standard of comfort）とは，マーシャルによれば，まず，人間の活動水準ではなく，欲求の水準でしかない。それは「知性，活力，そして自尊心」の向上を意味しないで単なる自己満足のために行われる人為的な欲求の増加でしかない。したがって，この水準の改善は，人間の活動能力の行使を意味しないのである。本稿の A4 で示したように，人間の活動能力は行使されなければ，低級化する。活動の停止が持続すれば，人間はやがて貧困な状態に陥るであろう。このようにマーシャルは，「生活水準」の概念を，所得という物的源泉と，「知性，活力，そして自尊心」という非物的源泉から形成されていると考えている。もちろん，「安楽水準」もこれら二つの源泉から形成されると彼が考えていることは，いうまでもない。以上から，マーシャルが「生活水準」の向上が人々を幸福に，その低下が貧困に導くことと考えていることは推論できる。しかし，「安楽水準」の向上は，上のマーシャルの引用にある言葉を借りれば，人々に「体力を強くすることのない欲望しか満足させない飲食」をさせ，「肉体的にも道徳的にも不健全な生活様式」に導くのである。人間の性格が低級化あるいは悪化するのである。その結末が貧困に導かれるであろうことは，容易に推論できる。このように，マーシャルは，人々を幸福に導く途を一つだけ指摘するのに対して，貧困に導く途を二つ指摘しているとおもわれる。そこで，われわれの推論を確認するべく，「生活水準」と「安楽水準」との関係をマーシャルがどのように規定しているかを詳しく検討しよう。

### 1-2　人間性格の悪化の事例１：馬や奴隷の養育・訓練

「生活水準」と「安楽水準」とは，人口の増加が幸福な状態か貧困な状態かのいずれかで持続するのかを知らせる指標と見なすことができる。これに関してマーシャルは，家庭の支出が人間である家族を馬や奴隷のごとくに養育し訓練するのと同一原理で行われる場合と，欲求のみの実現を追求して安楽水準の改善のために行われる場合（*Principles,* 691）を対比して，次のように述べる。他の事情にして等しければ，もし「安楽水準」が生存に必要な水準に加えて生産効率の維持・改善に必要な水準よりも少しでも高い場合でも，つまり，人々の生活状態が生存ぎりぎりの水準よりもかなり高い場合でも，人口の増加は，家庭の支出が後者の「安楽水準」の改善に向けられる場合の方が，前者の馬や奴隷の養育・訓練のような仕方で行使される場合よりも，早く停止する。人口増加のこの議論をマーシャルが，馬や奴隷の養育の事例をここで取り上げていることに注意しながら，説明するとしよう。マーシャルにおいて「安楽水準」の改善に人々の支出が使われたというこ

とは，上のように「安楽水準」がかなり高い生活状態を人々に可能にする高さだとしても，この支出は，第1に，生存水準を改善するためにも，第2に生産効率の維持・改善のためにも使われないのである（*Principles*, 691）。「安楽水準」の改善に使われる支出は，人間の欲求をより多くするだけで，大きくなった欲求にふさわしい活動を，そのために必要な活動能力を成長させないどころか，この能力を遂行する意欲を衰退させる。もし生存ぎりぎりの生活をしている人であったとしたら，単に自分の欲しいものをいたずらに浪費するだけで，より大きくなった欲求の満足の実現手段をより多く獲得するにふさわしい活動をしないのである。その帰結は，次第に強くなる満足実現手段の不足であり，貧困は悪化するであろう。ましてや，より豊かな人でも欲求の拡大は容易ではあるが，その満足の手段のより多くの獲得は通常では困難である。そのためには特別の努力を必要とする。しかし，「安楽水準」のための支出はこの努力に何も貢献しない。この結果，このための支出のみを人々が続けていたら，人間の質の低下はやがて，人口の増加をも停止することになるであろう。このように，「安楽水準」の改善は，人々が豊かになっているように見えるが，実は貧困への道に繋がっているのである。

この側面を強調するために，マーシャルは，馬や奴隷の養育の事例をここで取り扱ったのである。馬や奴隷は，たしかに生命をもっているが，マーシャルはここでは物的生産要因のごとく見なしているのである。本稿の0-1で示したように，経済変化は物的要因と非物的要因に依存するが，物的生産要因は人間が改善しない限り変化はしない。しかし，人間は活動環境の変化とともに変化するのである。その環境の変化が「安楽水準」の改善のみをもたらすとき，人間は貧困の生活に適応するように変化する傾向を持つのである。マーシャルはこの変化の実例として奴隷の行動を例示している（*Principles*, 691）。俊敏で賢明な奴隷所有者は，一瞬でも奴隷を浪費したくないために奴隷所有者の費用で，病気の時には薬を与え，元気のない時には音楽などの娯楽を与えたとしよう。もしこれが持続すれば，奴隷はこの経験から学習するであろう。そして，もし奴隷が自分の欲求が実現されるのだと自覚しかれの「安楽水準」が向上した結果，彼の欲求が巨大になり彼を処罰や死の恐怖でもってしても，奴隷所有者は彼を働かせることができなくなったとしよう。奴隷はその性格を変化させたのである。この帰結として，奴隷所有者は高価な安楽品などを彼に与えて働いてもらうか，それとも彼を奴隷をしては消滅させることになるであろう。つまり，奴隷が稼ぎ出す収入にくらべて，その所有者が投下しなければならない費用が多くなりすぎたのである。これはちょうど，馬がその飼育費用を稼ぎ出さなくなったとき，利用が消滅するのと類似している。要するに，マーシャルは次のように考えた。すなわち，

馬は物的生産要因と見なされ，その性格を自力では変化させない。これに対して，奴隷の所有者は奴隷を物的生産要因と考えてその性格を変化させないと考えたが，奴隷はそれを変化させた。このために，この奴隷は不幸に見舞われることになった。だから，マーシャルは，「安楽水準」の改善は貧困を越える結末に至るとみなすのである。すなわち，本稿の 0-1 で言及した『原理』冒頭での人間の性格の変化の重要性から見ても，人間はその尊厳を欠如させれば，人間としては消滅したに等しい。このためにこそ，マーシャルは貧困の根絶を自らの課題にしたのである。本稿の 0-2 で示したが，これはマーシャルが生物の進化論から学んだことである。人間は可変量であると（*Principles*, 720）。

### 1-3　人間性格の悪化の事例 2：悪弊をもたらした救貧行政

#### B2：「安楽水準」の改善が貧困を招く場合

上のパラグラフの議論からすると，「安楽水準」の改善が，改善にもかかわらず見かけとは違って，悲劇的結末をもたらすと考えられるとすれば，「生活水準」の改善はもちろん幸福をもたらす結末を想定できる。家族を馬や奴隷と同じように養育するとは，人間を単なる物的生産要素としか見なさないことであった。このことの説明は上の段落で済ましたので，このことを除外して，「安楽水準」の改善の結末を支配する要因は何であろうか？それは，本稿の 1-2 の第 1 パラグラフで使った議論にしたがえば，次のことである。家計の支出は，第 1 に，生存水準を改善するためにも，第 2 に生産効率の維持・改善のためにも使われないのである。第 1 の生存水準の改善に関して，たとえば，日々の生活にも困窮した生活をしている人は，少しでも増加した所得を「安楽水準」の改善に使ったとすれば，その結末はすぐに想像できる。つまり，この改善は彼の欲求のみを増加させ，人間として望ましい活動能力，そしてこれに対応した性格を育成しないのである。それはより強い貧困観をもたらし，この事態が続けば，彼は人間として道徳的にも破壊されて，膨張した欲求の実現のために犯罪をも犯しかねないのである。このように，彼の行動は人間として望ましくない形態で行使されているのである。第 2 の場合，生産効率の維持・改善のために支出されない。この行為は「生活水準」を，本稿の 1-1 の定義からわかるように，向上させない。だから，彼が，もし第 1 の場合と同様に，すでに貧困状態にあるとすれば，この状態から抜け出せない。貧困ではない場合の人でも，彼が「安楽水準」の改善のための支出を続ければ，彼の活動は，人間として望ましくない形態で行使されているから，かれは「知性，活力，そして自尊心」を低級化するであろう。この低級化は，それに対応して彼の生活の貧困化をもたらすはずである。このように，マーシャルは，「生活水準」の改善

を人々を幸福に導く道であり，「安楽水準」の改善を貧困に導く道であると考えたと思われる。特に人間が犯罪にまで手を染めるとなれば，彼の道徳的性格である自尊心を欠如させているといわざるをえないであろう。

われわれは「安楽水準」が貧困に導くことの重要性を，さらにマーシャルの事例を使って確認しよう。「安楽水準」の改善は欲求ばかりが膨張することである。労働者の場合，このようにかれが欲求ばかりが強くなってしまうと，通常では，これに反応して働く意欲を減退させてしまう。このような意識状態を自分の性格の中に持つ労働者は，労働供給を減少させることによって賃金を引き上げようとするであろう。これはどう見ても利己的にすぎる行動であろう。この行動は労働者を貧困に向かわせる。このような具体的事例としてマーシャルは，救貧法の救済を受けるほどに貧困になった労働者が救済を受けたために，肉体的以上に精神的に不健全で貧困になった場合を，以下のように述べている。

**B3：19世紀イギリスの救貧行政の弊害の事例**

18世紀の半ばには，イギリスは大規模工場による生産体制の時期にはいるが，この時期以降，イギリスの製造業地域の繁栄は，この地域での労働者の需要を急速に増加させた。その結果，この地域に労働者が多く移住してきたが，賃金は従来より高かったので，労働者の生活はかなり改善された。こうして，この地域に居住した若者が多くなり，出生率も例外と思われるほどに高くなったが，他方で死亡率も高かった。それでも，人口はかなり急速に増加した。この人口増加の傾向を背景にしたままで，救貧行政は若者の結婚年齢をより若くしてしまった。なぜなら，19世紀の初めごろから30年代ごろまで，イギリスは不況期にあり，失業した労働者たちは，職を求めて行動したり，一時は機械の破壊行為も出現した。機械制大工場の出現で，労働者たちは失業を経験するだけでなく，労働現場では長時間かつ劣悪な労働条件のため，肉体的，精神的健康をも奪われていった。そこで，労働者たちは，団結し労働組合の結成を志向するとともに，ストライキによって資本家である中産階級と対立する姿勢をとった。この対立の緩和策として，救貧行政が使われたのである。この結果，救貧行政は，貧困な家庭をたくさんの子供を持つように支援する方向に，働いた[11]。この支援のやり方は，まず，未婚か少ない子供を持つ家庭の父親ではなく，たくさんの子供を持つ家庭の父親に補助金を支給したのである。そこで，未婚の人は少しでも早く結婚をしようとした。よりたくさんの子供を持つことだけで補助金がより多くもらえることを知った父親は，自らでは働かないでこの補助金に頼って生活を行ったのである。しかも，もらった補助金は子どもの教育に使うことをしないで，父親の飲酒など，およそ

「生活水準」を向上させることなど考えられない用途に浪費された。かくて，このような補助金を最も多く利用した人々は，「知性，活力，そして自尊心」において最低水準の人々であり，このような人々の行動は社会にとってかなり有害であった。この有害さをマーシャルは，工業都市では特に幼児死亡率が恐るべきほどに高くなったのにもかかわらず人口が急速に増加しすぎた事実から，人口の質が大きく低下した，と憂慮した。つまり，自らでは労働意欲を持たないだけでなく，家族を思いやって自らを自制するという自尊心を失った人々は，単に一日でも早く結婚して子供をたくさん産むという行動のみに関心を持ってしまった。その目的は，自分は働かなくても補助金で安穏に暮らすという非常に非道徳的なものでしかなかった。このように，人口は数において急速に増加するだけではなく，その社会的，道徳的，知的な質において急速な悪化も伴った。しかし，1834年の救貧法改正は，それ以降，人々の節制，知識や公衆衛生観念の強化を導いたので，人口増加の傾向はそんなに小さくはならなかったが，人口の質の低下を抑制した。マーシャルは，救貧法の改正前後の救貧行政が人々の生活の向上か低下に与えた功罪を，以上のように総括した（*Principles*, 189）。もちろん，労働意欲を失うだけでなく家族のために自制するという自尊心を失った人々は，マーシャルの言葉では自らの「安楽水準」の改善のみを追求したのである。このように，自尊心という人間性格の悪化は，家族をも犠牲にしかねないという道徳的に重大な弊害をもたらして，現世代だけでなく次世代の人々まで貧困へ導くのである。

### B4：「生活水準」と「安楽水準」の概念の対置的性質

次に，この論点，道徳的性格の議論を進めよう。この論点の検討によって，つまり，われわれは本稿の 1-2 と B2 と B3 の議論を総括的に考えることによって，幸福概念と貧困概念の対置性格と同種の対置的性質を，「生活水準」の概念と「安楽水準」の概念にも見出すことができたと思う。それは，「安楽水準」は，たとえ，改善しても欲求のみの膨張によっておおきな弊害をもたらすとき貧困を導くのに対して，「生活水準」の向上は幸福を，その低下は貧困を，導くという，対置的連関であった。この連関から見ると，貧困をもたらす大きな弊害の重要な原因が人間の自尊心の低級化，すなわち，道徳的性格の低級化あるいは悪化であったことも示された。以上のように，「安楽水準」の改善が人々を貧困に導くであろうとマーシャルが考えている，とわれわれは本稿の 1-1 の最後で推測したが，この推測は例証された。もちろん，「生活水準」の低下もこの性格の悪化をもたらすことは，この水準の概念の定義から自明であろう。他方で，この性格の向上は人々に幸福

をもたらすであろう。本稿の A5 で示したように，道徳的性格は人間の性格の高級化の段階で最高級な段階に位置づけられているから，その高級化の実現が困難なのである。（今，本稿の議論を先取りしていうと，道徳的性格の高級化の実現は，もう一つ別な理由からも困難なのである。この理由とは，人間の活動が最高級化することから生じるものである。これらのことは本稿の D3 から D11 の検討で示す予定である。かくて，本稿での経済進歩の検討は 2 段階の人間の性格の段階的高級化に対応する形式で行われる。大まかに区分すれば，本稿のセクション 1 が最初の段階を主として検討し，そのセクション 3 が後の段階を主として検討する。そのセクション 2 は，この二つの検討を接合することを担当する。）

いずれにしても，われわれが重視しなければならないことは，マーシャルが幸福への途を一つだけ指摘し，貧困への途を二つ指摘していること，しかもそのいずれへの途も人間の道徳的性格の高級化か低級化かのいずれかに依存することである。つまり，本稿の 0-2 で指摘したように，人間の性格が段階的に変化する過程では，この変化は，幸福の物的源泉である物的富に変化にくらべれば，遅いのである。この性格の変化の遅さゆえに，幸福の実現が人間にとって非常に困難なこと，それにくらべれば，貧困状態に落ち込むことが容易であることをマーシャルが示そうとしたのである。このために，かれは，「生活水準」の概念だけでなく「安楽水準」の概念をも必要としたと思われる。

かくて，「生活水準」と「安楽水準」の概念は対置的関係にある。しかもこの関係はまた，「生活水準」の定義からわかるように，人間の日々の活動で利用する生活手段の量とその用途と密接に結びついていると思われる。（われわれは本稿の 2-3 でこの生活手段を生産効率必需品とその 3 段階の用途として検討する予定である。）この用途に関しては，マーシャルは人間の「知性，活力，そして自尊心」を強化する用途を「生活水準」の向上をもたらすのに対して，それらを低下させる用途を「生活水準」の低下をもたらすと見なした。その要点は，生活手段の用途が肉体的にも道徳的にも健全な生活様式を導くか，それとも反対に不健全な生活様式を導くかである。このようにマーシャルは，生活手段の用途を，人々の生活の質が向上するかどうかに基準をおいて検討している。そこでわれわれは，この生活手段の用途の基準が，本稿の A5 で示した，幸福あるいは貧困の源泉とどんな関係にあるかを考えてみよう。この源泉は 2 分されていた。一つは，所得を代表とする物的源泉，もう一つは，人間の性格である非物的源泉である。上のマーシャルの基準が意味する生活の質が向上するか否かは，本稿では主として人間の性格が高級化するか否かに，対応するとわれわれは考えることができる。われわれは，このような考えに立って経済進歩のマーシャルの議論を考えると，かれが「生活水準」と「安楽水準」の概念の密接

な連関を分析するために,『原理』でかれ独自の生活手段の概念を導入したことを十分に明らかにできると思う。しかし，生活手段とその用途では，アダム・スミスの生活必需品という概念がよく知られている。もちろん，マーシャルも彼の議論でスミスの概念を検討しているのである。そこで，われわれは，生活手段についてマーシャル独自の概念である生産効率必需品の概念の特徴を示すために，回り道をする。第1にスミスの概念を本稿の論旨に必要な限りで紹介し，第2にマーシャルがスミスの議論をどのように解釈し，マーシャルの著作『産業経済学』(1879年初版）でどのように論じたかを検討して，第3にマーシャル独自な生活手段の概念である「生産効率必需品」概念の検討に向かう。

## 2.　生産効率必需品[12]

### 2-1　アダム・スミスによる生活必需品の2分法

#### C1：アダム・スミスの生活必需品の3分法

経済学において生活必需品の概念といえば，アダム・スミスの定義をわれわれは思い出す。『国富論』序論の冒頭で，彼は労働の年々の生産物が富であることを宣言すると共に，富の用途である生活手段（生活資料）として生活必需品と生活便宜品とを指摘している（*Smith,* 10；邦訳：上巻，9)。この指摘に，贅沢品が加われば，われわれが今日よく知っている富の生活手段としての3区分となる。もちろん，スミスもこの3分法を使用していることは，上の定義と次に述べる彼の2分法の内容を見れば，理解される。むしろ，この理解こそは，富の用途別の3分法に関して現在までに使われているやり方のプロトタイプと考えることである。われわれもこの考えを自然的解釈と見なす。スミスは『国富論』第5編で税の課税対象を論ずるとき，必需品と贅沢品との2分法を用いている。われわれは彼の課税論そのものにはいまは興味はないが,「生活水準」と「安楽水準」という人々の生活状態を示す指標のマーシャルの2分法に関して，この2分法には興味を引かれる。スミスによれば,「必需品とは，生命を維持するのに必要不可欠な財貨だけでなく，その国の習慣上，最下層の人でも名誉ある人間として，それなしでは不体裁になるような財貨すべて」（*Smith,* 869－70；邦訳：下巻，280）である。このような財を除いた，すべての財が贅沢品である。まず,「生命を維持するのに必要不可欠な財貨」は，通常では生存水準維持のための生活必需品といわれるもので，個人が，あるいは，子供の養育を含めれば彼の家族が，その生命維持に必要な部分であって，国民全体で平均的に見れば，一人の個人あるいは一つの家族にとって同じくらいと見なされるであろう。しかし，上の引用の後半部分の文章

が意味することは，社会的習慣，個人の社会的地位や，職業，居住する場所が都市か田舎などの様々の条件に応じて必要とされる財の大きさと種類を相違させるであろう。そして，これは通常では生活便宜品として区分とされる。『国富論』冒頭で生活必需品に加えて生活便宜品として富を述べたのは，まさにこの意味であろう。

たとえば，スミスは，彼の生きた18世紀半ば頃の時代の生活必需品の例を，イギリスやヨーロッパなどの場所や伝統の相違で，次のようであると述べている。亜麻布のシャツは，まず，生命維持に不可欠ではないが，重要な生活便宜品であるとスミスは述べる。ヨーロッパ全体において，このシャツを着ていることは，最下層の人々でも信用のおける人間と判断されて，人間としての体面が保たれるが，このシャツを着ていない人は見苦しいほどの貧乏人を意味した。あるいは，イギリスに限れば，イングランドでは革の靴を履くことは，どんなに貧しい男女にとっても人前で体面を保つには必要不可欠なのである。だが，スコットランドでは，この靴は男性にとっては体面を保ち体裁を構えるには必要不可欠であるが，女性は裸足でも他人から非難されない。さらに，フランスでは，革靴ではなく，木靴が必要とされた。このように，スミスがここで人々の生活必需品の例をして挙げているものは，「自然が最下層の人々にとって必要不可欠にしているものだけでなく，体面をたもつ上でできあがったきまりがそうさせているもの」である（*Smith*, 870；邦訳：下巻，280）。

### C2：アダム・スミスの「社会的必需品」：生活必需品の２分法

スミスは，単に生命を維持するだけでなく，隣人などの人間関係において社会的活動をするときの身なりや礼儀作法を維持して十分な体裁を保って名誉を保持すべきことを人間のあるべき姿として望んだのである。これに必要な富の量と種類はすべて生活必需品と生活便宜品であるが，このような財の中で最下層の人々が保持すべき量と種類を，社会にとっての必需品と呼んだのである。もしこの量と種類が国富の減少によって確保されなければ，人々の少なくとも一部分は人間の尊厳を失うことになり，社会的には不体裁な身なりや行動をして，隣人などから信頼に足る人物とは見なされなくなり，貧困状態に転化するであろう。われわれは，人々の貧困への転化可能性を強調して，この必需品をスミスの「社会的必需品」とよぶことにする。もちろんこの可能性は，国富が増加するときを想定すれば，富裕への転化をも包含できるであろう。

さらに，スミスは，「社会的必需品」の確保の重要性を消費財としての，「社会的必需品」と贅沢品への課税の影響を通して，次のように論じている。「社会的必需品」の課税による

価格の上昇を，比較的貧困な人々の多い労働者に与えるもっとも重要な影響を考えて，スミスは，労働者の場合を中心に議論を進める。労働者が利用する「社会的必需品」の平均価格の上昇は労働者の賃金の引き上げによって相殺されなければならない。そうでなければ，労働者が貧困になってよりたくさんの家族を健全に育て上げて，社会的に有用な労働を供給する能力を弱めるので（*Smith*, 871；邦訳：下巻，282），富の生産の増加が円滑に進まなくなる。なぜなら，労働者の賃金の上昇は，長期的には雇い主によって前払いされるから，利潤の減少を避けるために雇い主は賃金の増加分を彼の製品価格に転嫁するので，この税の負担者は財の消費者となるからである（*Smith*, 871；邦訳：下巻，281）。つまり，「社会的必需品」課税はすべての財の価格上昇に波及するのである。他方，贅沢品の課税は，労働の賃金を必ずしも高めることはないのである。たとえば，たばこは貧者でも富者でも贅沢品であるが，たばこ税は賃金を引き上げない。贅沢品の税は，課税対象の商品の消費者によって負担されるので，他の商品の価格を高める傾向をもたない。むしろ，このことによって，スミスは，道徳的な意味で，ぜいたく禁止を支持する。しかも，貧困だがまじめで勤勉な家族の場合，贅沢品への課税は，ぜいたく禁止の作用をもたらして，簡単には手に入れにくい品物の使用を抑制するか停止するであろう。その結果の倹約は，この家族のよりたくさんの子どもを社会的に有用な労働者として育て上げる力を強化するであろう。逆に，意志が弱くてふしだらで不品行な家族は，この税によって価格が高騰した財を使い続けて，より困窮化することになるであろう。ただ，スミスは，このようにふしだらな家族は相対的に少なく，人口を大幅に減少させるようなことは考えられないという（*Smith*, 873；邦訳：下巻，282）。

以上のことから，われわれは，上の段落での「社会的必需品」が国富の増加によって増加させられるという議論が，マーシャルでは国民分配分の増加によって「生活水準」が向上する場合を意味することに，あるいは，貧困でふしだらな家族が高騰した贅沢品を使い続けることが「安楽水準」の改善の結果として弊害をもたらす場合を意味することに，類似していると見なすことができるようにみえる。しかし，この類似よりもスミスの議論に類似しているとわれわれが見なすべき，マーシャルの議論は，彼の「快適水準」（Standard of Comfort）の概念にかかわるものである。この概念は，彼の『産業経済学』（1879年初版）で展開されている[13]。他方，「生活水準」と「安楽基準」との二つの概念は彼の『原理』（1890年初版）で展開されている。そこでわれわれは，次の2-2で，すでに本稿の1-1で見た「生活水準」と「安楽水準」の二つの概念の検討を踏まえて，マーシャルの『産業経済学』での「快適水準」の概念をスミスの生活必需品の3分法の概念と対比的に検討する。

このことによって，われわれはマーシャル自身の経済思想の形成の一部にも焦点をあてようとしている。そして，われわれは，本稿の C9 で「生産効率必需品」という概念をスミスの「社会的必需品」と対比的に検討することによって，マーシャルが彼の概念をかれ独自なものとして形成した道筋の解明の一端とする。

### 2-2　マーシャルの「快適水準」概念[44] と生活必需品の 3 分法

#### C3：『産業経済学』の「快適水準」：無分別な結婚の自制

さて，われわれはまず，『産業経済学』での「快適水準」（standard of comfort）の定義を紹介しよう。マーシャルはこの定義を人口法則の一部として定義している。「どの階層の人々も特定な量での生活必需品，生活便宜品，そしてぜいたく品を享受できる予測なしには結婚したくないという先見の習慣を獲得できたとき，この量を当該階層の「快適水準」とよぶ」（*EOI*, 28）。まず，われわれは，マーシャルの生活必需品がスミス以来の伝統的 3 分法になっていることが確認できる。また，本稿の B1 の〈マーシャルの経済進歩の観念の原点〉で述べた，結婚の自制の議論も確認できる。マーシャルは，スミスよりも古い経済学者たちが未熟練労働者がひじょうに貧乏であり，彼らの賃金がいつも生存水準ぎりぎりの最下限，つまり，スミスの言葉では生命不可欠な量の下限にあると見なしているとスミスが批判したことを指摘した。さらに，本稿の C1 でスミスの検討のときわれわれが触れた短靴という生活便宜品の例にマーシャルは言及して，国によっても同じ国でも場所によって習慣の相異によって生活必需品や生活便宜品の定義が異なることをスミスが強調したことをもってスミスの古い経済学者批判を正しい見解として容認した（*EOI*, 29）。この容認のもと，マーシャルは，「快適水準」の上の定義で結婚をある条件までは控えるという，人々の将来の望ましいあり方を見通す判断力，つまり，人間の道徳的性格を指摘している。人々が，現在の平均所得という物的手段で獲得する生活手段の量は，単に現在の即時的欲望充足だけでなく，次世代を担う子どもたちの養育を保証するようにも利用されなければならない。人々は，自分の生涯の事柄を決定するだけでなく，少なくとも自分の子どもたちを養育するという利他的動機をもたねばならない。したがって，「快適水準」の向上は結婚の数を増加させ，子どもの出生数も当然に増加させるから，人口成長率も増加する。しかし，注目すべきことにマーシャルは，「快適水準」の向上が子どもの出生数を減少させつつも，人口の成長率はいつも増加する，と述べる。つまり，ある階層の人々の平均所得が増加して「快適水準」が向上したとき，子どもの養育条件が大きく改善されると，生まれた子供のうち順調に成長して成人になり次世代の生産効率の高い労働者にな

ることのできる割合が大きく増加するのである。

ここには，本稿のC1で示した，スミスによるぜいたく品課税の効果に関して，貧困だがまじめな人々はぜいたく禁止によって倹約した場合に，健全な大人まで成長する子どもが増加するということと同種の効果が指摘されている。逆に貧困でふしだらな人々は，子どもの死亡率がより高くなるだけでなく，貧困の度合いが強くなる事例が指摘されていた。マーシャルの『原理』での議論では，人々の生活が改善される場合は，「生活水準」の向上であり，それが悪化する場合は「安楽水準」の向上であった。そこで，マーシャルは，『産業経済学』の議論では，「快適水準」の向上が子どもの死亡率を低下させ次世代の効率的労働者が増加することに留意して，彼の人口法則を次のように述べる。「ある階層の人々の平均所得の増加はその「快適水準」の向上かあるいはその階層の結婚と出生の数を増加させる。この階層の「快適水準」の向上はほとんど確実に成人まで成長する子どもの割合を増加させる。したがって平均所得の増加はほとんどいつも人口成長率を増加させ，その所得の低下はこの成長率をほとんどいつも低下させる」(*EOI*, 29)。かくて，マーシャルは，「快適水準」の定義の中で人々が結婚を控えると述べていたが，この水準に影響する生活手段の用途が所得を稼ぎ出す本人の欲望を満足させることよりも，「彼の子どもの肉体的，精神的，道徳的に良好な教育」(*EOI*, 28) に優先して利用されること，を期待しているのである。マーシャルは，「快適水準」の向上によって経済進歩の主要な指標としようとしているのであって，それゆえに「経済進歩は人々の「快適水準」に，それゆえ彼らの家族愛の強さに，大きく依存している」(*EOI*, 28) というのである。

「快適水準」の向上が経済進歩を意味する場合には，この水準の物的要因である人々の平均所得の増加だけでなく，家族愛や子どもの教育の充実のための倹約の強化といった非物的要因が向上しなければならない。このことが意味しているマーシャルの強調点は，子どもの養育と教育への親の注意深い配慮が示すように，人間の道徳的性格の高級化である。したがって，マーシャルのこの議論は，彼の『原理』の「生活水準」の向上の意味することと，本稿の1-3で検討した救貧行政の弊害で最悪の貧困として述べた事例が示唆するように，道徳的性格である自尊心の高級化が必要であるという議論と符合するものである。符号はするが，『原理』での議論とは相異が存することは，本稿のC12で示すであろうが，今は，『産業経済学』の議論に集中する。「快適水準」の向上は，所得が増加するだけでなく，人々の生産効率の上昇を伴って所得が増加し，増加した所得が子どもの教育のためにより多く利用されることである。このことの意味を，マーシャルが議論している，子どもを熟練労働者にするために投資する両親の事例を使って，もう少し説明しよう。

### C4：親による子どもへの教育投資：スミスの事例の批判

まず，マーシャルはアダム・スミスが『国富論』で取り扱った事例について述べる（*Smith*, 118–9；邦訳：上巻，90；*EOI*, 104）。スミスのこの事例に対してマーシャルは，人間労働の教育投資を販売可能な財への投資と同一視していると批判する。マーシャルはこの批判を馬と熟練が販売可能な奴隷の例を使って次のように行う[15]。このような場合には馬や奴隷の熟練を養成するに必要な生産費のみによって，熟練労働の賃金が決定されることになる。まず馬に関しては，馬を馬車馬に適するように養育し調教するための全費用がこの馬が馬車を引いて稼ぎ出して馬主にもたらす収入を超えないと予測されれば，馬主は馬車馬としては投資しないし，逆ならば投資するであろう。販売可能な熟練をもつ奴隷として奴隷主が奴隷を養育・訓練するときも事態は類似している。たとえば，奴隷主が奴隷に100ポンドの追加投資をするとしよう。奴隷主がこの投資を行うには，この投資の結果，奴隷の労働から100ポンドの追加の収入しか得られないとすれば，奴隷主はこの投資を実行しない。なぜなら，投資の成果は一定の時間の後にのみ回収されるのであって，もし奴隷が突然に死亡するなどの危険負担を，奴隷主は考慮しなければならないから，危険負担が大きければ大きいほど，期待する予想収入は大きくなり，たとえば400ポンドになるかもしれない（*EOI*, 104–5）。いずれにしても，馬でも奴隷でも投下したもの以上が回収できるかどうかしか問題ではないのである。話はすこしそれるが，本稿の 1–2 で見た，『原理』での「安楽水準」の改善に関する奴隷の事例におけるように，もしこの投資によって奴隷の「安楽水準」が改善されて，奴隷の欲求が過大に成長することになれば，この議論は成り立たなくなる。

### C5：親による子どもへの教育投資：マーシャルの 4 つの事例

マーシャルは，人間の両親が自分の子どもたちに生産効率を引き上げるために投資する場合は馬や奴隷の場合とくらべて，次の 4 つの点で特徴をもつという（*EOI*, 106–7）。第 1 に，両親は子どもへの投資の「純優位」（Net Advantages）すべてを考量するとき，子どもの貨幣賃金だけでなく快適な生活や幸福を重視するが，奴隷所有者は彼の奴隷に関して後者のことをほとんど重視しない。ここで子どもの「純優位」であるが，マーシャルはこれが労働供給を支配すると考えている（*EOI*, 103）。たとえば，同じ熟練をもつ船員の場合，気候条件の良い地中海行きの船の賃金は気候条件の厳しい北海行きの船の賃金よりも低いであろう。気候条件の厳しさがもたらす航海の不便さがもたらす不利さがより高い貨幣賃金で相殺されるのである。そこでマーシャルはある職業の貨幣賃金とその他の特殊な有利

さの貨幣等価物との合計を総優位（sum of advantages）と名付け，同様に不利さがもたらす総額を総不利（sum of disadvantages）として，総優位から総不利を控除したものを純優位をよぶ。もちろん，この純優位がより大きい職業には追加の労働供給が流れ込み，逆の場合は流出して，労働需要に調整されるのである。この事例の総不利と総優位は，人間の活動の影響するすべての要素を考慮している。これと類似して，両親は子どもの教育投資において配慮するであろう。このようにして，両親は，物的な意味での子どもの実質賃金だけでなく子どもの将来生活に関しても十分な備えができるまでは結婚を控えるという将来を見通す判断力をももつことにも配慮するであろう。それゆえ，両親は子どもについても「快適水準」の向上を期待しているのである。

第2に，両親が投資した収益を彼の子どもが受け取ると考えているのに対して，奴隷の熟練は奴隷所有者の財産となる。だから，両親だけが，子どものために自分の利益をどれだけ犠牲にすべきかという道徳的決断をしなければならない。奴隷所有者は自分の財産を自分の利益ために処分するだけである（*EOI*, 106）。第3に，両親は投資の専門化である資本家ではない。資本家にとって，両親とは違って自己利益を犠牲にすることはまったく，投資の動機を構成しない。マーシャルが両親の教育投資を資本家の投資と対比した意図は，まさに，両親は子どもの投資において，資本家の行動様式であるビジネス原理で行動できないことを強調することである。ビジネス原理とは，投資の予想収益を現在の市場利子率で割り引いて現在価値を求めて，この価値が投資よりも大きければ投資をするし，そうでなければ投資をしないことである。このことを補充的に示すためにマーシャルは，両親の教育投資の第4番目の特徴として，奴隷所有者が資本家である場合という事例を設定している。奴隷所有者は，自分の財産を大きくする手段として奴隷に熟練を獲得させるので，ビジネス原理でこのための投資を行うことができる。奴隷制の下で奴隷の熟練は奴隷所有者の財産であったが，市場経済制の下で労働者の熟練は資本家の財産ではない。かくて奴隷所有者はビジネス原理では行動しないであろう。他方で，両親は別の理由でビジネス原理で子どもの教育投資を行わない。というよりも，子どものために投資をすべきであろうが，貧困で無知な両親はこの投資をできないのである（*EOI*, 106）。貧困な両親は，将来のことを考えて現在の行動に反映させるという「想像力」（imagination）という精神活動能力においても貧困なのである。つまり，このような両親は，現在の自分の厳しい苦労や，それがもたらす子どもたちの貧困な生活を反省して，子どもたちこそは貧困から抜け出して欲しいと考え，子どもが成長したときには貧困から抜け出した豊かで健全な生活を「想像」することができないのである。かくて，このような両親はごく身近で慣れ親しんで

いる慣習に規制されて，見知らぬことには無関心でひじょうに狭い生活環境で限定された事柄にしか関心を持たない。このような関心しか持たない両親は，子どもに自分のとは違う職業に挑戦させようとは「想像」もしない。むしろ，このような両親は，自分の子どもに少しでも早く働いて少額でも賃金を獲得してほしいと利己的に強く望むのである（*EOI*, 107）。この願望の弊害は，本稿の B3 で救貧行政の弊害の最後で示したごとくに，『原理』での「生活水準」の向上のときの自尊心の高級化の重要性の強調と符合する考えが内包されていると思われる。

以上 4 点は，「経済進歩は人々の「快適水準」に，それゆえ彼らの家族愛の強さに，大きく依存している」からこそ，人間が単に高い生産効率をもつ熟練だけをもてばよいのではなく，家族愛など人間としての尊厳を示す道徳的活動能力，そしてその性格を成長させることをも包含しているのである。このことから，われわれは次のように考えることができよう。つまり，マーシャルが経済進歩との関係では，人間の活動能力，そしてその性格を，より高い生産効率と高級な道徳的性格という二重的意味で把握していたことである。したがって，ここでは「快適水準」の向上が幸福への道を意味し，この水準の下落は貧困への道を意味するから，幸福と貧困の対置的性質が見いだせるが，「安楽水準」の概念がないことだけで本稿の 1-1 と 1-2 で検討した『原理』の段階の議論とは大きく違う。しかし，人間の活動能力，そしてその性格がより高い生産効率と高級な道徳的性格という二重的意味で把握されていることは，本稿の次の C6 から C8 で検討される，『産業経済学』段階でマーシャルの労働者の生産効率の 3 つの支配条件の内容にもっとよく示されている。この二重的意味での把握に留意しながら，この支配条件を次に検討しよう[16]。

### C6：人間の肉体的活力：『産業経済学』の生産効率の条件

マーシャルは人間労働の生産効率を支配する条件を 3 つ指摘する。1. 人間の肉体的活力，2. 知識と精神活動能力，3. 道徳的性格である（*EOI*, 9-12）。第 1 の肉体的活力は人間労働のもっとも重要で根源的なものである。それは人間が居住する自然的条件に大きく依存する部分であり，温度の高さ，雨の多少，標高の高低など，気候的地勢的条件の中で人間の活動を助成したり抑制したりする働きをする部分である。これらの条件の作用に人間は，適応することによっていろいろな活動能力を所持している。人間は酷暑では無気力で活動が鈍い。雨の日には戸外労働は通常では中止せざるをえない。このように，人間の肉体的活動は自然の働きに大いに制限されている。人間の活動は一般的には温暖で快晴な日々で大いに活発である。マーシャルは，個人ではなく種族，たとえばアングロサクソン

民族という単位では，肉体的活動能力の一部は遺伝的であるが，しかし，後天的な生存環境によっても影響を受ける，と述べている（*EOI*, 10）。種族が経常的にもつ習慣，食事，衛生等の具体的条件に応じて，比較的寒い国の人々でも活動力が旺盛なこともある。マーシャルは『産業経済学』の執筆段階でも進化論的経済観を所持していたと思われるが(17)，上の指摘は，また，この経済観そのものをはっきりとは示していないが，その影響をある程度で感じさせる言及であると思われる。というのは，このときのマーシャルの意識では，物的富の増加という観点から見ても，人間が若いときから辛くて激しい労働をして40歳で老人となって労働できなくなるよりも，もう少し穏和で健全に労働して60歳で引退する方が，国民全体として望ましいであろうからである。ここには物的だけでなく精神的にも人々が豊かになって欲しいとするマーシャルの考えが示唆されていると思われる。

### C7：人間の精神的知的能力：『産業経済学』の生産効率の条件

第2に，知識と精神的能力について（*EOI*, 10-1）。この活動能力は労働者の熟練として体化されているものであり，熟練は科学上の知識に助けられて自然を人間の都合の良いように管理する活動能力でもある。人類は未開時代とくらべれば，この活動能力を近代社会において飛躍的に成長させた。この活動能力は，第1の肉体的活動能力を健全に発揮するには必要不可欠なものである。上で民族的活動が後天的生存環境によって影響されると述べたが，まさにこのレベルの影響こそが，知識と精神活動の向上を支配する条件なのである。しかも，人間の活動能力の一部が機械として固定されることが多くなると，ますます，いくつかの仕事を調和的に目的合理的に判断するという精神的活動が重要となった。この活動能力の向上こそは，人間の日常的知識や科学的知識の向上に助けられて，人間としての一般的教養を手に入れる教育と専門化した生産技術の教育として後天的な社会制度によって実行されていることなのである。そして，マーシャルは，人間の知的教育の第1番目の目的こそは，人々が居住する生活環境すべてに関して健全だが実際に役に立つ判断を決行できる資質（qualities）を確保することである，と強調するのである。この人間の資質のうえに，労働者が特化した仕事のプロセスやシステムを理解させるのが専門技術教育である。新しい機械や生産方法が導入されたら，労働者がこれらに順応できるようにするのである。しかし，これらの教育の多くの部分は労働者が働く現場でのみ獲得できる場合が多い。このようにマーシャルは，二重の教育の重要性を強調している。もちろん，この重要性は両親が子どもを教育することに関してはより大きくなることは，上で検討した，子どもへの教育投資の事例から見ても当然であろう。

### C8：人間の道徳的性格：『産業経済学』の生産効率の条件

第3に，そして最後に，人間の道徳的性格（moral character）である。人間の生産効率を支配する，今までの二つの条件は豊かな知識を体現した人間の肉体的精神的活動能力として一つにまとめるとすれば，この条件は第2番目の条件である。なぜ2番目かといえば，上で見た，両親による子どもへの教育投資の特徴の第2にあった，両親の自己犠牲の事例が示すように，道徳的性格とは，人間が自己の欲求を自分で抑制して積極的に他人と調和する活動能力なのである。この活動能力は即時的な欲望満足を即時的に実現するよりも，将来のより高い目標の実現こそ望ましいとする自意識なのである。だからこそ，マーシャルは，この点に関してもっとも重要な活動能力を個人一人一人の正直さと人々の間の相互信頼として考え，この二つが物的富の成長の必要条件であると断定するのである（*EOI*, 11）。さらに彼は，物的富の成長の条件として重要と思われるものとして，母親の性格の重要性と，政府が次のような二重の態度を保持すること，ともいう（*EOI*, 12）。つまり，労働者が仕事をすることは，政府によって保護されるべきであるが同時に政府に無用な干渉をさせてはならないことである。政府がこの保護と無干渉という二重な態度をとることによって，労働者は真に完全な自由が行使できるとき彼の生産効率を向上させることができると，マーシャルは述べている。これに対して，母親の性格についてマーシャルは，ある国民の性格がおもにその母親の性格に依存すると強調している。母親が健全な肉体と精神をもち物事の判断においては人間として誠実であって子どもたちにはやさしく接することができる。このような性格を持つ母親であるからこそ，子どもたちは家庭において，労働者が真実に信頼できる性質をもち，清潔さと注意深さ，活力をもって一貫した努力をし，他人への尊敬と自分自身の尊重を学ぶことができるのである（*EOI*, 12）。これらの道徳的性格こそは，人間の自制心としての自意識であり，健全な肉体と精神とあわされることによって高い熟練と良好な市民として人々を行動させるのである。しかも，この意識は，両親に関しては子どもの豊かな将来を「想像」して現在の行動を可能にするのである。この意味で，家庭教育は，マーシャルにおいては一般教養教育と専門技術教育と同じくらいに重要なのであるが，母親の役割，子どものための自己犠牲的家庭教育が決定的に重要なのである。このことは『原理』においてもかわりはない（*Principles*, 11, 196, 198, 202, 207, 208, 529, 564）。このように明らかに，家庭教育の役割，そして，その犠牲的行為を伴う母親の役割が，特に強調されているのである。この役割を果たす人間の活動能力は道徳的性格に支配される。こうして，本稿のC6からC8までの検討から，「快適水準」の検討のC5の最後で述べた，人間の活動能力に関するマーシャルの，より高い生産効率と

高度な道徳的性格という二重的意味が確認される。これは，本稿の0-1で示した，経済変化が物的要因と非物的要因の2つの要因に由来するというマーシャルの『原理』での考えともかなりよく符合することである。

### 2-3　マーシャルの生産効率必需品（necessaries for efficiency）

さて，われわれはいままでの検討によって，『原理』では「生活水準」と「安楽水準」という二つの概念が存在するのに，『産業経済学』では「快適水準」の概念しか存しないことを明らかにした。この相異に対応して，『原理』で新たに登場する生活必需品の概念が存在することを指摘しよう。それは，本稿のB4の最後のパラグラフで予告したように，生産効率必需品である。つまり，『原理』でマーシャルは，生活必需品と生産効率との二つの概念を一体化して，生産効率必需品という新概念を措定したのである。われわれが，本稿の2-2で『産業経済学』の議論でマーシャルの生活必需品の概念だけでなく，生産効率を支配する条件を検討したのは，この生産効率必需品の概念を検討する準備作業であった。もちろん，マーシャルも生活必需品を3つに分類する。しかし，生活必需品，生活便宜品，そしてぜいたく品は，『原理』の議論では生産効率必需品として使用されるか否かが議論の中心を構成しているのである。

### C9：生産効率必需品とアダム・スミスの「社会的必需品」との対比

マーシャルの生産効率必需品の概念の検討に関してわれわれは，以前に本稿のC2で示したアダム・スミスの生活必需品の2分法を思い出すべきである。そこでは，「社会的必需品」が国富の増加によって増加させられる必要があるというスミスの議論が，マーシャルでは国民分配分の増加によって「生活水準」が向上する場合に意味することに，あるいは，貧困でふしだらな家族が高騰した贅沢品を使い続けることが，マーシャルでは「安楽水準」の改善の結果として弊害をもたらす場合を意味することに，類似していると見なすことができるとわれわれは述べた。しかし，この類似性は，スミスの「社会的必需品」に対してマーシャルの生産効率必需品が対応していると見なすべきであると，われわれは今からは考える。つまり，類似しているのは，国民分配分の増加の結果として労働者の分け前が増加したとき，増加した賃金の用途しだいで労働者の生産効率を上昇させたり，逆に低下させたりすることである。もちろん，スミスにおいて「社会的必需品」価格の上昇分が賃金の上昇によって相殺されなければならないのは，所定量の「社会的必需品」が確保されなければ，労働者の生産効率が維持できなくて国民分配分の増加は不可能となるからであ

る。なぜならば，スミスはこの「社会的必需品」の中にはふしだらな家庭の浪費の事例が示すようにいわゆる生活便宜品をも含めており，人々の快適さや道徳的品位をも考慮に入れていたからである。ただ，スミスは強調の度合いがマーシャルよりも低かったのである。マーシャルでは『産業経済学』の段階では増加した賃金が「快適水準」を向上させるかそれとも低下させるかであった。この向上か低下かの原因は，「経済進歩は人々の「快適水準」に，それゆえ彼らの家族愛の強さに，大きく依存している」とマーシャルが述べているように，生産効率を支配する条件の中で人間が将来や他人のために自制する道徳的性格に大きく依存しているのである。『原理』の段階ではこの性格の向上あるいは高級化に大きく貢献するように使用をする人々の生活にとって必要であれば，マーシャルは生活必需品，生活便宜品だけでなく，ぜいたく品でさえも，生産効率にとって必需品と言い方をしているのである。生産効率必需品の健全な利用は必ず，「生活水準」を向上させるのである。今や，生産効率必需品は，幸福ないし貧困の物的と非物的との両面での源泉に相当するものなのである。ここでわれわれが相当するという意味は，幸福ないし貧困の源泉が人間の活動能力，そしてその性格であるのに対して，これを高級化させるか低級化させるかは生産効率必需品の利用の仕方の段階的変化に依存しているということである。いずれにしても，この必需品は，いわば，この源泉の具体的姿での経済変数なのであり，人々が生活する場所と時代において多様に変化するものでもある。われわれは，それをこの最後の論点からマーシャルの議論を追跡しよう。

マーシャルは，スミスが生活便宜品で人間に関して快適さや道徳的品位を考慮したことには賛成できたが，労働者階級に関しては生命不可欠品としての生活必需品を中心に，つまり，労働者階級が貧困であることを中心に，議論していたことでは不十分と考えた。そこでマーシャルは，生産効率必需品の概念を次のように定義する。「より幸福な時代では，注意深い分析が行われて次のことが明らかになった。つまり，どんな場所と時代でも各々の産業階層に関してその構成員たちをちょうど維持するために必要な多少とも明確に定義された所得が存在しており，他方で，それぞれの階層の生産効率を完璧に維持するに｛はその構成員をちょうど維持するに必要な所得｝より大きな所得が別に存在していることである」（*Principles*, 68）[08]。この引用の前半の所得は，多少曖昧な解釈をすれば，本稿の C2 でのスミスの用語法では生命不可欠品に近い意味合いをもち，マーシャルの用語では「絶対的必需品」（*Principles*, 109）に近い意味合いである。後者の所得はそれよりもかなり大きい所得であることが想定される。われわれは人々の所得が，つまり，幸福の物的源泉がかなり大きいという想定を頭に入れながら，マーシャルの生産効率必需品の概念を検討し

よう。

### C10：生産効率必需品の3段階の用途：住居の事例

さて，この生産効率必需品の使い途であるが，マーシャルは3つの用途を想定している。第1に，生活必需品，生活便宜品，そしてぜいたく品，第2に，現在の快楽のみを充足する用途と肉体的道徳的強さの蓄えを準備する用途，第3に，より低級な欲求を満足させる用途とより高級な欲求を刺激し教育する用途である（*Principles*, 115）。これら3つの用途を人間の性格の段階的高級化に対応してその享受を順次始めていく3つの段階と，マーシャルが見なしていることを，われわれはまず指摘しよう。そこでわれわれは，生活必需品として最も基礎的な住居を，マーシャルが生産効率必需品として次のように述べている事例（*Principles*, 88）を検討する。住居は天候や外敵などからのシェルター，避難所としては，スミス的にいえば生命不可欠品に近くて，絶対的な必要物である。しかし，マーシャルは，この必要性が人間の充実した生活の必要物としてみた場合には非常に小さい，という。なぜなら，小さいが堅固に建築された小屋ほどの大きさしかない住居は，優秀な避難所にはなるが，その狭さから生ずる息の詰まる雰囲気，どうにもならない不潔さ等が生活の品位と静穏さを著しく欠如させると，睡眠など肉体的健康に重大な害悪を居住者にもたらすからである。狭い小屋程度の用途は，上の段落の第1番目の用途のなかで生活必需品の項目としても，つまり，スミス流では生命不可欠品としても役立っていないのである。住居は避難所としてだけでなく，家族が肉体的精神的，そして道徳的に健全な生活を過ごし生涯を完了する，というより高度な用途がある。特に，本稿のC3，C5とC8の『産業経済学』での議論からも示唆されるように，幼少期の子どもの死亡率の高低は，両親が十分に子どもの世話をする活力と注意力を持つかどうかに大きく依存する。さらに，子どもが次のようなもっとより高級な目的の重要性を学んで修得するには，母親が特別に健全な肉体と精神をもち，物事の判断においては人間として誠実であって子どもたちにはやさしく接することができることが必要である，とマーシャルは強調していた。この目的とは，本稿のC8で述べたマーシャルの議論を借りて表現すれば（*EOI*, 12），労働者が真実に正直で信頼できる性格を持つこと，清潔さと注意深さを備えて，活力をもって一貫した努力を続けること，そして他人への尊敬心と自分自身の尊重心を獲得することを学ぶという目的である。こうして，住居は，その主である両親の現在の欲望の満足だけではなく，次世代を担う子どもたちの健全な成長のためにも役立たなければならない。その上に，さらにより重要な目的とは，母親の犠牲的行動を伴いながら，子どもたちは両親よりも高度

な熟練を手に入れるだけでなく，社会的により有能で効率的な労働者に成長することである。この目的を実現するように生産効率必需品を使用することは，上の第3段階目の用途に相当するが，この用途としても，住居は役立たなければならない。

マーシャルは，上の3つの段階の中で第1段階から第3段階目までしだいに高級化する用途として人々が生産効率必需品を堅実に享受するとき，人々は幸福の源泉を豊かにできると考えた。しかも3段階目の用途として生産効率必需品が十分に享受されなければならないとマーシャルは考えた。なぜなら，この用途として人々の支出がなされるとき，人々の「生活水準」は向上して，国民分配分が増加して，これらの人々の分け前が増加するだけではなく，彼らの性格の高級化を伴うはずである。この性格の高級化による，自己利益の自制という自意識を強める人々の自尊心の強化は，他人への尊敬心の向上を伴い，人々の社会的活動の動機を欲求の満足から活動それ自体に変更していく。かくてマーシャルは，社会の最低階層の人々にとっても生産効率必需品としての住居はその所得にくらべてみればより広い方が望ましく，加えて十分な設備が整っていることはもっと望ましいというのである（*Principles*, 88）。しかし，現実の最低階層の住居は，著しいほどに狭く非衛生的であった。この原因こそは，この階層の人々には，本稿のB3の検討で示したように，また本稿のD10で再び示すように，道徳的性格である自尊心が著しく欠如していたことである。この欠如の著しい人々は，所得の増加を家族を犠牲にしてでも利己的に自分の「安楽水準」の改善にしか利用しないのである。このように，マーシャルは，多くの人々が自尊心の高級化では難しい状態にまだある，と考えていたと思われる。しかし，人間が幸福になって行くには，生産効率必需品の3段階の用途を段階的に，しかも後退することなく享受できなければならない。このとき，「生活水準」が向上すれば，幸福の源泉である人間の活動能力，そしてその性格も必ず高級化するはずである。

### C11：生産効率必需品の3段階の用途：最低な社会階層の事例

われわれはここで，生産効率必需品のマーシャルの事例をもう一つ追加しよう。それは，マーシャルの生きた時代の未熟練労働者とその家族にとっての生産効率必需品である。1. 住居に関しては複数の部屋をもった排水と通風の完備したもの，2. 着替え用の下着を含んだ暖かい衣類，3. きれいな水，4. 適切な量のミルクと肉を含む豊富な食料，5. 適切な教育と娯楽，6. 労働者の妻が母親と家計の義務を適切に遂行する仕事以外の活動からの解放である。このような条件で使用される生産効率必需品の用途は，上の段落で示した，3段階の分類をほぼ包含しているであろう。特に最後の6番目の家族を扶養し教育

する仕事への母親の専念という点に注目すると，健康で誠実で聡明な母親は，幼少の子どもの健康を十全に管理するだけでなく，自尊心や他人の尊重という性格をも教育できるとすれば，上の生産効率必需品の用途の第3段階目もこの家庭は実行することができよう。つまり，低級な欲求の満足ではなく，高級な欲求を刺激し教育することである。ただ，この事例は未熟練労働者に関するものであって，社会の最低階層であることから見れば，逆に，上で見た，生産効率必需品の健全な充足の必要性は，肉体的にも精神的にも健全で隣人との交際においても立派な体裁を保って道徳的品位も高く，堅実で倹約を励行する幸福な生活を意味させていると思われる。社会の最低階層でもこのような状態でなければならないと，マーシャルは考えたからこそ，上の項目のどれか一つでも欠けた場合，適切な飼育や調教をされない馬の生産効率や石炭供給が不適切な蒸気機関の生産効率がだめになるのと同一な仕方でこのような労働者の生産効率は損なわれると強調している。その主要な理由は人間としての尊厳の喪失であろうと思われる（*Principles*, 69-70）。社会の最低階層では，物的生産効率必需品の小さな不足でも，道徳的性格である自尊心の低級化に繋がることが示唆されていると思われる。

### C12：生産効率必需品の概念の創造の意義

以上からわれわれが考えるには，マーシャルは，人々が所得の増加によってより豊かな生活手段を手に入れたら，ただ単に欲求をより多くより多様に満足させて遊び暮らすという考えを望ましくない生活状態として，否定したのである。そして，マーシャルは彼の定義する生産効率必需品をより多くより健全に享受することこそは，人々が単に生産効率を引き上げるだけでなく，人間としての行動の動機をより高級な活動をするように人間の性格を変更させることを導く，と考えたのである。それゆえ，マーシャルにおいては，人間のより高級な行動とは人間の性格の高級化なくしてはありえない，と考えられているのである。なぜなら，マーシャルが生物の進化論から学んだことはすでに本稿の0-2で触れたが，人間の性格がゆっくりだが変化すること，しかもこの性格が高級化することもあれば，低級化することもあることである。そして，より高級な活動をすることへの動機のこの変更は，マーシャルにおいては経済進歩の真実のキーノートなのである（*Principles*, 689）。このキーノートとは，経済進歩の指標が人々の欲求の発展よりも今までに経験したことのない新しい活動の発展にあることである。つまり，マーシャルは，生物の進化論から，人間と経済制度との進歩の傾向について，より高級な社会的活動を実行し発展させることが望ましいとする意識がすべての社会階層に普及することだ（*Principles*, 88-9）と，理解し

たのである。そうだからこそ，マーシャルは，生産効率必需品の概念を『原理』で新しく創造したのであった。この新しい概念の創造を可能にしたのは，人間の活動能力の段階的変化，その性格の段階的変化であった。この創造の意義を，われわれは『産業経済学』での議論と対比することで強調しよう。

上で見た，生産効率必需品の第3段階目の用途の重視は，『産業経済学』の議論にはない。このことは，『産業経済学』の段階では生産効率を支配する原因が「快適水準」の変化とはあまり緊密に連関させて議論されていなかったことを示唆する。この支配原因は本稿のC6，C7，C8で示したように，人間の肉体的活力，知識と精神活動能力，そして道徳的性格の3つであった。もちろん，生産効率の継続的上昇から見れば，人間の肉体と精神とが健全でより高度な知識をたずさえて活発に活動できることが，『産業経済学』での議論でも生産効率必需品の概念の『原理』での議論と同じくらいに重要なことであったと思われる。これに対して，道徳的性格に関しては，『産業経済学』と『原理』では少し違った形で議論される。マーシャルは『産業経済学』で道徳的性格の中でもっとも重要な活動能力を正直さと相互信頼として考え，この二つが富の成長の必要条件であると断定した後で，これに追加する形で，子どものためには自己犠牲をいとわない堅実で優しい母親の性格と政府の無用な干渉の排除による労働者の自由な経済活動が指摘されている。だから，繰り返すことになるが，われわれは，本稿のC5およびC8の最後の方で示したように，『産業経済学』での生産効率を支配する原因の3つは，2つに分類できると思うのである。つまり，3つのうちの前2つ，肉体活動能力と精神活動能力がより高い生産効率を直接に支配し，残りの一つである道徳的性格は高い生産効率を次世代にまで持続させる原因なのである。このように，『産業経済学』での生産効率を支配する原因は，より高い生産効率と高度な道徳的性格という二重的意味をもつと見なされる。

この二重的意味の観点に立つとき，「快適水準」によって子どもを将来にわたって健全な次世代として養育する準備ができるまでは人々が結婚を控えるという道徳的意味合いを，マーシャルが強調したことがわれわれには良く理解できる。すなわち，人間の幸福の実現には，その物的源泉よりもその非物的源泉の方が相対的により強い影響を与えることが『産業経済学』の段階で，マーシャルは把握できたのである。だが，すでに本稿のC3で指摘したように，「快適水準」は人口法則の一部として定義されている。「快適水準」の向上が，一方で子どもの出生率を低下させたとしても，他方で子どもの死亡率を大きく低下させることによって，より多くの子どもが健康な大人に成長できるようにするので，総人口が増加することを，マーシャルは強調したのである。ここには，人々の生活が質的に向上

する可能性が示されている。だからこそ，「経済進歩は人々の「快適水準」に，それゆえ彼らの家族愛の強さに，大きく依存している」（*EOI*, 28）と述べたのである。しかし，経済進歩が「快適水準」に大きく依存しているのだが，「快適水準」が直接に支配するのは人口成長であって経済進歩ではなかったのである。本稿の 1-1 で見たように，『原理』では，生産効率の上昇が「生活水準」の向上をともなうことができるとき，経済進歩が発生するということが強調されているのである。だからこそ，経済進歩が生じるには，人々が生活手段を生産効率必需品として，上の 3 段階の用途で，特に第 3 段階目の用途で健全に利用することが必要条件なのである。このように，生産効率必需品の概念の『原理』での登場は，経済進歩の重要な要素の一つとして人間の道徳的性格をマーシャルが特に重視したことと符号していると思われる。

## 3.　人間の道徳的性格の高級化の遅さ

### 3-1　卓越それ自体への欲望を動機とする人間の性格の高級化

**D1：道徳的性格の高級化を求める生産効率必需品の第 3 段階の用途**

本稿の 1-1 で見たように，「生活水準」の向上が人間の活動能力の中で「知性，活力，そして自尊心」という人間の活動能力の向上つまり高級化を意味していた。本稿の C12 の最後の段落で，生産効率必需品の概念の『原理』での登場はマーシャルが人間の道徳的性格を経済進歩の重要な要素の一つとして重視したことを指摘した。この指摘を導いたのは，この最後の段落の一つ前の段落でわれわれが示した，『産業経済学』での生産効率の支配原因をわれわれが二重的意味で把握したことであった。この観点は，経済進歩により直接的な関係を持つ「生活水準」の議論にも適用できよう。この二重的意味の観点から見れば，「生活水準」が依存する要因も次のように二重的に把握できる。つまり，知性と活力はより高い生産効率に，自尊心は高い道徳的性格に対応するものを意味する。人間の活動能力の二重的把握に関して，マーシャルは『産業経済学』と『原理』では同じスタンスであったが，それを適用した概念が一方では生産効率であり，他方では「生活水準」であった。そして，「生活水準」は生産効率必需品と一緒になって経済進歩の重要な要素なのであった。だからこそ，もし，人間の自尊心という道徳的性格が低級化すれば，所得が増加しても「安楽水準」の改善に導き，過大に増長した欲求は働く意欲を失わせて，子どもの収入を当てに暮らすという非道徳的行動に貧困者を向かわせる。しかも，この貧困者は，肉体的精神的活動力そのものをただちに喪失したわけではない。働くことができるのに自

分は働きたくないのであり，自分の利己的で即時的欲求の実現にこだわるのである。このように，道徳的性格の悪化は，『原理』の議論では，「安楽水準」の変化というチャンネルを通して，人々を幸福な状態ではなく貧困な状態に導くのである。本稿の C10 で指摘したように，人々の生産効率必需品の用途は 3 つの段階をもっていた。人々が貧困を避けて幸福に向かうには，第 1 段階目の用途から第 3 段階目の用途を十分に利用しなければならない。このためには，これらのいずれの用途で利用しようとも，生産効率必需品はすべての用途で社会的に有用に利用されなければならない。このようなことが現実に人々が実行できるには，本稿の C11 で示した生産効率必需品の事例にあるように，最低ランクの社会階層である未熟練労働者でさえより広くて設備の整った住居や豊かな食料が望ましかったことからみても，この階層でさえ幸福の物的源泉である所得はかなり高いと想定される。だからこそ，マーシャルは，社会の最低階層でさえも，かなり広くて設備の整った住居が肉体的精神的だけでなく道徳的にも，健全で立派な体裁をもった生活をしていることの重要な指標であり，良好な社会的評判をもつ人々のシンボルと，見なしたである。したがって，もっと上層な社会階層において，より高級な社会活動をするのに十分な広さと上質さをもった住居をすでにもっていても，さらにより高級な社会的活動をより多く実行する人々には，無制限に近い広さと上質さをもつ住居が望ましいと，マーシャルはいうのである（*Principles*, 88）。

もしわれわれが貧困者がより豊かになっていくが，決して貧困には逆戻りしない物語を想定すると，かれは自分の生産効率必需品を第 1 段階目から，第 2 段階目を経由して，最後に第 3 段階目の用途を堅実にかつ自覚的に使って生活をするとき，肉体的精神的にひじょうに健全であるだけでなく，道徳的性格においても高級で健全になって行くであろう。このとき，彼の「生活水準」は向上して，彼の所得は増加すると共に，彼は自分のことだけでなく将来を担う子どもたちのこと，さらには広く社会全体の現象により強い関心を持つことになる。彼は，これらに関する社会的活動に参加して学習し経験を累積することによって，社会的活動の高級化に貢献できるようになるであろう。このように，われわれは生産効率必需品の 3 段階の用途を，人間の活動能力の高級化と関連づけたのである。この関連づけは，われわれが想定した貧困者の場合だけでなく人々全体に一般的に妥当するはずである。またここでも繰り返すが，本項の 0-2 で示したように，高級化は単純なものから複雑なものへ，同質的なものから異質なものへ変化することであった。人々がこの 3 段階の用途を享受していく順番も，人間の活動能力を高級化するように第 1 の用途の段階から始まって，第 2 段階の用途を経由して第 3 段階の用途に変化していくと見なすこと

ができる。この限りで，より多くの人々が第3段階の用途を享受できるようになればなるほど，これに対応して，人間の知性，活力，そして自尊心という人間の性格はより高級化しているであろう。しかし，本稿のA5で示したように，この性格の中で道徳的性格は最高級の段階に位置づけられていた。と同時に，本稿のB4で指摘したように，道徳的性格の高級化は難しいのである。そうだからこそ，人間の性格の高級化が道徳的性格をも高級化することのできる段階に到達したとき，そしてその高級化が持続することがあれば，経済制度と人間は実質的に高級化しているとマーシャルは考えたであろう。（しかし，本稿のD2で少しだけ触れて，本稿のD11以降で示す予定であるが，道徳的性格の高級化にはまだ別な困難が存している。）

**D2：人間の高級な活動とは**

さて，上の段落の最後で述べた，高級な人間の高級な活動をマーシャルはどのように考えているのか。もちろん，より多くの人々がより多くの高級な活動をすることは，マーシャルにおいて経済進歩に導かれる状況が意味することであろう。そして，上の段落の議論からすると，この状況を説明する重要な契機は，人間の道徳的性格の高級化であろう。逆に言えば，「安楽水準」の改善がもたらす弊害は物的な損害を発生させるだけでなく，人間としての尊厳を支える自尊心の悪化を意味し，働けるのに働かないという事例が示すように，自尊心だけでなく他人への尊重心をも悪化させる。これは低い生産効率を意味することで低級な行動であるだけでなく，人間の道徳的性格を悪化させるという意味でも低級なものである。マーシャルは，低級化，つまり悪化の程度が著しいときには社会全体の人々に悪影響が及ぶので反社会的とさえいっている（*Principles*, 8, 693, 700, 704, 707, 709, 719）。それゆえに，このような行為は社会的には禁止されるべきであって，健全な人間は強い自尊心によって自制すべきことなのである。では，人間の高級な活動とは，自分の利己心を自制して他人の利益に奉仕することなのか？　たとえば，健全で聡明な母親が幼少期の子どもの教育と家計の切り盛りに専従することなのか？　われわれは，マーシャルでなにをもって高級な活動なのかの問題について彼のキーとなる考えを，上の段落で述べた。それを要約すれば，次のようであった。マーシャルでは生産効率必需品の3段階におけるより多くの健全な享受こそは，生産効率を引き上げるだけでなく，人間としての行動の動機をより高級な活動をするように人間の性格を変更させることを導く。この性格の変更において，上で触れた事例，「安楽水準」の改善の弊害，健全で聡明な母親の子どもの養育と教育への専念が示唆するように，マーシャルにおいては人間のより高級な行

動とは人間の道徳的性格，自尊心の高級化なくしてはありえないと考えられているのである。このようにマーシャルでは，自尊心（self-respect）は人間の本当の幸福（true happiness）をもたらすように人間活動を高級化すると共に，経済進歩を促進するように生きる努力を人間にさせる人間の性格なのである（*Principles,* 17）。このように，マーシャルが自尊心を経済進歩と強く関係していると見なしているからこそ，本稿の A5 で指摘したように，われわれは，道徳的性格を人間の性格の高級化の段階的変化で最高段階に位置づけたのである。しかし，本稿の D11 とそれ以降で示す予定であるが，自尊心が経済進歩ともっとより強い関係性をもつという意味では，道徳的性格の高級化はその重要性をもっとより強くするでのある。本稿の D11 の議論では，道徳的性格は人間性格の高級化の段階の，第 2 段階，つまり，中間段階に位置づけられるであろう。この変更は，人間の活動が最高級化する段階に至ることに対応している。この対応の検討のために，マーシャルは，卓越それ自体を求める欲望（the desire for excellence for its own sake）という活動の動機と，芸術的性格の分化，を必要としたと，われわれは考える。だから，この点からも，マーシャルは生物の進化論から，人間と経済社会との進歩の傾向について，より高級な活動を実行し発展させることが望ましいとする意識がすべての社会階層に普及することだ（*Principles,* 88-9）と理解したのである。

### D3：活動の動機としての，卓越の欲望と自己顕示の欲望の対比

そこで，われわれが人間の活動の最高級化に関連してもっと具体的に考えるべきことは，変化した人間の性格，特に道徳的性格の高級化が人間の行動の動機を具体的に何に変化させるとマーシャルが議論しているかである。それは，まさに卓越それ自体を求める欲望であり，人々がこの欲望を動機として活動をすることである。そして，マーシャルはこの欲望を，単に目立つこと，自己顕示の欲望というより低級な欲望と対比して高級な欲望と呼んでいる。しかも，この二つの欲望は，マーシャルの時代意識感覚では，同じ程度で広い範囲の社会階層に広がっている。マーシャルの考えでは，卓越を求める欲望は，現実に人々の活動を支配していたのである。今われわれは，高級な活動とは何かを問題にしようとしているのだが，自己顕示欲の欲望を動機とする活動を低級な活動とマーシャルが見なしている事例の検討から始めよう。この事例の検討は，それと対置的関係にある高級な活動が何かの理解を大いに助けるとわれわれは思うのである。もちろん，マーシャルがこの二つの欲望を対比的に検討した意味に関しては，われわれと同じ考えであったろう。この活動の事例をマーシャルが低級とよんでいる理由こそは，われわれが上の本稿の D2 で

述べたように，自己顕示欲の欲望を動機とする活動が「安楽水準」の改善の弊害をもたらして道徳的性格の悪化，低級化をもたらすことである。

この活動の事例として，次のように述べられている。たとえば，自己顕示欲という欲望は，利己心に束縛された欲望でしかなく，かってのナポレオンのように，自分の名前や業績が遠くの国々や遠い時代の人々の話題に上らせようとする強烈な野心から，村の祭りの日に新調したリボンが周りの目を引きつけることを望む名もない少女に至るまでいろいろな段階で存している（*Principles*, 89）。ナポレオンの歴史的業績は，他国を占領するための戦争行為であった。それは，ナポレオン個人の私的欲望でしかない侵略欲であり，他国を自分の財産として所有し，それを誇示するために皇帝に即位させたのであった。この行為が人々に付随的に利益をもたらしたが，それはごく限られた人々であったのに対して，生命や財産の破壊という弊害を多くの人々が被った。他方で，名もない少女のリボンはそれ自体では他愛もないように見える。しかし，この少女がリボンをほめられたことで，人々をもっと引きつけるリボンを欲しがる野心を持つようになってしまったらどうであろうか。ナポレオンもこの少女も，マーシャル的にいえば，「安楽水準」の変化が生じて，欲求のみを過大に増長させたのである。上で見たように，ここには人間としての道徳的性格の悪化しかない。このように，マーシャルでは，「生活水準」を向上させないので経済進歩を導かない影響を与える活動が低級であり，経済進歩を促進する影響を与える行動が高級なのである。この分類基準が，つまり「生活水準」の向上か低下が，人々の社会的活動が高級かそれとも低級かの第1の基準である。さらに第2の基準は，自己顕示欲という欲望の場合に村の少女のリボンとナポレオンの歴史的業績の例が示しているように，ある人の行為がもたらす道徳的性格の悪化，低級化の程度である。この程度は悪い影響が及ぶ人々の活動の範囲の大きさで規定されていると思われる。村の少女のリボンの事例ではこの少女そのものの名前をわれわれの誰も記憶していないのに対して，ナポレオンの事例ではその名前を現在のわれわれでもよく知っている。もちろん，この第2基準も，卓越を求める欲望を動機とする活動が道徳的性格を高級化させることにも当てはまる。卓越の事例を次に検討しよう。

### D4：卓越の欲望の登場と道徳的性格の高級化の必要性

かくて，自己顕示欲を動機とする活動が人間の道徳的性格を低級化をもたらす。これと対置的に考えると，卓越を求める欲望にもとづく活動はこの性格の高級化に依存して可能となるのである。それは，本稿の1-1とD1での議論からわかるように，「生活水準」の

向上に，そして知性，活力だけでなく自尊心の強化に依存して可能となるのである。この事例としてマーシャルは次のようにいう。「卓越自体を求める欲望も，ニュートンやストラディバリウス」（*Principles*, 89）のように万人がその業績や作品の優秀さを称賛する卓越さから，「誰も見ておらず急いでいるわけでもないときに自分の船を巧みに操縦して」（*Principles*, 89），船がこの操縦にしたがって安全にかつ速やかに進行することを喜ぶ名もない漁師の望みまで，多様である。この事例でも，自己顕示欲の事例とおなじやり方で，高級な活動として卓越の欲望を動機とする活動を上の第1基準で規定し，道徳的性格の高級化の影響が及ぶ程度の大きさの致命的に相異する上の第2基準の事例として，漁村の名も知れぬ漁師からニュートンらの場合を指摘している。さて，この事例で，名も知れぬ漁師の例と，偉大な学者として現在も著名なニュートンをなぜ同列に扱っているのか？マーシャルの答えは，彼らの人間としての活動能力が，そしてわれわれが本稿の Z2 で示した，活動能力と性格の密接不可分な関係からすればかれらの性格が最高級であり，それゆえ，最高級の発明を社会に送り出すことに絶大な貢献をしたからである。名も知れぬ漁師の場合，船を操船する熟練は彼の居住する漁村では最高級であろう。他方，ニュートンの場合，重力の発見に行き着いた活動能力はもちろん最高級であり，それがもたらした発明は無数に存しているだけでなく，その良質な影響は現代にも波及している。つまり，これら2人の貢献は，影響の程度は大きく違うものの，「生活水準」の向上，経済進歩への貢献という質の面では同列なのである。以上から，マーシャルが自己顕示欲と卓越を求める欲望を対置的に議論したことは，前者が「安楽水準」の変化による弊害をもたらし貧困を導き，後者が「生活水準」の向上をもたらすことで幸福を導くという，幸福と貧困の対置的性質を説明する目的と対応して考えられる。

### D5：生産効率必需品の創造の意義の再確認：人間の性格の最高級化

そして，マーシャルがもっと強調したいことは，名も知れない漁師とニュートンの2人の活動が社会へ大きな積極的貢献をできるのは卓越それ自体を求める欲望を動機としていることである。しかし，このような活動は，この2人にしても，どのような個人でも一挙に一日で円滑にできるわけではない。かなり長い年月を必要とする。われわれは，人間が自分の活動能力をどのようにして最高級にまで向上させることができるのか，すなわち，卓越自体を求める欲望が彼の行動を支配するようにかれが変化できるのかの問題に立ち入ろう。マーシャルのこれに対する答えは次のようである。なお，この答えは本稿の 0-2 で述べたが，多少ではあるが力点の違いがあるので，繰り返しを恐れず，再説する。人間は

活動環境の変化に適応して変化する。それもより単純なものからより複雑なものへ変化する。本稿の A3 で指摘したように，スペンサー的には，進化そのものは変異の連続であり，生物はより単純で下級なものからより複雑で高級なものへ変化する。なぜなら，人間の活動能力，そしてその性格は活動環境の変化が求める仕方に適応して行使されると高級化し，この仕方に適応できなければ低級化する。「習うより慣れろ」である。マーシャルは生物の進化論だけでなく功利主義の影響を受けていたから，人間が，その行動の動機を別にしても，行動することそのものに喜びを感じ，より高級な行動をできたときその成功感覚に幸福を感じると考えた。逆に行動しないことは苦痛であり，より下級な行動がもたらす挫折感覚に貧困を感じる。しかし，人間はゆっくりしか変化しない。変化が開始されて，成功するにしても失敗するにしても，時間が必要である。ましてや最高級にまで成功するには，その中間で経過するプロセスが問題となる。以上がわれわれの要約である。この推論を現在検討中の問題に適用しよう。

われわれは今，「生活水準」が向上する場合，つまりより高級な活動の場合を検討していた。この場合，本稿の 1-1 で見たように，人間の肉体的活動能力である活力，精神的知的活動能力である知性，そして道徳的活動能力である自尊心が高級化される。この高級化のためには，彼の生活手段がマーシャルの議論ではまず生産効率必需品として健全に活用されなければならなかった。この必需品の用途は，3 段階であった。繰り返しになるが，ここに再現しよう。本稿の C10 で示したように，第 1 段階は，生活必需品，生活便宜品，そしてぜいたく品，第 2 段階は，現在の快楽のみを充足する用途と肉体的道徳的強さの蓄えを準備する用途，第 3 段階は，より低級な欲求を満足させる用途とより高級な欲求を刺激し教育する用途である。これらの用途の中で第 3 段階目をマーシャルが特に重視していることも上で述べたが，それは，人間はゆっくりしか変化しないという生物の進化論からの教訓によれば，通常では，人間は第 1 段階目の用途を最初に充足し，自己の肉体と精神的健康を確保し，その後で第 2 段階目の用途でもひじょうに重要な家族の健康や教育を充足して，第 3 段階目の用途の充足は一番後になるのである。つまり，マーシャルは，人間の活動能力がこれら 3 つの段階を順番に経過して高級化していくと見なしたのである。その順番の特徴は，上の段落で示したように，人間はより低級な活動から高級な行動へ変化するという類似をもっている。第 1 段階では，人々は現在の欲望満足において生活必需品，生活便宜品，そしてぜいたく品という具体的用途で選択という判断をする。第 2 段階では，現在の具体的用途に加えて蓄えの準備という将来の用途に関しても選択するというより複雑な判断をする。そして，最後に，この複雑な判断に加えて，高級か低級かという基

準で選択するというもっと複雑な判断をする。そして，マーシャルは，人間活動において最高の判断をする具体的な動機こそは卓越だ，というのである。これは人間の活動能力を最高級にまで導くから，人間の活動能力の成長は完成する。この意味でマーシャルは，本稿の C10 と D1 で示したように，最低の社会階層である未熟練労働者の生産効率必需品の量と種類に関して，かなり大きくて多様なものを想定し，住居に関しては無制限に大きい場合がある，と強調したのである。マーシャルが生きた時代に関するかれの時代認識では，労働者階級の多くがまだかなり貧しかったので，貧困な労働者はまだ第 2 段階にも到達していないとマーシャルが想定していたと推定できる。というのは，もし労働者が第 2 段階に立つことができるほどに大きな所得を手に入れたとしても，本稿の B2 と B3 で示したように，増加した所得は彼の「安楽水準」を変化させて，前の段階に戻る可能性もあるからである。この点で，『原理』で「生活水準」と「安楽水準」の概念が設定され，この設定を支える概念として生産効率必需品が創造された意義が，本稿の C12 でも触れたが，ここでもまた確認できると思われる。

**D6：名も知れぬ漁師の事例：彼の活動の 3 段階の高級化**

さて，われわれは，名も知れぬ漁師の例に戻って，上の 3 段階においてかれの肉体的活動能力，精神的知的活動能力，道徳的活動能力が高級化して，彼の操船熟練が最高級になる，いわば空想的事例を展開しよう。もちろん，そしてわれわれが本稿の Z2 で示した，活動能力と性格の密接不可分な関係からすれば彼の性格も高級化するであろう。まず，彼がひどく貧困な家庭には育っていないで，両親共に健康で健全な家庭に育ったことを前提とする。したがって彼は肉体的にも精神的にも健康であり，健全な家庭教育を受けて人間としての自尊心の素地をもっているとするのである。彼が漁をするために船を操船することをたぶん父親から教わるであろう。これから彼の操船熟練の訓練が始まる。船の重い艪を漕ぐ体力がなければ，それを強化する。艪を漕ぐために必要な知識は父親から直接に指導される。網の使い方や魚の生態などの知識も同じように指導される。こうして親の教えを糧にして彼はやがて船を一人で漕いで漁に出ることになるであろう。親の教えの中には海が荒れたときには漁を休むこと，あるいは不漁のときには漁場を変えることなどが含まれているであろう。もし父親が優秀な漁師なら，その子どもが教わることも多いはずである。こうして，彼の漁獲によって彼の生活必需品，生活便宜品が十分に充足でき，ぜいたく品でさえ利用できるようになったとすれば，彼は結婚を考える年齢なっており，ぜいたく品さえも購入できるとすれば，『産業経済学』での「快適水準」の定義が求めた，家族

を扶養できるまでになったので結婚をするであろう。

彼は，第2段階に入ったのである。彼の活動能力，そして，その性格が高級化し，それがもたらす収入が向上したのである。通常では，後は子どもを次世代の効率的労働者として養育することで彼の生活は完了する。しかし，この途中でかれに大きな災難が起きたとしよう。たとえば，不漁が続くのである。これは収入の断絶を意味している。彼が漁師をやめて，転職してこの漁村を出て行けば，この空想物語はおしまいである。しかし，彼は不漁の原因を調査して，この大困難を乗り越えようと決意したとしよう。そして，彼は幸運にも今まで漁をしていた場所よりもかなり遠い場所には魚がたくさんいることに，艪を漕ぐ船ではそこまで行くのも難しいことを発見したとしよう。彼は船を改造する工夫を始めるであろう。今までよりも速くて安全に船を進めるために。彼は，この地域に風が吹いているのを知っていてそれを利用することを思いつき，船に帆を取り付けるのである。しかし，彼にとって帆の着いた船を操船する技術は未知であり，未経験であった。それでも試行錯誤して，「習うより慣れろ」精神で帆の着いた船を安全にかつ速く進行できる操船方法を創造したとしよう。これで彼は今まで以上に多くの漁獲ができるようになった。つまり，彼の生産効率が大きく上昇したのである。船の改造は成功したのである。彼はまったく新しい熟練を創造したのである。それゆえ，彼の熟練は，今や最高級である。他の漁師にはマネのできないことである。転機は，未知で未経験なことに立ち向かったことである。しかし，この新しい熟練を独り占めにして他の誰にも使わせないとしたら，彼は道徳的性格において卑しいといわれるであろう。彼は嫉妬とねたみの対象であろう。逆に彼の道徳的性格が強くて自尊心において高ければ，彼は新しい熟練を他者にも使わせるであろう。彼は称賛され，誇りの高い人物と称されるであろう。そして，彼の熟練は今では最高級なのであるから，他の漁師が学習して手に入れる模範となるであろう。この結果は当然，少なくとも彼の居住する村の人々の豊かさとなるであろう。

他方，彼はこうして，彼の活動能力，それゆえ彼の性格，の高級化の第3段階にはいる。なぜなら，彼は独創的工夫によって豊かな収入が手にはいると共に道徳的性格として強い自尊心と他人への尊重心を持っている。この段階では，この漁師の操船熟練を発揮する活動が卓越を動機とするようになると，マーシャルはいうのである。試行錯誤中の苦い経験の後の成功は，この漁師にその熟練をもっと向上させることを目ざすという欲望を発生させるのである。それは，新しい網を作ってこの網を帆船で引くというものかもしれない。網を引くとなると操船の仕方も変わるであろうから，彼の操船熟練に新しい要素が付加されるであろう。こうして，彼は，より高い生産性を実現することになる。しかし，彼の活

動の動機は今や，よりたくさんの漁獲よりも，それを実現する操船熟練の改善に移行する。こうして，彼の熟練の改善はより多くの人々の生活の改善に貢献する帰結になる。つまり，彼の活動は高級なものとなる。卓越を求める欲望は，低級な活動を回避して高級な活動を優先するという高度な欲望なのである。これは，生産効率必需品の第3段階の用途の享受を意味する。こうして，名も知れぬ漁師の操船技術の改善はやがて，村だけでなく全国に普及すれば，経済進歩に貢献することになるであろう。この意味ではこの漁師は，ニュートンの業績に劣らない貢献をすることであろう。かくて，卓越を動機とする活動は，自分の利得を大きくするとか他人に奉仕するとかには直接的には関係なく，ただ間接的に帰結として関係するだけであり，人間の活動の動機としてみれば，利己心と利他心に対していわば第3の動機である。

以上からわれわれは，幸福の源泉としての生産効率必需品に関して，人間の活動が最高級になることを明らかにした。このとき，人間は，より正確には人間の性格は，卓越それ自体を求める欲望を活動の動機にするように成長したのである。そのプロセスは，人間が生産効率必需品をその第1段階の用途から初めて，最後に第3段階の用途まで，より複雑な判断で健全で堅実に享受していくことであった。ここにも，「自然は飛躍せず」という進化論的な人間の段階的変化の議論が適用されている。すなわち，人間が生産効率必需品を利用するプロセスは，より単純な判断を必要とする段階から第2段階を経由して，最終の第3段階にゆっくりと至る。しかも，第3段階では，この生産効率必需品を享受する活動は，卓越それ自体を求める欲望に支配されるように成長した人間の性格に支配されるのである。

### 3-2　幸福あるいは貧困の非物的源泉としての道徳的性格

#### D7：自尊心の高級化の重要性の確認

次にわれわれは，幸福の源泉の中でマーシャルが非物的源泉を重視していたことを確認しよう。もちろんわれわれがここでこの源泉の中で焦点をあてるのは，人間の道徳的性格とその高級化，特に自尊心とその高級化である。なぜなら，自尊心は，高級化すれば人々の望ましい活動能力を高級化することを伴うが，反対に，低級化すれば人々の望ましくない活動能力を低級化することを伴うのである。つまり，自尊心の低級化は，「安楽水準」の改善の弊害の議論からわかるように，人間の尊厳を喪失するまでに貧困をもたらすかもしれないのである。また，われわれは幸福の源泉の具体的姿である生産効率必需品が人間の活動能力，そして性格を高級化することを，自尊心の高級化を含めて述べてきた。しか

し，その具体的関係についてはまだ述べていなかった。このことも併せて，自尊心の重要性を検討しよう。

われわれが本稿の A5 で述べたように，マーシャルは，人々が幸福になるか貧困になるかに関して物的富である所得の大小の，つまり，幸福の物的源泉の，重要性を強く認識していたが，それ以上に彼が重要と考えていたのは，「生活水準」に影響する「知性，活力，自尊心」を担う人間の性格，つまり幸福あるいは貧困の非物的源泉である。しかもそれらが，所得と同様に変数であることである。もちろん，これらの活動能力は人間自身の一部であるので，所得の変化速度にくらべれば，格段に遅い。しかしそれだけでなく，これらの活動能力の変化の仕方が多様であって，一元的には論じられない。それゆえ，マーシャルは分析上の工夫として「他の事情にして等しければ」という条件項を採用したのである。もちろん，「他の事情にして等しければ」という条件項で補足しにくかったのは変数としての人間であったことはいうまでもない。このことをマーシャルの議論から検討しよう。ただし，ここでは「生活水準」の改善の程度，あるいは「安楽水準」の程度がどのような予期しえない事態を招くかを検討することに限定する。このことを通してマーシャルが知性，活力，自尊心という人間の活動の非物的源泉のなかで人間の尊厳やプライドを内容とする自尊心を特に大切にしていたことを再確認できると思われる。つまり，卓越それ自体を求めることを動機とする活動が人間の活動能力を高級化するには，道徳的性格も高級化しなければならないことを再確認するのである。確認すべきことは，道徳的性格である自尊心の高級化の速度の遅さ，あるいはその実現の困難さである。

言い換えれば，人間の活動が最高級化するには，道徳的性格の高級化が通過すべき段階として実現されなければ，人々をより高級な幸福に導くであろう経済進歩は不可能と考えられるのである。この検討にとって本稿のこれ以後の 3 つのセクションは，その準備作業である。これらのセクションとは，D8 の〈幸福あるいは貧困の物的源泉の所得の大変化と小変化の結果の相異〉，D9 の〈非物的源泉の享受の仕方の相違で結果される幸福と貧困〉，D10 の〈貧困の最悪の事例：「労働者階級の将来」という論文の事例〉である。

### D8：幸福あるいは貧困の物的源泉の所得の大変化と小変化の結果の相異

さて，次に生産効率必需品の健全な享受が，どのようにして，人々の活動を高級化して，より幸福にしていくかを検討しよう。つまり，人々の「生活水準」がどのようにして改善されるのかということである。われわれは，以下の引用文を，健全な普通の人々の「生活水準」の向上の事例と解釈し検討するが，マーシャルは次のようにいう。「人間の所得への

少額の追加は彼の購買をあらゆる分野で少しだけ増加させるのが普通である。しかし，この高額な追加は彼の生活習慣を変更させて，彼の自尊心を強化して一部のものへの関心を全面的に停止させるであろう。ある流行が上層な社会階層から下層な階層へ普及したとすれば，この流行は上層な階層の流行ではなくなる。また，貧困者へのわれわれの世話をする熱心さが増強されれば，慈善活動はより惜しみなく行われるか，あるいはある形態の慈善活動が全面的に不用となるであろう」（*Principles*, 772）。

上の引用文の内容をわれわれは，日々の生活には困窮しているという意味で貧困ではないが比較的小さい所得をもち精神的にも肉体的にも慎ましく健全な生活をしている労働者と彼の家族が所得の増加にどのように行動するかという事例として理解してみよう。この事例は，マーシャルが例示する事例において普通な人々であるが，相対的に収入の少ない人々と想定されているケースと見なせる。（たとえば，この事例は，本稿の A5 でマーシャルが指摘していた，所得金額では年所得150ポンドの人々である。これに対して富裕階層は1,000ポンドあるいは5,000ポンドの年所得とされていた。）まず，少額の増加がもし「安楽水準」の改善に支出されたとすれば，上で指摘したように「安楽水準」のみの改善の弊害から膨張した欲求の種類の財に支出が偏る傾向を持つであろう。それは，子どもの教育のための支出を削減することに繋がるかもしれない。他方，少額の所得増加が「生活水準」の向上に支出されると，彼の生産効率を維持したり家族の健全な生活に必要なものに適切な配慮でもって支出される結果，上の引用文にあるように，彼がこれまでに支出していた用途すべてについて購買を増加させることになるであろう。そして，これで購買された財が彼の「生活水準」を向上される仕方で消費されるとすれば，彼の性格の 3 側面である知性，活力，そして自尊心は少なくとも現状の状態に維持されて悪化することはない。このことは，彼と彼の家族の健全な生活が持続することを予測させるであろう。

次に，所得の高額の増加の場合にそれが「生活水準」の改善に支出されれば，上の引用では，自尊心が強化されるとあるが，もちろん，「生活水準」の定義からすれば，知性や活力も高級化されるのである。これは，彼と彼の家族の活動能力，そしてその性格の高級化を導く。この高級化は，まず彼の生産効率の上昇を導き，彼の賃金が増加させる結果をもたらすであろう。増加した所得は彼の活力や知性を高級化するだけでなく，無駄な欲望満足を避け浪費を省くために自制する道徳的性格である自尊心の高級化によって，増加した所得は家族のレクレーション機会の増加や子どもの教育の充実等に支出されるであろう。したがって，彼の活動能力，そしてその性格を顕著に高級化するほどに大きい所得増加は，それゆえに，彼の所得をより大きくするだけでなく，より高度な判断を必要とする

社会的活動を家族共に健全な状態で実施することができるようする。つまり，彼と彼の家族は幸福に向かい始めることができるのである。したがって，次のような行為に関する「関心を全面的に停止させるであろう」。この停止の対象は，高額な増加が「安楽水準」の改善を発生させるような支出である。たとえば，それまで欲しいと思って夢見るほどであった高価な宝石の購入や無謀な飲酒などに浪費することである。このような浪費は「注意力と判断力の強化を」導かないし，「体力を強くすることのない欲望しか満足させない飲食を」回避させないし，肉体的にも道徳的にも不健全な生活様式を回避させない」のである（*Principles,* 689）。もちろん，彼の家族もこれらの項目で同様となるであろう。

このようにして，彼と彼の家族は「生活水準」を向上させることができるならば，物的富である所得を大きくするだけでなく，健康な肉体とその活力ある活動を伴いながら道徳的性格である自尊心を強化することによって，幸福な状態をより高度な段階にむかって進むことができよう。そして，彼と彼の家族が中産階層にまで向上したとしよう。そして，このような家族が経済全体に広がれば，上の引用の第2番目に記されている事態が発生するであろう。上のマーシャルからの引用で，高級な社会階層とは，物的富である所得において豊かであるだけでなく，強い自尊心を持っている高級な道徳的性格を持つ人々でもある。このような階層が慣れ親しんだ流行がより下層の階層に普及することが，より下層階級の「生活水準」の向上を導くことにつながれば，次のような流行の普及の例が考えられよう。所得が大きくなって生活に余裕が持てるようになると共に自尊心において強化されたような人々は，余暇時間を有効に活用できるようにもなるであろう（*Principles,* 89, 136）。そこで，たとえば，スポーツやチェスゲーム，あるいは登山やピクニックの流行のより下層階級への普及である。他方，余暇時間が「安楽水準」のために使われるとすれば，その結末は暗いことは自明であろう。

かくて，彼は，幸運にも肉体的にも精神的にも健全な生活を過ごすことができ続けられれば，彼は彼の家族やすぐ身近な隣人だけでなく，もっと広く社会に関心を持ち，より複雑で困難な判断を必要とする社会的活動を行うことができるであろう。この活動の事例は，上の引用では，かれは貧困者に対する慈善活動をより惜しみなく行うようになることであろう。上の引用で「ある形態の慈善活動が全面的に不用となるであろう」というマーシャルの言葉に最も符合する事例は，本稿の B3 で言及したが，1834年の救貧法改正の前後の救貧行政であるが，この事例での悪弊をもたらす慈善活動こそは全面的に不用となるのである。かくて，マーシャルにおいては，人間の道徳的性格である自尊心が人間進歩の主要な源泉なのである。進歩の源泉としてはこの性格は下層階層の人々においてはより低

いであろうが潜在的な活動能力としては所持しているはずである。この階層の人々がこの活動能力を使って社会的活動をする喜びを感じながらもこの能力を高級化させるような機会を広範な教育によって増加させるように経済制度も変更する必要がある（*Principles*, 248）。こうして，人間の進歩と経済社会の進歩が進行しうるであろう。このようにマーシャルでは，自尊心という人間の道徳的性格の概念は，自尊心なしでは人間の本当の幸福（true happiness）がありえないし，人間に経済進歩を促進するように生きる努力をさせる要素こそが健全な自尊心（self-respect）を人間が持つことを内容とする。自尊心のこの重要性には本稿の D2 でも触れたが，ここに，幸福の物的源泉よりもその非物的源泉のほうがより重要であるとマーシャルが強調していることをわれわれは再び見いだす。もちろん，貧困に関しても同様に非物的源泉がより重要であることは当然である。このことはマーシャルが『原理』の冒頭で人間の研究の方がより重要であると指摘した精神の表れであろう。

**D9：非物的源泉の享受の仕方の相違で結果される幸福と貧困**

もちろん，幸福という概念は本来，人間が望ましい状態になるとか現にそうであるという状態を示している。現に幸福な状態にある人々はより高級な幸福になっていくこともあろう。やがて，最高級の幸福の状態に到達するであろう。この状態に至るために人間は，富という物的源泉だけでなく，今までわれわれが強調しているように，宗教心や家族愛，隣人との相互信頼などという非物的源泉を使って活動することを求められる。この活動はあるときには経済活動であり，ある時には宗教活動等の社会的活動である。ただ，本稿の A5 で指摘したように，われわれは，マーシャルが幸福あるいは貧困の非物的源泉として人間の宗教活動能力を考慮していたことを知っているが，本稿では宗教活動能力を非物的源泉から除外した[19]。このような活動から形成されるであろう幸福の意味内容でもっとも重要なこととマーシャルが考えたことは，人間がこれらの活動能力をそれ自体で使用すること，さらに，活動すること自体で喜びを感じるということである，と思われる。しかも，かれは，人間がこの喜びを動機づけにして，その活動能力を人間にとって望ましく使用することによって，その活動能力を高級化させることができる（*Prinicples*, 247），と見なしていた。

そして，その使用の仕方が望ましくない場合にはこの活動能力は退歩し，やがて貧困につながる。この活動能力はその使用の仕方を含めて変数なのである。人々が貧困に向かうプロセスを，つまり非物的源泉の利用の仕方がどのようにして貧困を導くかを，もう少し

追跡しよう。人々は一般的には貧困になっていると自覚できたとき，それを防ごうとするはずである。しかし，非物的源泉の一つである人間の道徳的性格は，変数であった。本稿の 0-2 でわれわれが述べたことからみると，貧困に向かうときには，人間の性格は低級化しているのである。活動の低級化は人々に悲しみやねたみなど悲観的感情をもたらす。しかも，この低級化はそのまま放置すると，さらにより低級化する可能性をもっている。なぜなら，人間の活動能力は「習うより慣れろ」の章句が意味するように，いろいろな環境の変化への適応の結果を学習して累積して変化するからである。この結果，人間の道徳的性格も望ましくない方向に成長するのである。この成長は，やがて，この活動能力の行使を停止させる。なぜなら，この成長の過程で，人間は人間として恥ずべき行為を実行する，たとえば，犯罪を犯すことになろう。このような行為は社会的に抑止されるであろう。これは，人間の活動能力の行使の停止であり，「習うより慣れろ」からの類推からすれば，この停止が続けば，人間は何もしないことに慣れてしまうであろう。このような事態こそは，マーシャルが貧困が人間にきわめて有害どころが致命的な悪弊，とみなしたものである。（このことには本稿の次の D10 で触れる。）このようにマーシャルは幸福あるいは貧困が，単に量的な大きさではなく，質においても慎重に検討すべきと考えた。この観点に立ってマーシャルは，リカードが人間を固定量と見ていると批判したとき（*Principles*, 762），人間が変数であると主張した中核は，人間の性格が変数であり，それゆえに，人間の活動も量だけでなく質においても当然に変数なのである。このことこそは，本稿の A1 のパラグラフで，マーシャルが人間の性格が所得の大きさだけでなく，所得を稼得する活動の仕方にも依存すると強調した理由である。われわれの言い方では，生産効率必需品が，その量だけでなく，3段階の用途のどの用途で享受されるかにも依存するのである。

**D10：貧困の最悪の事例：「労働者階級の将来」という論文の事例**

他方，マーシャルは1870年代の初めに本格的に経済研究に着手した[20]。そして，かれは早くも1873年に公刊した「労働者階級の将来」という論文で，かれの経済研究の課題を労働者階級の貧困絶滅のためにはこの階級を「紳士淑女」にすることである，と説いた（*Memorials*, 111，115，116）。その中でかれは，この階級が貧困から脱出する途を，人々の貧困状態をその幸福状態と対置しながら，次のように論じている。社会の暗い側面に目を向けると，たくさんの未熟練労働者が存在する（*Memorials*, 105）。この階層の労働者のほとんどは，日々の労働で肉体的にも精神的にも疲れ切っている。そこで，マーシャルは，自分の実行できる能力で自分自身を改善し幸福に向かう努力の大切さを踏まえて，このよう

な労働者の貧困をそれと反対の状態なら幸福であろうということを問いかけながら，次のように述べる。それでもこのように疲れ切った労働者がその余暇時間をいつも自己改善に熱心に使わないことは，驚くべき悲しみではないだろうか？　読書することは，この労働者には苦痛である。疲れた肉体を引きずって勉強をすることで，この労働者はどれくらいの喜びを感じることができるであろうか？　だが，耳の不自由な人びとは普通な平均的生活の状態であれば，音楽を直接に聞くという楽しみをほとんど知らないとはいえ，音楽の楽しみを知っている人びとと一緒に暮らすことで音楽の楽しみを感じることができるはずである。それに引き替え，貧困な労働者階級の現状は，音楽の楽しみがないどころか，学問などの知識を獲得することの喜びも芸術に接する喜びも実感することなく，人生を終わっている。ましてや，世の中に是認されて注目される栄光に包まれた出来事を経験することもないであろう。それでもなお，彼らは全面的に救いがないわけではない。なぜなら，この階級でも幸福な状態に移行できるのだと，マーシャルは反問的に強調する。すなわち，彼らは，静穏で安らぎにあふれた夕べを健全で幸福な家庭で過ごすことに，それゆえ人間にとって当然に望ましい最良の幸福を勝ち取る状態に移行できるのである。しかし，彼らは，悲しいかな，現在では，知識や芸術などで未教育なので，肉体的にも精神的にも高度に健全な家庭を今は持っていないのである（*Memorilas*, 106）。このように，マーシャルは，貧困な状態から最良の幸福の状態へ貧困な人びとが移行できること，および，貧困が人間にとって望ましくない状態であり幸福が望ましいことであるという対置的関係を強調している。いずれにしても，マーシャルは，たとえひどい貧困者であっても，学問などの知識や音楽などの芸術に関する人間の活動能力は，潜在的には内在しており，健全で充実した教育によって顕在化するように変化して高級化する，とはっきり主張しているのである。以上のように，これらの活動能力が人間の性格の重要な構成要素なのであり，この性格が幸福のあるいは貧困の非物的源泉なのである。

### 3-3　経済進歩の抱える困難：道徳的性格と芸術的性格の統合化

#### D11：人間の活動能力の新しい3段階：芸術的性格の新しい分化

われわれは本稿の D2 から D10 まで，人間の性格の高級化，それゆえ，それがもたらすであろう人間活動の最高級化を検討してきた。また，D6 の〈名も知れぬ漁師の事例〉は，人間活動の最高級化のわれわれの理解を示すものであった。そして，本稿の A5，B4，D2 でわれわれが予告した問題の検討に入ろう。この検討は，人間性格の全体がその段階的変化において高級化を一段階上へ引き上げることであり，この変化が芸術的性格の分化をも

たらすことである。この高級化こそは，マーシャルが人間活動の高級化，そしてその持続が経済的制度と人間の進歩，つまり経済進歩をもたらすことにとってもっとも重要だと見なしたと，われわれは理解する。本稿の D10 の最後で触れた，最悪の貧困の事例では，貧困者は芸術に生涯にわたって触れることさえできないことが示されている。逆に言えば，芸術的性格を高級化することは，経済進歩にとってもっとも重要であることが示唆されるであろう。そうだから，われわれは，この分化によって人間の性格の段階を新しくする必要がある。なぜなら，人間の活動能力の段階的変化の論理から見れば，この分化は，活動能力を最高級化する段階へ向かう段階の高級化に伴う新しい機能の分化なのである。この分化は，古い3つの活動能力の新しい統合化をもたらさざるをえない。われわれが本稿の Z2 で示したように人間の活動能力とその性格との密接不可分な関係を考慮すると，この新しい分化と統合によって形成されるであろう人間の性格は，芸術的活動能力，そしてその性格を人間にとって望ましい形態で行使する仕方で行使するとき高級化する。しかし，芸術的活動能力，そしてその性格の特徴は，既存の慣習などにとらわれず，独創的考えを実行することであるから，その影響や結果が人間にとって望ましいかどうかは疑問である。このために，マーシャルは，この活動の結果を人間にとって望ましい形態に導く傾向をもたせるために，芸術的性格の分化は高級な道徳的性格を前提とすると見なしている。かれはこの前提に立って，芸術的活動能力，そしてその性格が人間の活動を高級化し，そして最高級な段階に導くと考えたのである。われわれはまず，芸術的性格を『原理』の議論でマーシャルが追加したことを示すと共に，その後で人間の活動を最高級化する，新しい3段階の分類を整理しておこう。

本稿の A5 で示したように，われわれは今まで，人間の性格の高級化の3段階を，第1段階：肉体的性格，第2段階：精神的知的性格，第3段階：道徳的性格，と見なしてきた。道徳的性格が第3の最高級の段階であった。そしてわれわれは，この3段階を「生活水準」に影響される，活力，知性，そして自尊心という3段階の性格に対応させた。ここまでのことを本稿の A5 で示した。われわれは次の二つのことを考慮すると，マーシャルが芸術的性格の高級化の議論を『原理』で追加した，と解釈できる。もちろんわれわれは，人間性格の段階的変化の観点に立っているから，この追加は新しい性格の分化である。われわれが考慮すべき第1のことは，『産業経済学』における生産効率の支配条件である。つまり，本稿の C6，C7，C8 で検討した，生産効率の支配条件は，肉体的活力，知識と精神活動能力，そして道徳的性格であった。しかも，「快適水準」の概念でも道徳的性格が強調されていた。『産業経済学』での議論が人間の性格の段階的変化としてとらえる視点が非常

に弱いことを考えても，この3条件は人間の性格の上の3段階のプロトタイプと見なせるであろう。われわれが考慮すべき第2のことは，マーシャルが本稿のA5で指摘した，宗教的活動能力と肉体的性格，道徳的性格に加えて，『原理』の第4編第8章で精神的知的性格と芸術的性格を指摘している（*Principles*, IV. VIII. 5., p. 247）ことである。本稿のA5で述べたように，宗教的活動能力をわれわれの考察から再び除外する[21]。これらのことを考慮すると，われわれは4つの活動能力，そして性格を持つことになる。つまり，われわれは，芸術的性格とその高級化に必要な芸術教育は『原理』の議論で追加された（*Principles*, 213）と解釈できるのである。

そこで，われわれは，人間の性格の段階的変化の観点と，われわれ独自の解釈で『原理』での議論では，人間の活動能力，そしてその性格を以下のように，より低級で古い段階からより高級で新しい段階に変化した，と見なすことにする。より古い3段階では人間の性格は，肉体的性格，精神的知的性格，そして，道徳的性格の3段階であった。しかし，われわれは，今では芸術的性格を追加しなければならない。この追加の理由は，卓越を求める欲望を動機とする活動が高級化して人間の活動が最高級になるには，マーシャルが芸術的性格が不可欠であると述べていることである。（このことは，本稿の3-3ですぐに明らかにする中心的論題である。）そこで，われわれは人間の活動能力，そしてその性格を，新しい3段階に分類する。第1段階は知性と活力をあわせて人間の肉体的精神的性格，第2段階は道徳的性格，第3段階は芸術的性格である。つまり，形態的には，古い3段階の第1と第2の段階を一つに統合したのである。もちろんこの変化に対応して，古い第3段階である道徳的性格もそれに対応して新しい第2段階に変化することは，当然であろう。われわれはここにも，経済変化の分化と統合の段階的変化の論理を適用したのである。そこで，われわれは，この芸術的性格の新しい分化が何を意味するかの議論を人間の性格，つまり幸福あるいは貧困の源泉，の高級化に焦点をあてつつ展開してみよう。

まず，芸術的性格の分化の意味することを，具体的事例で少しだけ説明しておこう。上のパラグラフでわれわれは，マーシャルが物的富を生産する経済・産業進歩が宗教的活動能力[22]，道徳的性格だけでなく，精神的知的性格，そして芸術的性格に依存すると述べていることを指摘した。知性と芸術という活動能力の二つの健全な行使こそは，もちろん肉体的精神的性格がすでにかなり健全で高級であることを前提とするであろう。この前提と共に現在のわれわれの常識から判断しても，知性と芸術という活動能力は，物的富を生産する工夫を生み出す発明の源泉であり，富を使用する実際的工夫の源泉である。たとえば，自分の利益の追求のために費用や収入を正確にすばやく計算したり予想する活動能力は，

人間の基本的な理性的活動能力であり，非物的形態の活動能力である。また，絵画の芸術性を正しく評価できる活動能力は，芸術作品を創造する活動能力と同様に人間生活を幸福にする程度が非常に高いと見なされよう。このことに関しては，本稿の D2，D3，D4，D6 でいささか長く議論した，自己顕示欲と卓越を求める欲望の対比と名も知れぬ漁師に関する議論が思い出される。そこではわれわれは，卓越を求める欲望を動機とする活動によって名も知れぬ漁師の熟練が最高級になることを指摘した。その上，この動機は，利己心，利他心という動機に加えて，人間の第3の動機になることも指摘した。この動機による活動を支える非物的生産効率必需品が自由，変化，希望という人間の活動能力であることは，本稿の D12 で明らかにする。したがって，人々が生産効率必需品の中で第3段階の用途として享受する割合が多くなるにつれて，「生活水準」がもちろん向上し，やがては卓越を動機とする活動が人々の活動能力を最高級にするであろう。マーシャルは，人間の活動のなかで芸術活動を自分の利益のためにというよりも，より完成されたものを，しかも他の誰もがその完成度には達しえないほどの創造性を持った産物を生み出すという目的で行われるので，社会的に傑出した優秀な活動，として高く評価した。たとえば，本稿の D4 で取り上げたストラディバリウスや名も知れぬ漁師の卓越を動機とする事例からわかるように，マーシャルは，ストラディバリウスのバイオリンや漁船を巧みに操船する漁師の技能に芸術的優秀さを見出している。この事例が象徴している芸術的優秀さは，長い人類の歴史的経験の累積を反映している。

しかし，本稿の 0-2 で指摘した論理で，人間の活動能力を最高級な段階に向かわせる段階的変化の更新から見れば，芸術的性格の分化は，われわれが3段階に分類している活動能力の相互関係の新しい統合化をもたらすはずである。つまり，芸術的性格の分化と共に始まる高級化は，上の段落で指摘した，新しい3段階の分類の中で，第1段階と第2段階の活動能力の高級化に大きく依存しているのである。第1段階である，肉体的精神的活動能力，そしてその性格に関して，まず述べよう。上の段落で，人類の長い歴史的経験が累積されると指摘したが，この経験の集大成の大きな部分はわれわれの知識や知性を形成しており，理性的な判断や行動を可能にするものである。この意味では，人間の叡智の結晶である科学の発展，それにもとづく画期的な発明の登場は，われわれの取り上げたニュートンの事例が示すごとくに，人間の精神的知的活動の目覚ましい高級化を示す証左であろう。この結果，人間は，肉体的活動能力でも，飛躍的に高級化している。たとえば，人間が自分の2本の足だけで移動する速度とその移動距離はそんなに大きくない。しかし，自動車や電車，飛行機などの移動手段は，時速300キロ，あるいは1,000キロでの移動と，数

千キロの移動距離を実現している。と同時に，人間は，移動に当たっては自分の 2 本足で移動するときにくらべて安全に配慮することをはるかに強く求められる。移動という活動能力は，このような配慮をして行使されるという性格を具体的に形成しているのである。第 2 段階としての道徳的性格は，人間が人間として誇りとすべき望ましい姿，あるいは恥として望ましくない姿を規定する性質を持ち，望ましい姿において人間はこの世に存続することを自覚させる活動能力である。人間はひとりでは存続できない社会的動物であるとすれば，この活動能力は，人間同士がたがいに調和的に共存することを意味する。個人を中心に考えれば，自分以外の他人や生き物との平和的共存が可能であるとき，個人は独立し自立した存在になるはずである。このような二つの段階に到達できたとすれば，人間は活力ある肉体と精神を持っており，高級な自尊心を持つことで道徳的性格においても高級化できているはずである。このとき，人間が未だ未知な困難に挑戦すれば，今までのことに囚われない考えで活動をすることが必要なのである。この活動を可能にする能力こそは，芸術的性格である。特に，道徳的に独立した存在になっている人間は，物的源泉の不足がなければ，誰も考えたことのないことを「創造して」実際に行動してみようとする。この活動が，絵画や音楽などでまったく独自で独創的な成果をもたらす芸術家の活動なのである。しかし，芸術的才能で独創的発明をしても，高級な道徳的性格による活動がなければ，この発明の利用は人類に害悪をもたらすかもしれない。この事例は現在では原子力の爆弾としての利用であろう。他方で発電所としての利用はわれわれに計り知れない恩恵を与えている。

### D12：芸術的性格と卓越それ自体を求める欲望との関係

われわれは，卓越それ自体を求める欲望を動機とする活動と芸術的能力との関係の検討に移ろう。実は，以前に本稿の D6 でかなり長く検討した名も知れぬ漁師の事例は，この検討の準備作業であった。われわれは名も知れぬ漁師の活動に関して，もう一点だけ論ずることがある。それは，上の段落の原子力の発明に関連させていえば，高級な芸術的性格の形成は，高級な精神的知的性格と高級な道徳的性格の統合の上で可能なことである。ここでも，われわれは人間の活動能力の段階的高級化の論理を適用するのである。この論理を名も知れぬ漁師の操船熟練の高級化に適用することは，この漁師の転機となった，未知への試行錯誤的挑戦の意味を検討することである。残している論点とは，本稿の C10, C11 で示唆したように，生産効率必需品の中身に関することである。われわれは，この必需品の中身について，社会の最低階層の事例と住居の事例しか触れてはいない。しかし，

漁師のこの転機に関して，つまり，彼の活動の動機を卓越を求める欲望に変更させたことに関して，もっとも重要な関係を持つ，非物的生産効率必需品が存している。それは希望（hope），自由（freedom），変化（change）（*Principles*, 197，691）という人間の活動能力である[23]。これらこそは，幸福ないし貧困のもっとも重要な非物的源泉を構成するものなのである。言い換えると，これら3つの非物的生産効率必需品とは，芸術的性格が分化する段階にまで高級化した人間の肉体的精神的性格と道徳的性格を芸術的性格の高級化の形成に焦点をあてて，マーシャルが人間の性格を新しい統合の形態として表現し直したものでしかない。それゆえ，われわれは，これら3つの非物的生産効率必需品がその第3段階の用途としておもに享受されると解釈することができると思うのである。これら3つの必需品が幸福あるいは貧困の源泉としてどのような関係にあるかを，われわれは次のように理解する。上でも述べたが，人間は活動環境の変化に適応する。この環境変化には未知な部分が存する。適応に成功するには，未知な部分がもたらす困難を克服しなければならない。しかし，適応の努力は，未知なことへの挑戦であるから，試行錯誤的にしか行えない。そして，人間は必ず成功するという明るい希望をもたねばならない。マーシャルはこのように考えた。マーシャルがこれら3つの中でもっとも重要な非物的生産効率必需品とみなしたものこそ，人間の自由である。人間は，保守的で慣習に捕らわれやすい傾向を持つ。しかし，未知への挑戦は，慣習を打破して今までやったことのないことをすることでしかない。人間は，無謀といわれようとあきれたことをすると非難されようと，成功するという希望を持って果敢に挑戦することが必要なのである。しかし，未知への挑戦は人間にとって最大の困難であり，それゆえ，最高級な活動を要請するものなのである。この挑戦は，卓越それ自体を求める欲望を動機とする活動によって実現可能な活動なのである。人間にとって未知な困難の解決は，人類にとって大きな貢献をするであろう。それは，真の意味で経済進歩をリードするであろう。マーシャルはこのように考えたと推測される。これがマーシャルが個人の自由をひじょうに大切にした精神である（*礒川-1989,*　136-43, *礒川-1993,*　97-115）。この精神を具体化したものこそは，生産効率必需品の最高級の段階の用途に相当する，上の3つの要素，希望，自由，そして変化である。これらを同時に人間が持つことを人間の活動能力，そしてその性格，の最高級化のために不可欠と，マーシャルは考えたのである。この考えこそが生産効率必需品の概念の創造につながったのである。そして，この活動能力，そしてその性格は，道徳的性格において特に将来を的確に判断できる自制心がより高級である人間ほどより，高級化するように形成されるであろう。以前に奴隷の事例にわれわれは本稿の1-2で触れたが，普通の人間と奴隷の決定的相

異として，マーシャルは奴隷にはこれら3つの要素をもつことができない状態であることを指摘している（*Principles*, 691）。

名も知れぬ漁師の空想的事例からもわかるように，未知への挑戦は高度な自制心を持って苦難に耐えなければならない。耐えるだけの堅固な意志を，人間は持つ必要がある。しかし，奴隷のように社会的地位の変更もその維持の自由もなければ，必ず成功するという明るい希望があっても，新しい困難を解決するに必要な新しい活動能力への高級化はありえないであろう。この点に関して，上のD11で指摘したことを踏まえて，マーシャルは『原理』で芸術的能力の重要性を指摘し，芸術教育（Education in art）の推進を説いた（*Principles*, 213）。この指摘は，『産業経済学』の段階ではないから，生産効率を支配する新しい要素の強調，つまり，追加であった。画期的な発明・発見が，従来の規範にとらわれない思想の契機で芸術的才能の発現を成功させることによってなされて，生産効率が非常に大きく向上したとしよう。この結果，人々の労働条件や生活様式もかなり短期間に大きく変容するであろう。これは人間の性格に少なからず影響を与えるはずである。たとえば，上で触れた原子力の発明であれば，人間の性格の中でもその道徳的性格が大幅に高級化される必要が生じる。原子力の誤用は人類を滅亡させかねないことからわかるように，人類の将来を見通した強力な自制心を持って人々のすべてが活動することが求められる。これこそ，マーシャルが自尊心という道徳的性格で自分自身の欲求を自制するだけではなく，他人との協調をも意味させたことであると思われる。この意味で，人々の活動能力，そしてその性格が最高級な段階に達するとすれば，それまでに人類が経験したことのないほどの高さで，人々は自尊心の高級化をもとめられるであろう。他方で，芸術とは，従来の規範や慣習にとらわれずに新しいものを創造しようとする活動である。それゆえ，この活動が未知なことに挑戦するがゆえに発明に結びついて人々の幸福に貢献して成功することは少ないし，高い名声を獲得する芸術家は少ない。つまり，マーシャルによれば，人間の芸術性格を高級化するための教育は，困難な問題を解決する活動能力の高級化にはよく失敗し，その高級化には結びつかないのである。しかしそれでも，芸術活動は規範や慣習にとらわれないからこそ，自由に自分の意志で試行錯誤的に失敗を恐れず成功に希望を持って挑戦することでしかない。この活動は，成功した場合と失敗した場合の両面において高級な道徳的性格を持った人間が卓越それ自体を求める動機で活動することに非常によく似ている。なぜなら，この活動は，失敗を恐れないという高級な自尊心を持って自己の全活動能力を望ましい形態で発揮するプライドに支えられるからである。このような活動は人間の活動能力，そしてその性格を最高級な段階にまで導くであろう。このように，

マーシャルは考えたのである。だから，マーシャルは，「人間の芸術的能力の発展はそれだけでまさに最高級の重要性をもつ社会目的であって，それだから産業効率の主要な要因となっていくものである」（*Principles*, 213）と見なした。

### D13：芸術的性格の段階的高級化の議論の要約

要約しよう。芸術的性格の高級化は，名も知れぬ漁師の活動を卓越それ自体を求める欲望を動機とさせ，彼の操船熟練を最高級化する。この動機の形成プロセスは，本稿の 0-2 で示したように，分化と統合の段階的変化のプロセスであった。未知な難問の解決にはよく失敗するからこそ，この失敗を反省して成功に導くには，まず，芸術的性格の高級化の第 1 のステップは，あらゆることに高級で広範な知識がそれを健全に利用する高級な肉体的精神的性格と結合して行使されることを必要とする。この意味でマーシャルは肉体的精神的性格と芸術的性格が一つに統合化されることが望ましいと考えたのである。肉体的精神的性格は，本稿の D11 で指摘した，人間の活動能力，そしてその性格，の第 1 段階である。続いて，芸術的性格の高級化の第 2 ステップは，この統合化の第 2 段階，それゆえ中間段階，の道徳的性格である自尊心と統合化される必要がある。名も知れぬ漁師の操船熟練は，指導者たる水準にまで最高級になるまでには，このように中間の段階の自尊心が高級化する必要がある。未知な困難に挑戦し失敗を反省するためには，彼は現在ではなく明日を考慮して最高に自制をすることが必要なのである。しかも，自尊心が強化されても他人との協調心，他人への尊重心においても高級化しなければならない。彼は，他人との強い相互信頼の関係を形成しなければならない。このように，彼が道徳的にも最高級になったとき，彼は，最高級の熟練を人々の最高級の幸福に貢献するように使用することができるのである。最高級の芸術活動は，最高級な道徳的活動を大前提で形成されることを必要とする意味で，最後で第 3 の段階の活動である。かくて，上で新しく定義したわれわれの人間の活動能力の 3 段階は，芸術的性格を最高級な段階とする人間の活動能力の高級化に関する 3 段階と見なすことができる。しかし，この 3 段階の高級化への変化速度の遅さは，上の段落で触れた，原子力の平和利用と軍事利用の例，本稿の 1-2 で述べた奴隷の「安楽水準」の改善の事例，本稿の D10 の最後で触れた「労働者階級の将来」の事例における音楽鑑賞など生涯にわたって経験しない最悪の貧困から暗示されていると，われわれは思うのである。他方で，マーシャルはこの高級化の可能性に期待したのである。「労働者階級の将来」という1873年の論文でマーシャルは，労働者階級が順次ゆっくりと紳士階級に変化することを希望した（*Memorials*, 111-7）。その中で彼は道徳的性格に関して，この性

格が教育によって向上，高級化されることも，次のように述べて期待している。かれが分析した時代の人々に関して，これらの人々の道徳的能力を支える重要な活動部分は現状の問題に対処するのになんら不足してはいないが，人々が教育によって道徳的性格を高級化すると，新しい生活をすることができるようになると（*Memorials*, 115）。この新生活こそは，ここでの文脈でいえば，最高級になった芸術的性格が善用されて，人々の幸福を高級化して，最高級に導く条件に導かれて到達できるであろう。

言い換えれば，マーシャルは，誰でもが「紳士・淑女」のような最高級な性格の段階までその性格を高級化できる，と見なしたのである。本稿の Z1，D8，D10 で触れたように，人々は，このような性格の形成のための活動能力を潜在的には持っているのである。人々は，個人としては他人とは違う具体的な活動能力，そしてそれに対応する具体的性格を潜在的には持っている。その中から人々は，一人一人が自分が最も優れている活動能力を人間にとって望ましい形態で顕在化することによって，この活動能力とそれに対応して形成される性格を高級化できる，社会的存在なのである。もし，人々が一人一人として自分の活動能力とその性格が高級化の完了形態に到達したとすれば，その活動は卓越自体を求める欲望を動機としており，同時にその芸術的性格が最高級化されているであろう。このとき，本稿の D6 の事例が暗示するように，人々は誰でも，自分が最高級化した活動能力では他のすべての人が模範とすべき指導者的役割を果たすことができよう。

### D14：生物進化の新見解と幸福と貧困の対置的性質の関係

われわれは，本稿の議論を集結する段階にやっと到達した。集結で議論する対象は，本稿の議論の中心テーマであり，すぐ上の段落で明らかにしたことで表現すれば，道徳的性格である自尊心の高級化に関することである。この高級化は経済制度の変化よりもはるかに遅いのである。たとえば，「安楽水準」の改善は，人間の活動する意欲を失わせ，自分では活動しないという利己的活動で道徳的性格を悪化させ，貧困を導きうる。あるいは，需給均衡分析では，一時と短期の均衡では人間の性格は変化しないが，長期では変化すると想定されていることでも，この高級化は遅いことが例証されている。生物の進化は環境の変化に適応することであるが，一足跳びの変化はないのである。したがって，進化，つまり，段階的変化の中間形態が，時と場所に応じて意味をもつのである。人間の活動能力に関するわれわれの新しい 3 段階で，人間の道徳的性格は第 2 段階にあったことからわかるように，まさに中間の変化段階なのである。そこで本稿を終結するに当たって，われわれが道徳的性格を新しい中間段階に変更したことの意義を，生物進化に関してその段階的

変化の新しい見解を借りて説明することは，大きな意味をもつと考えられる。なぜなら，われわれは，この見解をヒントにして，道徳的性格を中間段階に位置づけることができたからである。われわれは，この見解として，生物学者のS・J・グールドの見解を選択する。（なお，われわれがグールドを選択した理由は，注㉔でごく簡単に示したので，参照されたい。）この説明は本稿のD15とD16で展開される。しかし，その前に，このヒントによって示唆された説明でわれわれが手に入れることのできることを，先に述べておこう。それは，われわれが本稿で一貫して取り扱ってきたことであるが，マーシャルが次のように考えていたことを示すことである。つまり，彼が生きた時代ではいかに多くの労働者が貧困状態にあり，その根絶方法を考えるとき道徳的性格の高級化という難題があり，この高級化の遅さのために最高級の幸福への途にはもっと大きな困難があることを理解していたことである。マーシャルは，このように幸福と貧困をめぐる複雑な関係を認識していたのである。われわれは，このような複雑な関係を，これらの概念の関係における対置的性質と呼んできたのである。

さらに，この説明を踏まえると，幸福と貧困の対置的性質とわれわれが呼んできたものをはっきりと示すことができる。本稿のD11で示したように，人間の活動能力のわれわれの古い3段階は，知性，活力，そして自尊心であった。つまり，肉体的性格，精神的知的性格，そして道徳的性格であった。われわれの新しい3段階は，知性と活力を統合した肉体的精神的性格，道徳的性格，そして芸術的性格であった。人間の活動が最高級になるように高級化する段階的変化のために，古い段階では第3段階であった道徳的性格は，新しい段階では第2の，中間段階に低級化したのである。しかしそれはそう見えるだけである。芸術的性格の分化という新しい変化は，人間の活動能力の新しい統合化をもたらす。したがって，本稿のD13で指摘したように，新しい段階での道徳的性格の高級化の程度は，人間の活動が最高級な段階に到達するとすれば，古い段階のそれよりも非常に大きくならなければならないはずである。かくて，道徳的性格の高級化は，高級化すべき程度が大きいがゆえに実現が難しい。これに対して，この性格の低級化は，相対的には容易である。たとえ，人間が一旦貧困から少しでも抜け出したとしても，もしこの性格を低級化すると，人間は安易な途を選んで，元の状態に，つまり，貧困状態に戻ってしまうであろう。なぜなら，人間の性格の低級化とは，その自制心を弱めることであり，人間に未知なことへの挑戦という困難を解決する活動よりも，既知であり慣れ親しんだ活動を安易な判断で行わせることでしかないからである。しかも，すでに慣れ親しんでいる活動は，この活動の学習を累積的に持続した帰結でしかない。このような累積的経験のために，人間は一度

貧困状態に陥ったらそこから抜け出すのが困難である。新しい3段階の基準から見れば，中間の段階を境にして，この段階以上に到達すれば人間は幸福の途に導かれやすいのに対して，この段階以下に留まれば，人間は貧困に導かれやすいのである。われわれはこれを，幸福と貧困の対置的性質と呼んできた。それは，マーシャルの議論では「安楽水準」の改善がもたらす道徳的性格の悪化，低級化の発生しやすさに対して，「生活水準」の向上を導くような道徳的性格の高級化の困難さを意味させようとしたものであった。

### D15：幸福あるいは貧困の源泉の段階的変化と生物のそれとの類似

生物学者の見解を借りてわれわれが明らかにしようとしていることは，われわれがまだ一度も詳しく検討しないで暗示してきただけのことである。幸福あるいは貧困の源泉としての人間の活動能力，そしてその性格がいかにしてその影響を行使するかである。この行使は，もちろん，本稿のC10で検討した，生産効率必需品の3段階の用途の利用段階の変化を通して働くはずである。言い換えれば，より新しい生物学の観点から見れば，生産効率必需品はどのようなプロセスで「生活水準」あるいは「安楽水準」を変化させて幸福あるいは貧困を導くことになるかである。

そこで，われわれが生物の段階的変化で注目するのは，遺伝子の働きである。まず，生物の遺伝子はたくさんの種類が存在して，それを反映して現在でも多数の種の生物が存在している。しかし，たとえば，ゴリラの遺伝子はゴリラを発生させるように，生物の遺伝子は，生物学上の種を決定する。この決定のプロセスで遺伝子は，その中に含むたくさんの遺伝子のどれを生物の発生段階のいつどこで発現させるかを制御する遺伝子によって，生物の種を具体的に決定しているのである。他方，遺伝子と類似の変化をするとわれわれがみなすものは，幸福ないし貧困の源泉としての人間の活動能力，そしてその性格である。しかし，これは源泉であって「生活水準」あるいは「安楽水準」に影響を与えるように顕在化して初めて意味をもつ。そこで，われわれは，遺伝子の発現を制御する遺伝子に相当する変化をするものこそを，マーシャルの生産効率必需品とその用途であるとみなすのである。われわれが検討したマーシャルの生産効率必需品は，まさにたくさんの種類が想定できるし，時代や場所でも大きく相異する。われわれがここで特に注目すべきは，近い親戚関係にあると見なされる生物は遺伝子全体ではそんなに大きく相異しないのに，ゴリラの遺伝子はゴリラしか発生させないように，遺伝子はその中のどの特定な遺伝形質の発現を支配する遺伝子によっても実際の遺伝を支配していることである。これと対応して，生物学の遺伝子に相当するものはあくまで幸福あるいは貧困の源泉としての人間の活動能

力，つまりその性格である。が，われわれは生物の遺伝的性質の発現を制御する遺伝子に相当するものを生産効率必需品とその3段階の用途と見なそうとするのは，これによって人間の活動の高級化あるいは低級化が具体的に支配されるからである。しかも，人間活動のこの変化は段階を踏まなければならない。われわれが簡単化にした3段階では，中間の第2段階を通過しなければ最後の第3段階には到達しないのである。これらのことを生物学者の見解を借りて，われわれは確認しておこう。

**D16：遺伝子と遺伝子の発現を制御する遺伝子との2次元的視点**

さて，生物学者の議論を，われわれの論旨に必要な限りで生物の段階的変化に関して，要約しよう。生物の進化のプロセスで，たとえば，生物の器官はその生存環境変化に一足跳びに適応して極度に完成した複雑な形態にならない（*グールド-1995,* 155-6)。生物の器官の変化は，その生存環境へ適応する行動でしかない。しかも，この適応は，試行錯誤的に時間をかけてゆっくりと何回も繰りかえされて，やがて成功することもあれば失敗することもある。いわゆる，自然選択の法則に，この適応は支配されるのである。たとえば，眼が現在の人間の眼のように複雑で完成された形態になるには，光を認識するだけの単純な器官からトンボの目のような複眼といったさまざまな中間段階が存在した。あるいは，植物は光を使って光合成をして栄養を自ら調達できるが，植物は人間の眼のような形態の器官は持っていないのである。これは，光を各生物がどのように利用するかについての遺伝子が相異するためである。この遺伝子の相異は相異するとはいえ，その進化のプロセスではより古い段階の遺伝子の性質を排除して抹消するのではなく，古い遺伝子を累積的に受け継ぎつつ，その一部で新しい環境に適応的に変化させており，この相異は連続的な相異と見なされるのである。たとえば，オランウータンとゴリラと人類の遺伝子は全体としてはそんなに違わない，と推論されている。それなのに，ゴリラの遺伝子はゴリラしか発生させない。つまり，生物の遺伝的性質は，その遺伝子そのものの特徴だけでなく，その遺伝子の発現の仕方を制御する役割を担っている遺伝子によっても支配される，と考えられている（*グールド-1995,* 80)。これによって，大きな類似の中の小さな相異が説明されるのである。たとえば，哺乳類の脳は，発生の初期の母親のお腹の中で哺乳類以外の動物よりもはるかに急速に発達して誕生する。この意味で，この遺伝全体を制御する遺伝子はかなり大きく相異する。しかし，問題の3種の動物では，誕生後にも大きく発達する脳は，人類だけである（*グールド-1995,* 97)。これは，遺伝子の発現を制御する遺伝子の相異であろう。このように，生命の進化のプロセスで生物の器官の遺伝子の特徴は，累積的に連

続的に継承されていく。もちろん，現在でも数百万の単位の数で存続している種のレベルでも同じことは妥当するであろう。いずれにしても，種の変化は生物の進化のプロセスでは種の遺伝子の変化と見なされていると思われる[24]。

そして，われわれは，マーシャルの経済制度と人間の段階的変化では，この遺伝子に相当するものとして人間の活動能力，そしてその性格を，遺伝子を制御する遺伝子を生産効率必需品とその用途として考えることができると思われる。われわれは，このように着眼したことを本稿の D15 で示したのである。そこで，遺伝子とその発現の仕方の相違という 2 元的視点を考えるとしよう。まず，遺伝子に相当する人間の活動能力は，われわれが本稿の D11 で示した段階に従えば，幸福あるいは貧困の源泉である肉体的精神的性格，道徳的性格，芸術的性格の 3 段階であった。段階的変化の考えでは，人間はこれらの活動能力を潜在的には保持しているのであるが，顕在化して実際に人間が高級な活動をすることこそが問題なのである。この顕在化に不可欠な役割を果たすのが，マーシャルでは，生産効率必需品とその 3 段階の用途である。他方，これらの活動能力を顕在化する生産効率必需品の 3 段階の用途は，再び繰り返すが，第 1 に，生活必需品，生活便宜品，そしてぜいたく品，第 2 に，現在の快楽のみを充足する用途と肉体的道徳的強さの蓄えを準備する用途，第 3 に，より低級な欲求を満足させる用途とより高級な欲求を刺激し教育する用途であった。われわれは，今や，人間は潜在的には誰もが幸福になることができる可能性をもつとマーシャルが期待していたと見なせる。なぜなら，段階的変化を支配する 2 次元的視点から見れば，同じ種の生物が同じ遺伝子をもつことに類似して，人間の活動能力，そしてその性格は同じようであるが，それが発現していないだけなのである。マーシャルは，人間が教養教育，技術教育，芸術教育によって，そして幼少期では家庭教育によって，学習し活動能力の高級化の段階を向上させていくことができると確信していたのである。このことは，本稿の最初の方の B1〈マーシャルの経済進歩観念の原点〉で見た両親による子どもの教育から D12 で見た芸術教育の重要性の指摘まで，本稿でほぼ一貫して明らかにしてきたことであった。このように，マーシャルにおいて教育とは，人間に潜在的には存在している活動能力，そしてその性格を健全に顕在化する役割を担っているのである（*Principles*, 9, 209－213）。しかも，上の 3 段階の用途の 3 番目は，教育することである。この意味は，ここでの文脈でいえば，より低級な用途を回避させ，より高級な用途を享受するように教育によって人々を導くということであり，そして人間のより高級な活動能力を顕在化することなのである。人々が健全で真摯な教育によって，上の 3 段階の用途で生産効率必需品を享受できるようになり，その段階に応じて人間の活動能力，そしてその性

格も高級化するのである。しかも，生産効率必需品は，物的源泉の役割を果たすものと非物的役割を果たすものとに分類されていた。マーシャルは，本稿の D7，D8，D9 でわれわれが示したように，物的源泉の影響よりも非物的源泉のそれを重視していたのである。そこでのパラグラフでマーシャルが，所得（＝物的源泉）の大きさだけでなく人間の性格（＝非物的源泉）の変化の重要性を指摘したのは，潜在しているはずの人間の活動能力を顕在化して高級化する役割において非物的生産効率必需品がより重要であると，見なしたのである。このように見ると，遺伝形質の発現を制御する役割と類似した働きをする生産効率必需品の 3 段階の用途で段階的に享受することは，人間の活動能力の高級化と密接に連動しているのである。非物的生産効率必需品の中で自由，変化，希望は，人間の活動能力を最高級化することでは，とくに重要であったことが今再確認できると思われる。すなわち，自由，変化，希望という 3 つの非物的生産効率必需品の健全な享受は，上の 3 段階の用途のなかで第 3 段階の用途に相当するであろう。ちなみに，この用途の第 2 段階は，上で示したように，「現在の快楽のみを充足する用途と肉体的道徳的強さの蓄えを準備する用途」であった。この用途とは，人間の活動能力，そしてその性格の中で肉体的性格だけでなく道徳的性格を高級化するはずである。道徳的性格は，われわれが新しく 3 段階に分類した人間の活動能力，つまりその性格では第 2 段階にあった。繰り返すが，この性格の高級化は，本稿の D8 の事例，あるいは本稿のかなり前の方で示した，B2 の「安楽水準」の改善の弊害や本稿の 1-2 の待遇が改善された奴隷の事例が示唆するに困難なのである。

### D17：中間段階としての道徳的性格の高級化の困難さ

本稿の D14 から D16 までの議論を要約してみよう。生物の段階的変化は次のようである。生物は，生命の発生の順番では，細胞から始まって，生存環境の変化に適応して，それがいくつか集まって統合化されて一つの段階を形成するが，それはまた，分化されて器官という形態で再び統合されて，段階を更新する。そして，環境の変化に適応した肉体的と精神的活動能力を備えた生物体になる。この分化と統合は発現を制御する遺伝子によっても支配される。しかも，生物は個体ではなく個体が無数に集まった種として存続する。つまり，生物は，個体ではなく集団で活動する能力も所持しているのである。

他方，人間とその経済的制度の段階的変化は，遺伝子そのものとして見なせる人間の原初的活動能力とそれを顕在化する物的・非物的生産効率必需品とその原初的用途から始まって，時と場所における多様な変化に適応して，いくつかが統合化されて一つの段階を形成するが，それはまた分化されて，肉体的性格と精神的性格，そして道徳的性格に分化

された，より高級な形態で統合化される段階に至る。そして，人間の活動が最高級な段階に到達できると思われるとき，人間の性格は，芸術的性格が新しく分化して，新しい3段階に統合される段階に更新される。しかし，この段階の分化と統合化は，これらの性格の顕在化の役割を果たす物的・非物的生産効率必需品の享受の段階的変化にも支配される。こうして，この段階の統合化では「生活水準」と「安楽水準」という上位概念の段階を派生させるほどに複雑で高級になると共に，人々の幸福あるいは貧困を支配するように統合化される。さらに，この統合化は，その別な側面では人々にさまざまな経済制度を作り出す機能に分化され，再び統合化されるであろう。そして，それは人間と経済制度の進歩と退歩において統合化されるであろう。われわれは今や，マーシャルの広義の経済学の段階的変化をこのように理解できるであろう。

この理解に立って，われわれが道徳的性格を人間の性格のなかで第2の，中間段階に位置づけたことの意味を明らかにしよう。それは，本稿のD14の最後の段落で示したことを確認することでもある。人間の性格に関する，われわれの3段階の分類が新しく変更する前では，「生活水準」を支配する人間の活動能力，そして性格は，知性，活力，そして自尊心であった。しかし，最高級の活動能力が形成される段階では，本稿のD11で示したように，第1段階は，知性と活力をあわせた人間の肉体的精神的性格，第2段階はその道徳的性格，第3段階は，その芸術的性格である。この変更の理由は，人間が卓越を求める欲望を動機とする活動ができるようになるには，マーシャルが芸術的性格が不可欠であると考えていることであった。この活動とこの性格の結合は，人間の活動を最高級な段階に導くのである。この変更は，人間の活動能力の段階的変化から見れば，人間の活動能力，そしてその性格が最高級に到達すると想定する変化なので，段階的変化の完了形である。このために人間の活動能力の中で新しい分化，芸術的性格の専門化が発生したのである。これに対応して，まず，古い3段階の第1と第2の段階が統合されてより高級化されねばならなかった。さらに古い段階では第3段階であった道徳的性格が新しい段階では第2の中間段階となり，芸術的性格が第3の，そして最高級の，段階として分化した。このように段階の更新は，古いものを抹消するのではなく，より新しい段階にふさわしい形態に変更したにすぎないのである。われわれは，この事例として，ニュートンや名も知れぬ漁師をすぐに想定できるであろう。特に，名も知れぬ漁師がその活動能力，そしてその性格の高級化の第3段階に達したとき，彼の操船熟練は人々の模範となることをわれわれは本稿のD6で指摘した。この職業では，彼は指導者的模範となるのである。これがD14の議論の要約である。だから，自由，変化，希望という3つの非物的生産効率必需品の健全な享

受は，本稿の C10 で示した 3 段階の用途のなかで第 3 段階の用途で享受されるべきであろう。他方，この用途の第 2 段階は，「現在の快楽のみを充足する用途と肉体的道徳的強さの蓄えを準備する用途」であった。この用途とは，人間の活動能力の中で肉体の強化だけでなく道徳的性格を高級化するはずである。もちろん，第 1 段階の用途は，生活必需品，生活便宜品，そしてぜいたく品として享受されるもので，ここには人間の活動能力，そして性格を高級化するという意味合いは強調されていない。以上からわれわれは人間の活動能力の高級化に関して，われわれの新しい 3 段階が生産効率必需品の 3 段階と対応している関係を見出すことができたと思うのである。

それにしても，本稿の D14 で触れたように，人間の活動能力が最高級に到達するのように，われわれの新しい 3 段階が統合化されるには人間の活動能力の高級化の程度は，どれほどなのか想像を絶すると思われる。この高級化が最高級の幸福をもたらすことができると想定したときに人間が出会う未知の困難も，人智の想定をはるかに超えると予想される。しかし，この未知の困難の克服を人間に可能にするのは，失敗を恐れず試行錯誤的に，しかも「習うよりも慣れろ」の精神で勇敢に挑戦することである。このためにもっとも重要な人間の活動能力，そして性格とみなされたものこそ，人間の自尊心の高級化であった。この高級化は，挑戦する人間がいかなる困難に対しても高度な自制心で人間の尊厳を失うことなく活動させると共に，卓越それ自体を求める欲望を動機とすることで自己の活動を最高級に向かわせる。他方では，人間の肉体的精神的性格は高級な芸術的性格との協同によって最高級にまで到達することが可能であるが，この最高級化のプロセスは，中間段階にある自尊心の高級化なしには不可能でもあった。繰り返すが，自尊心のよりいっそうの高級化は，本稿の「安楽水準」の改善の弊害や待遇が改善された奴隷の事例で暗示して，本稿の D7-D10 で示したようにかなり困難なのであった。それで，われわれは，自尊心の高級化の困難さ，この高級化の速度の遅さのゆえに，幸福と貧困は対置的性質をもつとマーシャルが見なしていたと思うのである。中間段階を境にして，それ以上の段階の状態にある人々は幸福に導かれやすく，それ以下の段階の状態にある人々は貧困に導かれやすいのである。

## エピローグ：経済的騎士道の提唱

最後にわれわれは今や，われわれが新しく中間段階と位置づけたと道徳的性格，自尊心が高級化するかどうかが人間の活動能力，そして性格の最高級化の鍵を握っていることを

主張できる。また，この主張によって本稿の D2 と D8 の両方の最後の段落とで指摘したが，マーシャルが次のように自尊心を位置づけていたことを，われわれは確認できると思うのである。そこではマーシャルは，自尊心という人間の道徳的性格の概念を強調して，自尊心（self-respect）なしでは人間の本当の幸福（true happiness）がありえないし，人間が経済進歩を促進するように生きる努力をさせる要素こそが健全な自尊心を高級化させると指摘していた。この指摘を言い換えれば，この要素こそは最高級の幸福の実現を導くものであるとマーシャルが考えたことを，われわれは今や推測できよう。このように，幸福あるいは貧困の物的源泉よりもその非物的源泉のほうがより重要であるとマーシャルは強調したのであった。かくて，われわれは，人間の活動能力の最高級の段階に至る経済進歩に関しては，非物的源泉がより重要であると，しかも自尊心の高級化がその原動力であるとマーシャルが見なしていた，と推定できるであろう。このことはマーシャルが『原理』の冒頭で人間の研究の方がより重要であると指摘した精神の表れであろう。しかし，人間の性格の変化は遅い。「自然は飛躍せず」である。この意味では，本稿の B1 の〈マーシャルの経済進歩の観念の原点〉で示したように，次世代の子どもを養育し教育できる準備ができるまでは結婚をしないという，人々の道徳的性格が重要であるというマーシャルの考えは，終始一貫していたとも思われる。また，1873年の若きマーシャルは，経済学研究に着手した時点で，この性格の高級化が人間の活動能力の高級化には不可欠であると認識していたと推定できるであろう。しかも，マーシャルは1890年に初版を刊行した『原理』の段階では，このことを認識していたのである。それは，経済的騎士道の提唱である（*Principles*, 719）。最高級の性格までに達することのできる人間は，以下のような性質をもつとマーシャルは期待したのである。

最高級の活動能力を保持する人間が行う最高級に建設的な活動の主要な動機は，未知な困難を克服して人々に公認された指導性を獲得したいとする騎士道的欲望である（*Marshall-1907, Memorials*, 331-2）[25]。この欲望を持つ人間の性格は，まず，彼の活動の報酬である物的生産効率必需品のより多くの獲得欲に目がくらむことはなく，この物的源泉の用途を健全に判断して享受できる。彼が求めるとすれば，それは，彼の仕事がみごとに成功することにたいする文明的に高度に啓蒙された知性的にも道徳的にも健全な人々の是認という栄誉である。彼の成功は，最高級の活動能力を持つだけでなく，その形成のプロセスで，詐欺とか，ライバルの破壊とか，労働者階級の抑圧などの非道徳的行動がないことが証明されなければならない。この証明こそは，彼が最高級に建設的な指導者であることを示すであろう。なぜならば，彼は困難の克服において彼の活動能力の高級化のとき利己的

に自由奔放に行動してはならないからである。しかも彼の活動の内容は，未知の困難への他人より一歩先行する勇敢な挑戦であるから，かれは強い自制の意志を持たねばならない。だから，彼は道徳的性格において，特に自分の利益を自制する自尊心において高級化しなければならない。この高級な自制心に関して，マーシャルは最高級に建設的なビジネスを実行できる生産者がライバルとの競争を自制することを求める事例を取り上げている。

上の事例は次のようである。たとえば，まだ活動能力，そしてその性格で最高級ではない生産者は，自分たちの好都合な利益を損なう程に低い価格で彼のライバルが参入することで怒り，有害な行為をしていると非難する。他方で，消費者は，より安価な良質な財を購入したいので，ライバルの参入を怒る生産者たちよりもより安価な財に大きな関心をもっている。このライバルの活動はもし成功すれば，社会全体にみれば利得を追加できる。つまり，もし，ライバルの参入の成功で価格の低下による社会全体の利益の増加分が既存の生産者の損失よりも大きければ，高級な自尊心に従えば，既存の生産者は参入者を非難することを控えるべきなのである。なぜなら，自尊心は，われわれがその高級化の困難さを指摘してきたことからすれば，マーシャルが道徳的活動の根本的基準と考えていたと思われるから，これに反する活動は抑制されなければならない。このような非道徳的活動は，自らを特権的地位にあると排他的に主張することに起因している。つまり，「この特権の形成は，この特権的地位以下の階層の有能な人々が向上することを阻止するために自分たちの力を結合して使うのである。反社会的競争を抑制するという名目の元で，この特権的生産者は，より有能で下層な人から新しい経歴を追求する自由を奪うのである。もし，この有能な人間が消費者にサービスを提供することができれば，彼の付与するサービスの利得は，彼が彼の競争者に振りかける小さな集団の害悪よりは大きいであろう」(*Principles*, 8)。このように，この事例では，マーシャルは，次の二つのことで非難しているのである。第1に，特権者の損失が社会全体の利益の増加よりも小さいことからこの特権者に自分の利益を自制すべきであること，第2に，現在では，ライバルの生産者は特権者よりも下層階級であるが有能であるがゆえに，新しい変化に対応して新しい活動に，つまり，特権者よりも先行してより安い価格に，挑戦していることをこの特権者が否定することである。なぜなら，特権者を有利にしている条件が変化して，ライバルの生産者の方が有利になるように変わっているかもしれない。変化に適応して成功することこそ，人間の活動能力の高級化への途であった。かくて，このような事例の場合，特権的生産者[26]は，本稿の D2 でも簡単に触れたように，反社会的行為が禁止されるべきであるから，ライバルと

の競争を一時停止すべきなのである。このような場合，既存の生産者はライバルを競争の相手とはすべきではない。この生産者は，かれの競争の形態がたとえ最善の形態であっても特権階級化する限りでは相対的には害悪を発生させるのである。この自制によって，特権的生産者は自らの道徳的性格を高級化し，やがて最高級に達するであろう。マーシャルは競争という用語が道徳的善悪を含意することがあるために，競争という用語よりも「産業と起業の自由，短くすれば経済的自由（*Freedom of Industry and Enterprise,* or more shortly, *Economic Freedom*）という用語を選好した（*Principles,* 9–10）。この選好は，この特権的生産者の活動の事例に対応していると見なされるであろう。

したがって，マーシャルは，この事例に示される道徳的性格において騎士道的精神を具現できるように人間が変化したとすれば，次のように活動するであろうと期待したのである。すなわち，この生産者は，全体の人々の善，公共の善（public good）を目的として活動するようになるのである。そしてもし，このような活動が社会全体で行使されると，次のような世界が登場するであろう。「すべての人間が完全に徳の高い状態（virtuous）である世界では，競争はその場所をもたない。また同じく，私有財産と私的権利のどの形態もその場所をもたない。人間は義務について考えるだけである。誰も彼の隣人よりも多い分け前を生活便宜品や贅沢品で持つことを望まない。強力な生産者というものは容易に苦難に耐えるのであって，そのうえ，彼らは，弱い生産者がより少なくしか生産できないのにより多く消費すべきだ，と望むであろう。このような強い生産者たちにとっての幸福についての考えでは，かれらは一般的善（general good）のために，彼らのもつすべての活力，発明能力，先取性（initiative）において働くのである。かくて，人類は，自然との競争においていつも勝利を手に入れるはずであろう。」われわれが生産効率必需品の 3 段階の用途で議論してきたように，この必需品を生産することにおいて最高級な活動をするだけでは十分ではない。この必需品は第 3 段階の用途で健全に享受されなければならない。成功して富裕階層になった人々は，一般的善，つまり公共の福祉のために彼らの物的・非物的生産効率必需品を寄付などをして政府を通して貧困という最大の害悪を地上から取り除くことに大きな貢献をするであろう（*Principles,* 719）。

マーシャルは，人々が一般的善に貢献する活動をするという想定を，古代ギリシア時代にプラトンが描き，その後で詩人や白日夢者たちがその到来を予言した，黄金時代（Golden Age）のようなものである，という。しかし，マーシャルはこの想定の状態を，人間の，特に人間の性格の，段階的変化における「人間の性質の不完全性を無視していることでは，道徳的に重大な悪である」と見なして批判している（*Principles,* 7–9）。この状

態が簡単に実現できるものではないことは，マーシャルだけでなくわれわれも，そのように見なすことができよう。しかし，マーシャルは，「経済的騎士道の社会的可能性」は現に存していると信じたのである。ここにおいて，われわれが規定した中間段階としての自尊心の高級化の困難さをマーシャルが確信していたことを見いだせると思われる。これと共に，このような状態を，黄金時代とマーシャルが呼んでいることは，経済進歩の困難さを改めて示すものでもあろう。この時代は，いつのときでもどこの場所でも「泡沫な夢」でしかなかった[27]。

## 注

(1)　進化論的経済学という用語が本稿で何を意味するかについては，次の論文を参照されたい。*礒川－1990b,* pp. 235，253－254，258－265；*礒川－1993,* pp. 91，98－106；*礒川－1988* の〈セクション3：マーシャルの進化論的倫理学観〉。特に，この最後の論文は，本稿が人間の道徳的性格を取り扱っていることから結びつきが強いが，典拠の煩雑さを省略するために，直接の言及は最小限にしたが，この論文は本稿の理解を大いに助けるはずである。

(2)　マーシャルは性格という用語に関して，道徳的性格という用語をたくさん使用しているが，肉体的性格，精神的知的性格という用語を使用していない。しかし，われわれは，本稿の議論の中心テーマが人間の性格であることから，本稿での論旨を強調するために，人間の性格の3側面を明示する用語をあえて使用する。というのは，われわれは，マーシャルが，彼の用語法を，論じようとする内容に応じて使い分けている，と思うからである。たとえば，本稿の1-1で取り扱う，「生活水準」の定義の中で人間の性格の3側面は「知性，活力，自尊心」と表現されている。このように簡潔な表現が適切であり，かつ可能であると，マーシャルが考えているのである。事実上，自尊心という用語は人間の道徳的性格という用語とほぼ同義語といってよいほどに位置づけられている。もちろん，より正確には道徳的性格には，自制心だけでなく，他人への尊重心や相互信頼なども含まれるはずである。

(3)　われわれは本稿で使用した文献の典拠を示すために，次の形式で文末に挿入する。本稿の末尾におかれている参照文献の一覧で示している，短縮表記と，該当ページ番号との形式である。

(4)　マーシャルには，material と personal という用語の区分が存している（*Principles,* 54)。しかしわれわれは非物的という用語で人間の活動能力を意味させたい。マーシャルは人間の活動能力が人間の活動する環境，つまり人間が活動する場所と時代に適応することによって形成されると考えている。そこでわれわれは personal の用語が人間そのものを生産要因として意味させる傾向があるのに対して，人間の活動能力とそれが活動する環境を合わせて非物的という用語を使用する。

(5)　われわれは，今は前置き的な議論をしているので，もう一つ回り道をしよう。この段落でわれわれが定常状態を議論したマーシャルの論文「経済学における生物学的類似と力学的類似」(Mechanical and biological analogies in Economics)（*Marshall-1898*）は実は，「分配と交換」(Distribution and Exchange）という論文から，マーシャルの死後に公刊された，*Memorials of Alfred Marshall*（*Memorials*）に転載されるときに，元のままではなく抜粋された論文である。このマーシャル追悼論文集を編集したのは彼の

弟子のピグーであった。では，この抜粋作業はピグーが行ったのか。これについてマーシャルの伝記を書いたグレーネヴェーゲン（P. Groenewegen）はおもしろいエピソードを書いている。『原理』を含めて3つの著作を公刊したマーシャルは，最晩年の1920年代にあっても，経済と社会の進歩に関する大著を書こうと努力していた。しかし，彼の体力と知力はもう消耗していた。そこで彼は，すでに公刊していたものから，この進歩に関する，既刊の著作を集めて一つの論文集にしようと考えた。このために，彼はどの著作を収録するか，何か修正するかといったことを記したノートを作成したのである。この指示に従って，ピグーはマーシャルの追悼論文集を編集したのではないか。このように，グレーネヴェーゲンは推測している（*Groenewegen-1995,* 730-1；*Groenewegen-2005,* 30－36）。もしこの推測が真であれば，この論文の抜粋作業はマーシャルが行ったかもしれない。そして，抜粋後の論文には，人間の性格が変化することが示されている。このことは『原理』の議論の仕方を示唆している。つまり，「他の事情にして等しければ」という工夫で，『原理』では分析操作上では時間を固定したが，人間の性格を固定する意図をもたなかった。だから，『原理』の序文ではマーシャルは，経済学者のメッカは経済生物学であると強調したのではあるまいか。

⑹　われわれは今まで，人間性格などの高級化，低級化あるいは悪化の用語を規定していなかった。本稿の A3，A4 での規定が本稿全体で使用される。

⑺　なお，人間の幸福にはその政治活動も大きな影響を与えると考えられるが，この考察もわれわれは除外する。このことに関しても本稿の D9 の注⒆を見よ。

⑻　だが，われわれは，本稿の D11 で示すように，芸術的性格の新しい分化に応じて幸福あるいは貧困の源泉は，肉体的精神的性格，道徳的性格，そして芸術的性格の3つの段階の分類に変更する。この変更は，本稿の重要な論点の一つとなっている。この変更の主たる理由は，D11 で示されるが，予告的には次の通りである。それは，人間の活動が最高級にまで高級化するほどに，人間の活動能力の段階的変化の段階が達することである。

⑼　この言葉をマーシャルは『産業経済学』と『原理』の議論では違う意味で使っている。この相異については本稿の 2-2 の注⒁をみよ。

⑽　われわれは「安楽水準」（standard of comfort ）を以前に検討したことがあるが，そこでは，この水準を「快楽水準」と訳した（*礒川－1990b,* 260）。

⑾　この時代のイギリスに関する，救貧行政の出来事には*礒川-1989,* pp. 130-2 で少し言及した。

⑿　この概念についてわれわれは，以前に取り扱った。そこでは生産効率必需品を効率必需品と呼んでいる（*礒川－1990b,* 259）。

⒀　この用語に関しては，注⒁をみよ。なお，マーシャルは『産業経済学』の段階では，「快適水準」の概念に関してミルのそれを参照したように思われる。なぜなら，1870年代の後半でもミルの『原理』は，イギリスでは経済学の標準的教科書であるだけでなく，マーシャルは1873年の「労働者階級の将来」（1873年；*Memorials,* 101-118に所収），「ミル氏の価値理論」（1876年；*Memorials,* 119－133に所収）という論文からも知られるように，全体としてはミルの経済学を高く評価していた。この評価については，*礒川－1980,* pp. 54－58 を参照されたい。そこでは，マーシャルの未完の論稿である「外国貿易に関するモノグラフ」（reproduced in *EEW.* vol. 2）での議論との関係でマーシャルがミルの議論を高く評価していることが論じられた。この議論は『原理』の段階の議論でも有効と思われる。ミルの「快適水準」に関する言及は，*Mill-1848,* vol. 2，pp. 283-4，311-6，34-2，696-7；vol. 2，753，828－30，1078等にある。本来なら，ミルのこの概念をマーシャルとの対比で検討すべきであろうが，それは将来の課題とする。なお，われわれは，standard of comfort を快楽水準と訳したことがある。これについては，注⑽を見よ。

⒁　マーシャルは，standard of comfort という用語を『産業経済学』と『原理』とで明

らかに違う概念として使っている。そこで本稿では，この用語を前者の著作のときには「快適水準」と訳し，後者の著作では「「安楽水準」」と訳すことにした。(「安楽水準」の用語の訳に関する注⑽も参照のこと。)マーシャルは前者の著作を後者の著作の出版と共に絶版にしたが（*礒川-1990b,* p. 238)，その原因は彼の夫人との共著で教科書であったとしても，マーシャル本来の経済思想がうまく表現されていないことであるといわれている。その一部の理由は，2つの著作における standard of comfort の概念の相異によってみごとに示されている。前者の著作での概念は，ミルの概念に類似しており，マーシャルの独自性があまり見られない。もちろん，ミルの概念とマーシャルのそれとの類似・相異は上の注⒀で述べたように今後の検討課題としたい。

⒂　本稿の1-2の『原理』の議論でも同種な事例を使っている。

⒃　マーシャルは，『原理』では4つの生産要因，労働，資本，土地，組織を指摘して，これらを第4編で13章にわたって分析している。労働の生産効率に関しては主として，第5章と第6章とで論じられている。『産業経済学』では自然と人間との力をいう2大区分をしている（*EOI,* 9)。マーシャルの二つの著作における生産要因の取り扱いの仕方の相違は，外見的に見ただけだが，この二つの著作の間でマーシャルの経済思想の変化の一端を暗示している。しかし，このことは本稿では取り扱わない。

⒄　マーシャルは1879年頃には，外国貿易に関するモノグラフ（reproduced in *EEW,* vol. 2）を執筆していた。この中には，進化論的経済観を示唆する記述がある（*礒川-1990b,* 253-4)。

⒅　この引用文中の｛　｝部分は，筆者が追加。もちろん，この引用文中の「所得」は，本稿の C5 で議論した「純優位」net advantages の概念の方が，人々の道徳的性格の品位にも関心を寄せる場合には適当と思われるが，われわれは議論の簡単化のために使用しない。なお，マーシャルは「純優位」の用語を『原理』でも使っている（*Principles,* II. iv，§2，73)。

⒆　本稿の A5 で示したように宗教的能力をわれわれが除外していることに関連して，政治的活動能力にも本稿で言及しないことに少しだけ触れておこう。この活動能力をマーシャルは幸福の源泉として，つまり人間性格の要素として考慮していると思われる（*Principles,* 8)。さらに，本稿の議論では，『産業経済学』の生産効率の議論の中で，道徳的性格の範疇で労働者が政府によって保護されると同時に政府の無用な干渉からも保護されなければならないと述べている。このように，政府が保護と無干渉という二重な態度をとることによって，労働者は，生産効率を向上させることのできる完全に自由な経済活動が可能なはずである。このようにもマーシャルは考えていた。このことは『原理』の議論にも反映されているはずである。詳しい検討は別の機会にするが，幸福の源泉として望ましい形の政治的活動能力の骨格はマーシャルの考えでは次のようである。政治制度は民主制であり民主的政府が健全に活動しつつ，官僚制の弊害を抑制されている。この制度のもとで，この政治的活動能力とは，個人の自由を尊重することと人びとの生命・財産の安全の確保をもって正義の概念の中枢であるという強い自覚を持って活動することである（*Principles,* 554-5，603-4)。これがマーシャルが是認した政治的活動能力のごく簡単な表現であろう。したがってこの活動の目的は，人びとの思想・信条の自由の維持・発展と公的秩序の安寧との両立である。いささか結論を急ぎすぎるが，幸福の源泉としての人間の性格として政治的活動能力を考えると，この活動能力は今までの4つの宗教的活動能力，道徳的活動能力，知性的活動能力，芸術的活動能力が民主的政治制度のもとで活動する状態であると考えられる。つまり，これら4つの活動能力が適切な組合せで配合されて，民主的な政治的活動能力が形成される。このことは，人間の活動能力の段階的変化が生物の進化のプロセスのそれと類似であることから容易に類推される。民主制が政治制度の発達のプロセスで生物の器官の進化のように進化してきたとしよう。政治的活動能力は，人間の性格の発達の中でもっとも遅れて，それゆえもっともゆっくりと発達してきた。そして，それは，近代という歴史的時期に人間の性

格に独立した地位を占めた。こうして，それは，他の4つの要素と累積的相互依存しながら，人間の幸福に影響するであろう。しかし，この影響の本格的検討は，実はマーシャルの自由論の検討にほかならない。今のところわれわれは，マーシャル流の分析の方法に従って，「他の事情にして等しければ」の条件の中に封入しておく。なお，マーシャルの政治に関する議論については，*Groenewegen-1995*, Section 19，570ページ以降で詳しく検討されている。

⒇ J. K. Whitaker ed., *EEW*, vol. 1，6-12；*礒川－1988*, 28を参照。

㉑ この除外に関しては，注⒆を参照。

㉒ われわれはこの活動能力を本稿の考察の対象から除外している。注⒆をみよ。

㉓ われわれはこれら3つの要素について別の角度から論じたことがある。このパラグラフの以下の議論に関しては，*礒川－1990b*, 259－61を参照されたい。

㉔ もちろん，この考えが，生物学の進化論の定説であるかどうかをわれわれは考慮していない。この考え方は，最近発達の著しい，古生物学などにもとづくグールドの進化学説の一部分から借用した。この借用でわれわれが留意した点は一つの点のみである。彼がダーウィンの進化の学説を進化には偶然性の要素があるとして一部で修正したが，生物の進化に関しては基本的にはダーウィン主義者であることである。もちろん，われわれが正しく借用できたかどうかは問題があるかもしれない。この借用に当たって筆者は，次の4点の著作を特に参考とした。第1に，*グールド－1995*，第1部，特に11－16ページ，第2にこの翻訳書の巻末におかれている，渡辺政隆「スティーヴン・ジェイ・グールド―進化史のメッセージを語り伝える」，433－439ページ，第3に，*グールド－1993*，第5章，特に459－474ページ，最後にこの翻訳書の最後におかれている翻訳者である渡辺政隆氏の後書き，505ページである。

㉕ われわれは，本稿のこのパラグラフで論じる内容，特に，生産効率必需品，特権階級の排他的利益の追求の弊害，最高級に建設的な活動について，*礒川－1990a*, 69－75で検討したことがある。そこでの議論は，経済変化の段階的変化がコスモポリタンのレベルで展開されていた。このレベルの段階的変化の論理は本稿で展開したそれと同一なので，このパラグラフでのわれわれの議論の理解を促進すると思われる。そこでは，特権階級の排他的利益の追求がその力を弱めると共に，高級な建設的活動がその力を強めていることが，対置的に論じられている。

㉖ この用語の意味に関しては，*Principles*, p. 47 を見よ。

㉗ 経済進歩に関する著作を完成することにマーシャルは，注⑸で指摘したように，最晩年の1920年頃でも挑戦していた。この著作は，残された草稿的ノートから見ても，かなりの分量の著作になるはずであった。これらのノートの中には，人間の道徳的性格の高級化を取り扱っていると思われるものも存している（*Groenewegen-1995*, 728－730）。このことは，本稿のわれわれの主張の正当性の一部を傍証すると思われる。しかし，この主張をもっと強化するには，マーシャルが生存中に刊行した *Industry and Trade*（*IT*）と *Money, Credit and Commerce*（*MCC*）をまず検討しなければならないであろう。だが，本稿におけるマーシャルの思想の検討は，『原理』の議論を中心にしており，しかも，『原理』までの彼の著作しか対象にしていない。ただ，1907年の「経済的騎士道の社会的可能性」という論文（*Marshall-1907*）は例外である。しかし，この騎士道は『原理』ですでに取り扱われていた。この空白を埋めるためにわれわれが今述べることができるのは，人間と経済制度の段階的変化がわずか3段階ではなく，もう少し複雑な段階の設定をしなければならなくなることである。というのは，*Industry and Trade* での議論では，経済進歩は，コスモポリタンなレベルでの産業上の主導権の段階的変化が，複数の国の主導権の交代として展開されているからである。たとえば，マーシャルはイギリスの主導権（industrial initiative）の議論を展開している。産業上の主導権とは，生物学の進化の段階的変化との類似で見れば，経済環境の変化の適応に成功した場合に発揮される，当該国の産業上の特徴である。この著作の第1編の第3章では，イギリスの産

業上の主導権の形成の基盤的条件が，その第4章ではこの主導権の成長過程が，そしてその第5章ではイギリスの主導権が他の国からの挑戦に曝されつつあることが，論じられている（*IT*, Book I, chs. iii, iv, v)。このようにイギリスの産業上の主導権に関して，生成，生長，そして成熟，衰退のライフサイクルが検討されている。これらを総合的に検討するには，いくつの種類の段階的変化が必要なのか，今は予想がつかない。

## 参　照　文　献

{ノート:以下に示したマーシャルの著作にはすべて邦訳が存している。これらは筆者の研究過程で参考にしたが，本稿での典拠の対象とはしなかった。}

〔1〕 *Groenewegen-1995*: Groenewegen, P., *A Soaring Eagle: Alfred Marshall 1842–1924*, Aldershot: Edward Elgar, 1995.

〔2〕 *Groenewegen-2005*: Groenewegen, P., 'A Book That Never Was: Marshall's Final Volume on Progress and His System of Ethical and Political Beliefs,' *History of Economic Review*, No. 42, Summer 2005, pp. 29－44.

〔3〕 *Marshall-1873*: 'The Future of Working Classes', A Paper read at a Conversazione of the Cambridge "Reform Cub," Nov. 25, 1873; reprinted in *Memorials*, pp. 101－118.

〔4〕 *Marshall-1876*: 'Mr. Mill's Theory of Value', *Fortnightly Review*, April, 1876; reprinted in *Memorials*, pp. 119－133.

〔5〕 *EOI*: Marshall, A. and M. P., *Economics of Industry*, 1st ed., 1879, 2nd ed., 1881.

〔6〕 *Principles*: Marshall, A., *Principles of Economics*, London: Macmillan, 1st ed., 1890, 9th (variorum) Edition 1961, vol. 1.

〔7〕 *Marshall-1898*: Marshall, A., 'Mechanical and biological analogies in Economics', Abstract from A. Marshall, 'Distribution and Exchange', *Economic Joural*, 1898, vol. 3, 37－59, reprinted in *Memorials*, pp. 321－318.

〔8〕 *Marshall-1907*: Marshall, A., 'The Social Possibilities of Economic Chivalry,' *Economic Journal*, March, 1907, vol. 17, pp. 7–29, reprinted in *Memorials*, pp. 323－347.

〔9〕 *Memorials*: Marshall, A., ed. by A. C. Pigou, *Memorials of Alfred Marshall*, London: Macmillan, 1925.

〔10〕 *IT*: Marshall, A., *Industry and Trade: A Study of Industrial Technique and Business Organization; and of Their Influences on the Conditions of Various classes and Nations*, London: Macmillan, 1st ed., 1919.

〔11〕 *MCC*: Marshall, A., *Money, Credit and Commerce*, London: Macmillan, 1st ed., 1923.

〔12〕 *EEW*: Whitaker, J. K. ed., *The Early Economic Writing of Alfred Marshall 1867－1890*, London: Macmillan, 1975, 2 vols.

〔13〕 *Mill-1848*, J. S. Mill, *The Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, 1st ed., 1848; *The Collected Works of John Stuart Mill*, 2 vols., ed. John M. Robson, introduction by V. W. Bladen, Toronto: University of Toronto Press, London: Routledge and Kegan Paul, 1965.

〔14〕 *Smith*: Smith, Adam, *An Inquiry into the Natures and Causes of Wealth of Nations*, 1st ed., 1776; *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, eds. by R. H. Campbell, A. S. Skinner, and W. B. Wood, Oxford; Clarendon Press, 1976；邦訳『国富論』，水田洋訳，「世界の大思想15」，河出書房，1965年上・

下巻。
〔15〕 *グールド－1993*：S・J・グールド，渡辺政隆訳『ワンダフル・ライフ―バージェス頁岩と生物進化の物語』早川書房，1993年。
〔16〕 *グールド－1995*：S・J・グールド，浦本・寺田訳『ダーウィン以来―進化論への招待―』ハヤカワ文庫 NF，早川書房，1995年。
〔17〕 *礒川－1980*：礒川　曠「初期マーシャルの一研究―「賃金基金説」からの脱却への道―」『商経学叢』第26巻第３号（通巻第66号），March 1980，pp. 54－58。
〔18〕 *礒川－1988*：礒川　曠「マーシャルの進化論的倫理学の研究―ハーバート・スペンサーとの関係―」『商経学叢』第35巻第２号（通巻95号），1988年12月，pp. 15－37。
〔19〕 *礒川－1989*：　礒川　曠「マーシャルにおける経済と倫理」『近代経済学の形成と展開』（昭和堂，1989年，pp. 127－153）。
〔20〕 *礒川－1990a*：　礒川　曠「進化論的経済学の範囲―未完の体系」『マーシャル経済学』（橋本昭一・編著，ミネルヴァ書房，1990年，pp. 52－95）。
〔21〕 *礒川－1990b*：　礒川　曠「マーシャル経済学体系の形成の発端と終了」『商経学叢』第37巻第１，２，３号（通巻100，101，102号），1990年11月，pp. 235－274。
〔22〕 *礒川－1993*：礒川　曠「マーシャルとシジウィック―経済学観の相異の源泉について―」『マーシャルと同時代の経済学』（ミネルヴァ書房，1993年，pp. 83－119）。